

磯ヶ坂遺跡 ほか

— 経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査 —

磯ヶ坂遺跡

六角遺跡

原遺跡



2014年（平成26年）3月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会

磯ヶ坂遺跡 ほか

— 経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査 —

磯ヶ坂遺跡

六角遺跡

原遺跡





土師器（古墳時代前期／上段・左下） 墓書き土師器（平安時代／右中段） 中世陶器（鎌倉～南北朝時代／右下）



近世墓出土遺物（江戸時代中期）

序 文

蔵王山麓の豊かな自然に恵まれた私たちの蔵王町は、大昔から大変住み良い土地だったのでしょう。私たちの足もとに埋もれている多くの遺跡が、悠久の時をこえてそのことを力づよく物語っています。

蔵王町の北東部に位置する円田盆地では、平成 8 年度に大規模なほ場整備事業が計画されました。事業の計画区域には多くの遺跡が含まれていたことから、文化財の保存についての協議が重ねられました。この結果、水田となる部分は盛土によって遺跡を保存し、道路や水路などの工事によってやむを得ず破壊される部分について、平成 13 年度より記録保存のための発掘調査を行なうことになりました。

本書において皆さまにご報告するのは、平成 21 年度に行なった磯ヶ坂遺跡と、平成 23 年度に行なった六角遺跡・原遺跡の発掘調査成果についてです。磯ヶ坂遺跡の発掘調査では、縄文・弥生時代の土坑や平安時代の竪穴住居跡、江戸時代の墓地など、各時代の人々の活動の痕跡が確認されました。また、小規模な調査ではありますが、六角遺跡・原遺跡では古墳・平安時代の竪穴住居跡が確認されました。

これらは、蔵王山麓に暮らした当時の人びとの暮らしぶりの一端を窺い知ることのできる貴重な成果です。本書にまとめられた学術的成果が、広く皆さまに活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

ほ場整備事業計画の策定と実施にあたっては、宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町土地改良区、地元地権者の皆さまより文化財の保存と発掘調査実施へのご理解とご協力をいただきました。地元作業員の皆さまにはさまざまな気象条件の下、野外での発掘作業にあたっていただきました。ご協力を賜りました関係各位の皆さまにあつく心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、先人の残した文化遺産を町民の宝として永く後世に継承していくことは、これから地域色豊かなまちづくりには欠かせない大切なことであります。今後とも、町民各位のご理解とご協力を念願して序といたします。

平成 26 年 3 月

蔵王町教育委員会
教育長 佐藤 茂廣

例　　言

1. 本書は、藏王町大字小村崎字磯ヶ坂地内に所在する磯ヶ坂遺跡ほかの緊急発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う事前調査として行なったものであり、発掘調査から整理作業および本書の作成に至る一連の業務は、調査原因となった事業の主体者である宮城県大河原地方振興事務所を委託者、藏王町を受託者とする業務委託契約を締結し、藏王町教育委員会が平成21・23年度に発掘調査・基礎整理作業、平成25年度に本整理・報告書作成作業を実施した。
3. 本発掘調査と整理作業は藏王町教育委員会が主体となり、教育総務課文化財保護係が担当した。職員体制は下記のとおりである。

教育長 山田 暉 (-H22) 佐藤 茂廣 (H23-)

教育総務課長 大沼芳國 (-H22) 高野 正人 (H23-24) 佐藤 则之 (H25)

課長補佐 阿部 宏 (-H21) 高野 正人 (H22) 佐藤 浩明 (H23-)

文化財保護係長 佐藤洋一 主事 鈴木 雅

文化財臨時職員 庄子 善昭・我妻なおみ・鈴木(山戸)和美 (H21・23・25)

中沢祐一 (H21)・渡邊香織 (H23・25)・海藤 元 (H25)

発掘調査作業員 我妻武夫・太田忠義・亀井勇二・佐藤 義晴・鈴木光一・竹内求・堀内博・山家次郎 (H21・23)・我妻英子・我妻儀八・我妻大・榎沼一郎・芦立清・市川康雄・大沼さつき・大庭慶志郎・加藤力・加藤初子・加藤洋一・熊坂信子・小杉佐和子・後藤扶美江・小林四郎・小林 美智子・佐藤 和子・佐藤貴美子・佐藤 照子・佐藤 福治・佐藤 摩里恵・眞貝誠一・鈴木春夫・鈴木勝・清野政男・竹内 恭子・武田憲繁・樋口良子 (H21)・菅野慶一・高田太郎・高橋 貞 (H23)

室内整理作業員 我妻英子・大庭慶志郎・小杉 佐和子・小林 四郎・小林 美智子・佐藤 貴美子・佐藤 里栄 (H21・23・25)・市川康雄・竹内 恭子 (H21)・岩佐若奈・佐藤 かおる・佐藤 恵子・松田 律子 (H23・25)・我妻智子・菅野慶一・松崎 祐二 (H25)

4. 本発掘調査の整理作業は、下記の調査員が中心となり、調査員全員で協議しながら進めた。

遺構：我妻なおみ・海藤元・土師器・木製品・金属製品・石器・石製品：庄子 善昭

陶磁器：庄子 善昭・渡邊香織・縄文土器・弥生土器：渡邊香織・統括：鈴木 雅・庄子 善昭

5. 磯ヶ坂遺跡出土金属製品のX線透視については東北歴史博物館 及川規氏の協力を得て実施した。

6. 本発掘調査の整理作業および本書の作成に当たり、下記の諸氏からご教示を得た(敬称略・五十音順)。
相原淳一 及川規 太田昭夫 加藤学 黒田篤史 佐藤敏幸 堀江格

7. 本書に掲載した遺構実測図のトレース、遺物実測図の作成およびトレース、遺物拓本、図版レイアウトなどは文化財臨時職員が中心となり、室内整理作業員がこれを助けた。

8. 本発掘調査と整理作業・本書の作成に使用した撮影機材・ソフトウェア等は下記のとおりである。

現場写真撮影 カメラ：NikonD100・NikonD70s・NikonD600／レンズ：AF-S NIKKOR 18-70mm f3.5-4.5G ED

遺物写真撮影 カメラ：NikonD90／レンズ：AF MICRO NIKKOR 60mm F2.8 D・AF-S NIKKOR 18-105mm f3.5-5.6G ED VR／ストロボ：SUNPAK auto544・Nissin Di866 MARK II／赤外線カメラ：RICOH R8 (α)／赤外線LEDライト：AE-LED56
撮影ソフトウェア：Nikon Camera Control Pro2／現像ソフトウェア：Adobe Photoshop Lightroom5.0

遺構実測図トレース、写真画像処理、図版レイアウト

Adobe Photoshop CS4・CS5.1 / Adobe Illustrator CS4・CS5.1 / Adobe InDesign CS4

9. 本書の作成は下記の調査員が中心となり、本文は調査員全員の協議を経て鈴木 雅が執筆した。

本文執筆・編集：鈴木 雅・遺物写真撮影：庄子 善昭・表作成・校正・照合：鈴木 和美

10. 本発掘調査で出土した遺物および写真・図面等の記録資料については、藏王町教育委員会が一括して永久保管している。

凡　例

1. 本発掘調査における測量原点の座標値は下記の測地系を使用し、測量成果表は下記の調査区配置図に記載した。調査区配置図・遺構図における方位は座標北を示している。
磯ヶ坂遺跡：世界測地系（第8・13図）、六角遺跡・原遺跡：日本測地系第X系（第32図）
2. 本発掘調査では、平板測量により遺構配置図を作成し、整理作業において図上で調査区内の工事用測量基準杭を基準とする3mグリッドを設定し、東西・南北方向に数字を付した。
3. 本書に掲載した挿図・写真図版のうち、地図・空中写真は下記のものを使用して作成した。
第3図：5万分の1都道府県土地分類基本調査 地形分類図「白石」（宮城県、昭和58年調査）
第4・57図：2万5千分の1地形図「村田」電子国土配信データ（国土地理院、平成13年修正）
磯ヶ坂遺跡 写真図版1-2：空中写真 電子国土配信データ（国土地理院、昭和31年米軍撮影）
4. 本書で使用した土色の記述については、「新版標準土色帖」（小川・竹原2005）を参照した。
5. 本書で使用した遺構番号は、遺構種別に関わらず調査時に付された連続する番号を使用した。
6. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
SI：竪穴住居跡、SA：柱跡、SE：井戸跡、SK：近世墓・落とし穴・土坑、SD：溝跡
7. 遺構・遺物実測図の縮尺は下記の通りで、それぞれ図中にスケールを付して示した。
調査区配置図：1/2,500、遺構配置図：1/300・1/400、遺構平面図：1/60（竪穴住居跡・井戸跡・近世墓・落とし穴・土坑）・1/100（柱跡・溝跡）・1/200（溝跡）、遺構断面図：1/60
土器・陶磁器・木製品：1/3、石器・石製品：1/1・2/3・1/3・1/4、金属製品：1/1・2/3・1/3
8. 遺構平面図において、柱穴に柱痕跡および柱材抜き取り痕跡、柱材圧痕が確認され、柱の位置・形状・規模等が推定できる場合には、灰色の塗り ■■■ (15%) で示した。
9. 遺物実測図において、内面に黒色処理を施す土器は、内面右側の一部を灰色の塗り ■■■ (10%) で示した。また、付着物、変色、摩耗が観察される場合には、その範囲を灰色の塗り ■■■ (25%) または破線○○、一点鎖線□□で示し、図ごとに凡例を付けた。
10. 遺構断面図に付した土層注記表の備考欄では、下記の略号を使用して記載した。
(柱掘)：柱穴掘方理土、(柱痕)：柱痕跡、(柱抜)：柱材抜き取り痕跡
(堆)：堆積土、(崩)：崩落土、(構)：構築土、(人為)：人為的理土（特記ないときは自然堆積土）
11. 遺構の説明では下記の表記方法を使用して記載した。
方位 (例) 北を基準として東に10度傾く：「N - 10° - E」
重複関係 (例) AよりBが新しい：「A→B」、同時機能：「A = B」、新旧不明：「A - B」
柱間寸法 柱痕跡が確認されなかった柱穴は中心点を基準に計測し、()付きで示した。
12. 遺物観察表で、器面調整・加工の前後関係が確認でき、Aの痕跡よりBの痕跡が新しい場合「A→B」、前後関係が不明の場合「A・B」のように記載した。また、()内の数値は残存値である。墨書き土器で判読不能の文字は□で記載した。
13. 引用文献および執筆にあたり参考にした文献については巻末に一括して掲載した。

調査要項

1. 磯ヶ坂遺跡

遺 跡 名：磯ヶ坂遺跡（宮城県遺跡登録番号：05189 遺跡記号：I S）

所 在 地：宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字磯ヶ坂・狐塚・向原・門下・青木屋敷地内

発掘調査面積：8,075m²（西部地区 3,972m²、東部地区 4,103m²）

調査期間：平成 21 年 4 月 2 日~5 月 30 日（西部地区）、10 月 1 日~11 月 30 日（東部地区）

調査原因：経営体育成基盤整備事業円田 2 期地区区画整理工事（県営ほ場整備事業）

調査主体：蔵王町教育委員会 教育長 山田 紘

調査担当：蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係

調査員：佐藤 洋一・鈴木 雅（教育総務課文化財保護係職員）

庄子 善昭・我妻 なおみ・山戸 和美・中沢 祐一（文化財専門職臨時職員）

調査指導：宮城県教育庁文化財保護課

調査協力：宮城県大河原地方振興事務所・蔵王町土地改良区・蔵王町小村崎区

2. 六角遺跡・原遺跡

遺 跡 名：六角遺跡（宮城県遺跡登録番号：05112 遺跡記号：U E）

原 遺 跡（宮城県遺跡登録番号：05111 遺跡記号：U F）

所 在 地：六角遺跡：宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字上野・上野前・戸ノ内ほか地内

原 遺 跡：宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字戸ノ内・原東ほか地内

発掘調査面積：3,114m²（六角遺跡 1,628m²、原遺跡 1,486m²）

調査期間：平成 23 年 10 月 1 日~11 月 25 日

調査原因：経営体育成基盤整備事業円田 2 期地区集落道 1 号工事（県営ほ場整備事業）

調査主体：蔵王町教育委員会 教育長 佐藤 茂廣

調査担当：蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係

調査員：佐藤 洋一・鈴木 雅（教育総務課文化財保護係職員）

庄子 善昭・渡邊 香織・我妻 なおみ・鈴木 和美（文化財専門職臨時職員）

調査指導：宮城県教育庁文化財保護課

調査協力：宮城県大河原地方振興事務所・蔵王町土地改良区・蔵王町小村崎区

目 次

序 文 例 言 凡 例 調査要項 目 次

第1章 遺跡の概要	1
第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	3
第2章 調査に至る経緯	9
第3章 調査の方法と経過	11
第1節 磐ヶ坂遺跡の調査	11
第2節 六角遺跡・原遺跡の調査	12
第3節 整理作業	14
第4章 調査の結果	15
第1節 磐ヶ坂遺跡	15
1 基本層序	15
2 遺構と遺物	15
(1) 西部地区	15
(2) 東部地区	21
3 考察	43
(1) 西部地区	43
(2) 東部地区	43
(3) まとめ	45
写真図版	47
第2節 六角遺跡・原遺跡	65
1 基本層序	65
2 遺構と遺物	65
(1) 六角遺跡	65
(2) 原遺跡	77
3 考察	80
(1) 六角遺跡	80
(2) 原遺跡	81
(3) まとめ	81
写真図版	83
第3節 六角遺跡（近世墓編）	95
1 はじめに	95
(1) 調査・報告の経緯	95
(2) 近世墓の確認状況	95
2 遺構と遺物	95
(1) S1 西区	95
(2) N6 西区	96
3 考察	104
(1) 六角遺跡の近世墓	104
(2) 円田盆地の近世墓について	105
(3) 円田盆地における近世村落墓制（予察）	109
写真図版	110
第5章 総括	113

第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と地理的環境

宮城県南部の蔵王連峰東麓に位置する蔵王町は、東は村田町と大河原町、西は蔵王連峰をはさんで山形県、南は白石市、北は川崎町と境を接する（第1図）。町域は東西23km、南北13kmで面積は152.85km²を占め、海拔標高は最高点が西端の屏風岳で1,825m、最低点が東南部の松川と白石川の合流点で20mを測る。町域の西部が主に蔵王連峰に連なる山林原野で、東部の松川流域と円田盆地に田園地帯が形成されている。西部は蔵王国定公園に含まれ、遠刈田温泉などが蔵王観光の基地となっているほか、東部の丘陵部を中心に果樹園が営まれ、県内有数の果樹生産地となっている。

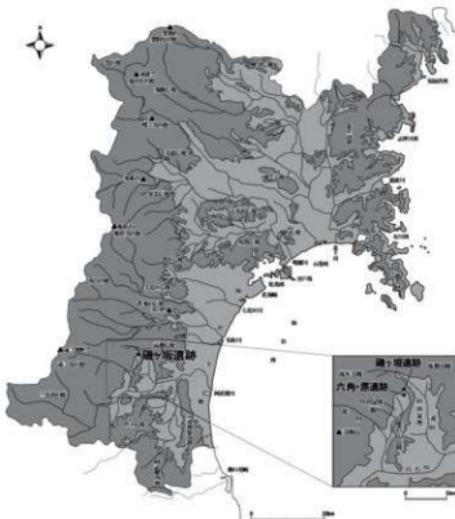
円田盆地は松川の支流である蔽川をはじめとする複数の中小河川によって形成された沖積地である。蔽川は盆地中央部から東縁に沿って緩やかに蛇行しながら南流し、盆地周囲の丘陵からは無数の小規模な沢が流入している。盆地は南をのぞく三方を丘陵で囲まれており、盆地底面の範囲は東西約1.2km、南北約3.5kmにおよぶ。蔽川流域は自然堤防が未発達で、盆地底部に湿地帯を形成しており、盆地の南側は松川との合流地点に向かって開けている。

円田盆地を三方から囲む丘陵のうち、北側から西側にかけては高木丘陵と呼ばれ、蔵王山系の東麓部にあたる。東側は高木丘陵から細長く派生した愛宕山丘陵と呼ばれる小丘陵が南へ延び、さらに東側の村田盆地との地形的な境界をなしている。標高は高木丘陵東端部で約130m、愛宕山丘陵頂部で約170m、盆地南端で約80mである。

愛宕山丘陵はやや急な傾斜をもつ丘陵地で、小規模な沢によって開析された比高差の大きい舌状の小丘陵が連続する。盆地東縁に連なるこの舌状小丘陵上には南部で中沢A遺跡・立目場遺跡・台遺跡・塩沢北遺跡などが立地し、北部では盆地底面との比高差が小さい丘陵末端部に車地遺跡・鍛冶屋敷遺跡などが立地する。一方、高木丘陵は比較的だらかな傾斜をもち、特に盆地北部では丘陵端部



第1図 蔵王町の位置

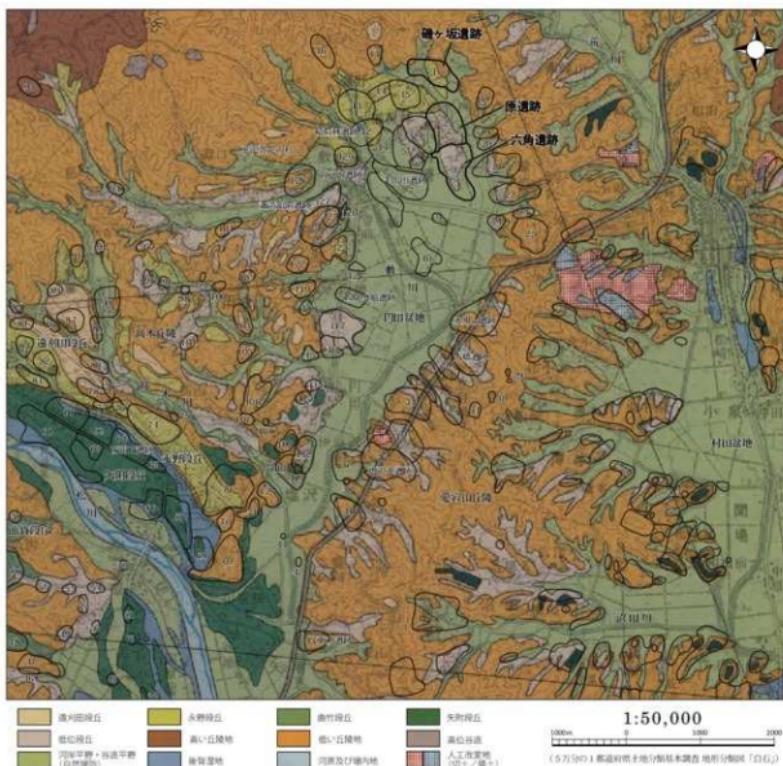


第2図 遺跡の位置と周辺の地形

が緩やかに標高を減じつつ盆地中央部まで達している。盆地北西縁に連なるこの低平な丘陵上には磯ヶ坂遺跡・六角遺跡・原遺跡・十郎田遺跡・窪田遺跡・都遺跡などが立地し、西縁の中南部では諏訪館前遺跡・宋膳堂遺跡などが立地する。

近代以降に行なわれた耕地整理の結果、切り盛り工法による造成で遺跡の立地する地形の多くが消失し、円田盆地の大半は水田地帯となった。特に昭和37~38年の戸川堤防改修工事とほ場整備以降、ほぼ現在の景観が形成された。現在の盆地底面の大半は水田として利用され、地形的な変化に乏しい景観を呈しているが、本来は微高地と小規模な沢状の低地とが複雑に入り組んだ景観であった。遺跡の多くは低平な丘陵や微高地上に立地し、明治40年頃までは主に畠地として利用されていた。

磯ヶ坂遺跡・六角遺跡・原遺跡は宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎地内にそれぞれ所在する。盆地北端部から東縁付近を雁柄川が南流し、左岸に磯ヶ坂遺跡、右岸に六角遺跡・原遺跡が立地する。磯ヶ坂遺跡は蔵王町役場の北東約4.9kmの地点に位置し、円田盆地北端部にある標高約105~120mの舌状丘陵上に立地する。六角遺跡・原遺跡は磯ヶ坂遺跡の南約0.7km、蔵王町役場の北東約4.4kmの地点に位置し、円田盆地北部にある標高約90~99mの舌状丘陵上に立地している（第2・3図）。六角遺跡・原遺跡の西側には戸ノ内遺跡・西屋敷遺跡が隣接している。

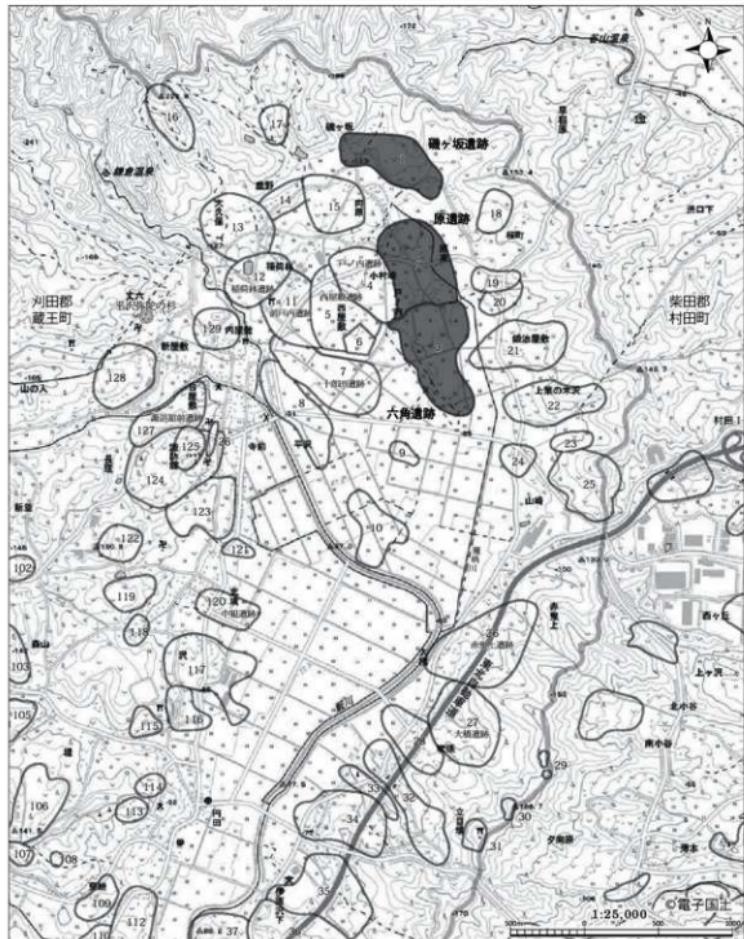


第3図 遺跡の位置と周辺の地形区分

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

藏王町における周知の遺跡は現在 190 か所を数える。その多くは町域の東部に分布し、藏王連峰から派生する丘陵部と青麻山東麓部、松川流域と円田盆地の平野部などに立地する（第3・4図、第1表）。旧石器時代から近世に至るまで多数の遺跡が形成されているが、大略的に見て縄文時代の遺跡は藏王連峰の東麓部から延びる高木丘陵上と青麻山東麓部の標高 150~250 m付近に、弥生時代中期以降の遺跡は円田盆地とその周辺の丘陵辺縁部の標高 80~100m付近に立地する傾向が見られる。

こうした様相の違いは、概ね当時の人びとの生業形態の変化に対応しているものと考えられる。すな



第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡

わち、縄文時代の食料獲得と生活の場は主に松川中・下流域の段丘群など丘陵地に繁茂した森林域であったと推定され、弥生時代中期以降には円田盆地に形成された肥沃な沖積地など低湿地に営まれた水田での食料生産が開始され、生活拠点も低地や低地に面した立地に変化したことを示している。

後述するが、町内で最も古い人類活動の痕跡は、青麻山東麓部にある後期旧石器時代の石器出土地である。縄文時代には地点を変えながら各時期に集落が営まれた。また、稻作の開始を裏付けるものとしては、円田盆地周辺で確認されている稲穂の圧痕がある弥生土器片や、古墳時代の水田跡がある。

以下、各時代・時期における蔵王町周辺の考古学・歴史学的様相を概観する。

第1表 周辺の遺跡（番号は第3・4図に対応）

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	巣ヶ吹遺跡	散布地	縄文・弥生・平安	66	西浦遺跡	集落・散布地	縄文末・後・弥生・古代
2	原遺跡	散布地	縄文・古代	67	東浦遺跡	散布地	縄文末・後・弥生・古墳・古代
3	六角遺跡	集落・散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	68	木下野B遺跡	散布地	奈良・平安
4	前戸内遺跡	集落・散布地	三日市・奈良・備後・弥生・奈良・平安・中世	69	大野根遺跡	城郭	中世
5	西原散居跡	集落・散布地	佐生・吉田・奈良・平安・中世	70	木下向山遺跡	散布地	縄文・弥生・古代
6	西小保留跡	城郭	中世	71	蟹谷遺跡	散布地	弥生
7	十郎田遺跡	集落・散布地	縄文・古墳・奈良・平安・中世	72	丸山遺跡・天王古墳群	円墳・散布地	縄文早・中・弥生・古墳・古代
8	伴戸遺跡	集落・散布地	縄文・平成・奈良・奈良・奈良・平安・中世	73	土野遺跡	散布地	縄文早・弥生・平安
9	那遺跡	集落・散布地	縄文早・弥生・古墳・奈良・平安	74	高木遺跡	散布地	縄文早
10	新城遺跡	散布地	城郭・奈良・平安・中世	75	高木B遺跡	散布地	縄文
11	戸ノ内遺跡	集落・散布地	奈良・平安・中世	76	轟山山遺跡	散布地	縄文早・後・弥生・古代
12	鷹林遺跡	散布地	縄文早・古墳・奈良・平安	77	上木山A遺跡	散布地	縄文早・古墳・古代
13	久保の森遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	78	上木山B遺跡	散布地	縄文早・中・古代
14	大久保の森遺跡	散布地	古代	79	枯木山B遺跡	散布地	縄文
15	後原遺跡	散布地	古代	80	十鳥遺跡	散布地	縄文早・後・弥生
16	兵庫遺跡	城郭	中世	81	山木E遺跡	散布地	縄文早・中
17	鹿野遺跡	散布地	古代	82	山木D遺跡	散布地	縄文早・中
18	酒上遺跡	散布地	古代	83	山木C遺跡	散布地	縄文早・中
19	二の輪遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	84	八幡平遺跡	散布地	縄文早・中・古代
20	半地城遺跡	散布地	奈良・平安	85	八人山遺跡	散布地	縄文早・弥生・古代
21	鶴の谷散居跡	散布地	縄文早・中・古代	86	千代木B遺跡	散布地	縄文早・後・古代
22	上豊の谷遺跡	散布地	古代	87	鶴山南B遺跡	集落	縄文早・後・弥生
23	山崎遺跡	散布地	縄文早	88	鶴山B遺跡	散布地	縄文早・後
24	中里の内遺跡	散布地	縄文・奈良・古代	89	柏原遺跡	散布地	縄文早・後・古代
25	北前山遺跡	散布地	縄文・奈良	90	門田B遺跡	散布地	縄文早・中
26	南曳上遺跡	集落	奈良・平安・中世	91	柏原細田跡	城郭	中世
27	大槻遺跡	集落	縄文早・弥生・古墳・平安	92	門田C遺跡	散布地	縄文
28	早木ノ内遺跡	散布地	奈良・古代	93	西ノ内河跡	城郭	中世
29	夕向原の堀	散布地	前田の門・古墳	94	町内遺跡	散布地	縄文
30	古峯山古墳	円墳	古墳	95	二本郷A遺跡	散布地	縄文早
31	愛宕山遺跡	散布地	弥生	96	八戸木遺跡	散布地	縄文
32	立戸鳴鳴跡	散布地	縄文・弥生・古墳	97	山手遺跡	散布地	平安
33	中村B遺跡	散布地	弥生・古墳・古代	98	青木遺跡	散布地	平安
34	中村A遺跡	散布地	縄文早・弥生・古墳・奈良・平安・中世	99	角山A遺跡	散布地	古代
35	伊原尻乙ノ遺跡	集落	古墳	100	角山B遺跡	散布地	縄文
36	鶴見北遺跡	集落	弥生・古墳・平安	101	木々原乙遺跡	散布地	縄文・平安
37	台遺跡	散布地・水田	弥生・古墳・平安・中・近世	102	新山遺跡	散布地	縄文早
38	西脇古墳	円墳	古墳	103	猪籠郡跡	城郭	中世
39	中原敷古墳	円墳	古墳	104	萩の庄跡	散布地	縄文早・弥生
40	大山土器跡	集落	縄文早・弥生・古墳前	105	角山遺跡	散布地	縄文早・中・古代
41	鉢附神社古墳	円墳?	古墳?	106	白山御跡	城郭	中世
42	雪向遺跡	散布地	古墳	107	豆原遺跡	散布地	縄文
43	東山遺跡	集落	縄文早・平安	108	八幡山古墳群	円墳・万塔	古墳
44	波田遺跡	散布地	縄文早・前	109	土手木遺跡	散布地	弥生・古代
45	小瀬遺跡	散布地	縄文	110	戸ノ内駒形跡	散布地	縄文早・中・弥生・古墳・平安・中世
46	久穴山遺跡	散布地	城郭	111	宋室空古墳	円墳	古墳?
47	曲竹小保留跡	城郭	中世	112	宋室笠原跡	散布地	弥生・古墳・平安
48	洪島山遺跡	散布地	縄文早・古代	113	寺内遺跡	散布地	平安
49	岩戻山遺跡	散布地	縄文早・古代	114	尾の内遺跡	集落・散布地	縄文・弥生・古墳・古代
50	砂豆遺跡	散布地	縄文早	115	清水遺跡	散布地	弥生・平安
51	下原遺跡	散布地	縄文早	116	白木遺跡	集落・散布地	弥生・古墳
52	上原遺跡	散布地	縄文後	117	本別前遺跡	集落・散布地	縄文早・弥生・古代・中世
53	清水遺跡	散布地	縄文・弥生	118	只見跡	散布地	古代
54	日向山遺跡	散布地	縄文早・中・古代	119	北山遺跡	散布地	縄文早・弥生・古代
55	八卦遺跡	散布地	縄文早	120	中山遺跡	集落・散布地	縄文早・中・弥生・古代・中・近世
56	市ノ戸遺跡	散布地	弥生・古代	121	寺の入遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
57	鶴谷山遺跡	散布地	縄文早・中・後・弥生・古代	122	人内遺跡	散布地	弥生
58	馬鹿湯跡	散布地	縄文早	123	小舟跡・利坪	散布地・林坪	縄文・弥生・古代・中世
59	白九郎山古墳	古墳	古墳	124	鶴見前遺跡	散布地	弥生・古墳
60	子安字跡	散布地	縄文早	125	美加御跡	城郭	中世
61	曲木遺跡	散布地	縄文早	126	美加前城・高見郡	城穴堤?	古墳?
62	寺門前遺跡	散布地	縄文早・中	127	鶴見前前遺跡	集落・散布地	縄文早・弥生・古墳・平安
63	谷地遺跡	散布地	縄文早	128	人ノ遺跡	散布地	古墳
64	西浦B遺跡	集落・散布地	縄文早・中・後・平安・近世	129	平治原跡	城郭	中世
65	愛宕山遺跡	散布地	縄文早・後・古代				

(1) 旧石器時代

宮地区の持長地遺跡、鉄砲町遺跡、明神裏遺跡、小村崎地区の前戸内遺跡が知られている。持長地遺跡では黄褐色ローム漸移層下部よりナイフ形石器が単独出土し（宮城県教育委員会 1980b）、鉄砲町遺跡では彫刻刀形石器が採集されている。これらは後期旧石器時代後半期のものと考えられる。明神裏遺跡では細石刃と槍先形尖頭器、前戸内遺跡では槍先形尖頭器が採集されており、後期旧石器時代終末期に位置づけられる可能性がある。しかし、いずれも単独出土ないしは採集資料のため、明確な時期や遺跡の性格については不明な点が多い。なお、宮地区的二屋敷遺跡では石刃状剥片を素材としたナイフ形石器に類似する石器が出土しているが、本地域では縄文時代中期から後期初頭にかけて山形県寒河江川流域の集落から珪質頁岩製の石刃が交易品として搬入されたことが分かっており、層位の裏付けを伴わない石刃製石器の旧石器としての時期判定には注意を要する。

(2) 縄文時代

草創期については明確な遺跡が発見されていない。周辺地域でも白石市福岡深谷地区的高野遺跡で槍先形尖頭器が、同大鷹沢地区の小菅遺跡、戸谷沢遺跡で局部磨製石斧が採集されている程度で、具体的な様相は明らかでない。早期の遺跡には宮地区的明神裏遺跡、沢入D遺跡、円田地区的手代木遺跡、三本櫻A遺跡、遠刈田地区的北原尾遺跡、前期の遺跡には宮地区的長峰遺跡、八幡平遺跡、円田地区的入山遺跡、愛宕山遺跡、中期の遺跡には宮地区的上原田遺跡、円田地区的高木遺跡、鞘堂山遺跡、湯坂山B遺跡、後期の遺跡には宮地区的二屋敷遺跡、山田沢遺跡、一本木遺跡、円田地区的西浦B遺跡、晚期の遺跡には宮地区的下別当遺跡、願行寺遺跡、沢北遺跡、曲竹地区的鍛冶沢遺跡などがある。

鞘堂山遺跡では中期中葉の竪穴住居跡5軒、貯蔵穴23基などが発見され、竪穴住居跡は貯蔵穴・柱穴群を挟むように分布していた。湯坂山B遺跡では中期後葉の竪穴住居跡17軒、貯蔵穴16基などが発見され、多量の土器・石器と土笛が出土している（写真1）。西浦B遺跡では後期初頭～前葉の貯蔵穴・掘立柱建物跡群が発見されている（藏王町教育委員会 2011a）。二屋敷遺跡では中期末の竪穴住居跡5軒、後期初頭～前葉の炉跡2基、土器埋設遺構4基、配石遺構などが発見されている（宮城県教育委員会 1984）。願行寺遺跡では晚期の屈折土偶が採集されている。鍛冶沢遺跡では晚期の土器埋設遺構や弥生時代初頭の再葬墓と、弧状に配置された掘立柱建物跡群が発見されている（宮城県教育委員会 2010）。

遺跡の分布状況をみると、早期の遺跡は小規模なものが多く、高木丘陵から青麻山東麓部にかけての広範囲に点在し、遠刈田地区から白石市福岡深谷地区にかけての不忘山東麓部にまとまった分布域を形成する。前期の遺跡数はやや少なくなるが、高木丘陵上と青麻山東麓部に点在する。中期から後期にかけては高木丘陵上に大きな集落が形成され、集中的な遺跡分布域となっている。一方、青麻山東麓部では後期になると多くの集落が形成され、晚期まで継続する大規模な集落がみられる。

このように、時期による分布域の移動と、微地形選択の志向性に変化は見られるものの、縄文時代のおよそ1万数千年間を通して本地域における生活の拠点は戦国連峰東麓部から延びる高木丘陵上と、青麻山東麓部にあったと言って良い。なお、円田盆地北部の小村崎地区にある六角遺跡、原遺跡、平沢地区の中組遺跡などでは縄文時代のものと考えられる落とし穴状土坑が確認され、低湿地に面した低平な丘陵裾部が狩猟の場として利用されていたことが分かっている。



写真1 湯坂山B遺跡第3a・b号竪穴住居跡 (大木9式期)

(3) 弥生時代

縄文時代晚期から継続する宮地区的沢北遺跡、曲竹地区的鍛冶沢遺跡、これに後続する桟形団式期の遺跡には宮地区的長峰遺跡、円田地区の清水遺跡、西浦遺跡、塩沢地区の宋膳堂遺跡、東根地区的立目場遺跡、円田式期の遺跡には東根地区の大橋遺跡、塩沢地区的台遺跡、上野遺跡、塩沢北遺跡、小村崎地区的都遺跡、円田地区的西浦遺跡、十三塚式期の遺跡には東根地区的愛宕山遺跡、立目場遺跡、天王山式期の遺跡には東根地区的愛宕山遺跡、塩沢地区的天王遺跡、平沢地区的赤鬼上遺跡などがある。

桟形団式期以前の遺跡は、鍛冶沢遺跡などのように縄文時代晚期の立地を踏襲しながら、一部円田盆地周縁部の丘陵に立地している。円田式期になると円田盆地周縁部に急速に展開し、遺跡数も急増する。遺構が調査された例は皆無であるが、稻作が受容されたと考えるのに十分な変化と言える。円田地区では伊東信雄氏（1955）による「円田式」命名の標識資料となった長頸壺が出土している（写真2）。十三塚式期から天王山式期にかけてはこうした流れを引き継ぐ一方、愛宕山遺跡のように標高の高い丘陵上に立地する遺跡も見られる。なお、都遺跡（円田式、蔵王町教育委員会 2005）、大橋遺跡（天王山式、宮城県教育委員会 1980b）、中沢A遺跡（蔵王町教育委員会 2007）で出土した土器片の表面には粗粒の圧痕が観察されている。



(4) 古墳時代

前期（塩釜式期）の遺跡には東根地区の大橋遺跡、伊原沢下遺跡、円田地区的堀の内遺跡、中期（南小泉式期）の遺跡には小村崎地区的都遺跡、窪田遺跡、東根地区の中沢A遺跡、台遺跡があるが、後期（住社式期）の遺跡は明瞭には確認されていない。高塚古墳には宮地区的明神裏古墳、東根地区の夕向原古墳群、古峯神社古墳、塩沢地区的宋膳堂古墳、天王古墳群、西脇古墳、中屋敷古墳、八幡山古墳がある。

古墳時代の遺跡は弥生時代の立地を踏襲し、円田盆地周縁部に集中する。前期の大橋遺跡、伊原沢下遺跡は宮城県内における塩釜式最古段階（宮城県教育委員会 1980b）、中沢A遺跡は南小泉式最古段階の遺跡として知られている（写真3、蔵王町教育委員会 2007）。六角遺跡では塩釜式期、立目場遺跡では塩釜式・南小泉式期、窪田遺跡（写真4）などでは南小泉式期の竪穴住居跡が調査されている。前期の堀の内遺跡では、後北C2-D式に位置づけられる統縄文土器が出土し（蔵王町教育委員会 1997）、北方地域との関係性が窺われる。

また、盆地を取り囲む丘陵上に多くの高塚古墳が築かれている。古峯神社古墳は主軸長38m、夕向原1号墳は主軸長57mの前方後円墳（藤沢 2000）、宋膳堂古墳は直径約30mの円墳で、埴輪が採集されている。明神裏古墳は昭和31年に発掘調査され、凝灰岩板石を用いた箱式石棺が確認されている。



写真3 中沢A遺跡 S14 竪穴住居跡出土土器（南小泉式）

(5) 古代

飛鳥・奈良・平安時代の遺跡として 100 か所以上が知られ、このうち発掘調査が行なわれた遺跡としては宮地区的観音堂山遺跡、矢附地区の東山遺跡、塙沢地区的塙沢北遺跡、円田地区的西浦 B 遺跡、堀の内遺跡、平沢地区的窪田遺跡、都遺跡、赤鬼上遺跡、小村崎地区的戸ノ内遺跡、六角遺跡、十郎田遺跡などがある。また、現在その所在を確認できないが平沢地区的諏訪館横穴墓群がある。

当該期の遺跡は円田盆地周辺に多く分布する一方、町東部の丘陵麓部の広い範囲に分布するようになり、生活領域が拡大したことが窺われる。円田盆地では 7 世紀後半以降、盆底部に面した低平な舌状丘陵上に集中的に集落を形成する。十郎田遺跡では 7 世紀後半の材木塀による区画施設を伴う集落跡（写真 5、藏王町教育委員会 2011d・e）、六角遺跡では 8 世紀前半頃の大溝による区画施設を伴う集落跡を確認している（藏王町教育委員会 2008）。都遺跡では 8 世紀前半の多賀城創建期（奈良時代初頭）に位置づけられる軒平瓦が採集されているのをはじめ、大型の掘立柱建物跡と材木塀による区画施設が確認されており、官衙関連施設が営まれていた可能性がある（藏王町教育委員会 2005）。これらの集落では、当時の在地土師器とは異なる特徴を持つ関東系土師器を保有しており、六角遺跡では関東型カマドをもつ竪穴住居跡も確認されている。関東系土師器は窪田遺跡、堀の内遺跡などでも出土している（藏王町教育委員会 1997・2009a・2011b）。

前戸内遺跡では、平安時代の官衙風建物群が確認され（写真 6）、「薺田」墨書き土器などが出土している。（藏王町教育委員会 2013）。東山遺跡では、平安時代の土器溜造構が確認され、灰釉陶器、転用碗のほか、墨書き土器が多量に出土している（宮城県教育委員会 1981）。また、東山遺跡、西浦 B 遺跡（藏王町教育委員会 2011a）、観音堂山遺跡（宮城県教育委員会 2011）、赤鬼上遺跡（宮城県教育委員会 1980a）の竪穴住居跡では、燃焼部から煙道までの全体を石組みで構築するカマドが確認され、円田盆地周辺の地域性と考えられている（古田 2011）。

このほか、平沢地区に現存する丈六阿弥陀如来坐像（写真 7、県指定文化財）は平安時代末期の作風とされ、阿弥陀如来を信仰し東北各地に阿弥陀堂を造立したとされる奥州藤原氏との関係性が窺われる。また、丈六阿弥陀堂があったとされる平沢字丈六地区には、阿弥陀堂の参道杉並木として植えられた杉のうち一本が現生し、平沢弥陀の杉（写真 8、県指定天然記念物）と呼ばれている。



写真 5 十郎田遺跡材木塀区画南東隅 (7世紀中頃～後半)



写真 6 前戸内遺跡 SB10 掘立柱建物跡 (9世紀前葉～中葉)



写真 7 丈六阿弥陀如来坐像 (12世紀・保昌寺)



写真 8 平沢弥陀の杉

(6) 中世

城館跡に宮地区的宮城館跡、山家館跡、館の山城跡、曲竹地区的曲竹小屋館跡、円田地区的花櫛館跡、棚村館跡、小村崎地区的西小屋館跡、兵衛館跡、平沢地区的諏訪館跡、平沢館跡、矢附地区的矢附館跡などがあり、町東部の丘陵上に多くの城館が築かれている。

兵衛館跡は円田盆地最奥部に立地し、丘陵頂部の平場を画する土壘・空堀が良好に残存する（写真9）。西小屋館跡は土壘と水堀を伴う方形館で、隣接する西屋敷遺跡では区画溝を伴う鎌倉－室町



写真9 兵衛館跡 北縁土壘・空堀

時代の屋敷跡を確認している（藏王町教育委員会2012）。山家館跡に隣接する持長地遺跡でも、鎌倉－南北朝時代の屋敷跡が確認されている（宮城県教育委員会1980b）。館の山城跡に隣接する青竹遺跡では掘立柱建物跡群が確認され、館と一体的に機能した施設の可能性が指摘されている（藏王町教育委員会2009b）。小村崎地区的十郎田遺跡では鎌倉時代の屋敷跡を確認している。屋敷内の井戸跡から挽物椀・小皿の荒型が多量に出土し、挽物製作を行なっていたことが窺われる（藏王町教育委員会2011d・e）。

このほか、宮地区的願行寺遺跡は中世－近世の寺院跡と推定されている。安永風土記に「役小角叔父山之坊願行寺跡」とあり、「宮本坊蔵傳寺書出」によれば奥州藤原氏の保護を受けて最盛期には四十八坊を有したという。また、前述の白九頭龍古墳には、文治の役（1189）で源頼朝軍に討ち取られた藤原国衡の遺骸を埋葬して弔ったとの伝説が残り、墳頂部には白九頭龍大明神の祠が建てられている。

(7) 近世以降

小村崎地区的車地蔵遺跡では掘立柱建物跡、区画溝跡、水場遺構などが確認され、近世の有力者層の屋敷地の一部と考えられる（藏王町教育委員会2006）。伊達家臣の高野家が拝領した平沢地区的平沢要害跡は後世の改変で遺構が現存しないが、江戸期の絵図に本丸・二の丸・水堀と、南側に屈折する大手が見え、小規模ながらも近世城郭のような構造が窺える。また、遠刈田地区の岩崎山金窟跡では戦国末期には採掘が開始されていたとみられ、江戸初期には仙台藩主伊達家の命により採掘されていた。

現存する近世の建造物としては、平沢地区的日吉神社本殿（江戸中期）、宮地区的刈田嶺神社本殿（江戸中期、県指定文化財）、曲竹地区的我妻家住宅（写真10、江戸中期、国指定重要文化財）、小村崎地区的奥平家住宅（江戸後期、町指定文化財）などがある。日吉神社は高野家の領地替えの時に伊達郡より遷座され、刈田嶺神社は刈田郡總鎮守として白石城主片倉家の保護を受けた。

また、近世には奥州街道が宮地区を通り、さらに宮宿から分かれて永野宿、猿鼻宿を経由し、四方峠、笹谷峠を越えて山形へ至る羽前街道が通っていた。平沢地区には羽前街道の古道の一部が保存され（旧羽前街道保存地区）、藩政時代の街道の景観を今に伝えている。

近代の遺構としては遠刈田地区的遠刈田製鉄所高炉跡などがある。遠刈田製鉄所高炉は明治時代後期に建設されたもので、近代製鉄遺構としては国内で唯一、基礎部分が現存している。



写真10 我妻家住宅 (宝暦3(1753)年建築)

第2章 調査に至る経緯

藏王町北東部の円田盆地に広がる水田地帯を対象とした経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）では、昭和63年度に盆地南部（円田1期地区）の事業計画が策定され、同年に埋蔵文化財保存協議が実施された。この結果を受け、同年から平成2年度にかけて事業実施区域内に存在する埋蔵文化財包蔵地の遺構確認調査および事前調査が宮城県教育庁文化財保護課により実施された（宮城県教育委員会 1989・1990・1991）。一方、盆地中・北部（円田2期地区）の事業計画は平成8年度に策定され、平成12年度には事業年次計画が提示された。約1,325,000m²に及ぶ広大な事業実施予定区域には多数の埋蔵文化財包蔵地が含まれていたことから、平成8年度にはほ場整備事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が宮城県大河原地方振興事務所より藏王町教育委員会を経由して宮城県教育委員会に提出され、関係四者（事業主側：宮城県大河原地方振興事務所・藏王町土地改良区、文化財保護側：宮城県教育委員会・藏王町教育委員会）による埋蔵文化財保存協議が開始された。

平成11年度の協議において、事業実施区域内における埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布調査が必要であるとの認識で合意したことを受け、平成12年度に町教育委員会が分布調査を実施した。この結果、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲が大きく広がることが判明した。これを受けた協議の結果、埋蔵文化財が破壊される面積をできるだけ少なくするよう事業計画を大幅に見直すことが決定した。平成13年度には地方振興事務所より、水田および畠地となる部分については、地下の遺構を保護するよう適宜盛土を行なうとともに、幹線農道以外の作業用道路については未舗装の砂利道として事前調査対象となる破壊範囲をできるだけ減少させる見直し案が提示され、基本方針で合意に達した。

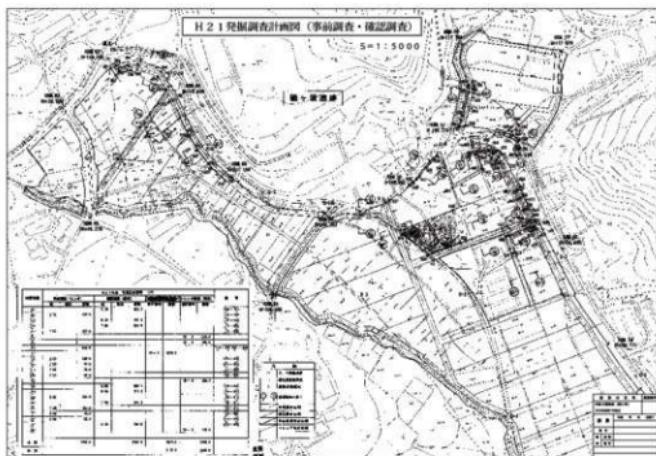
平成13・14年度には、事業計画区域のうち町道小村崎中央線以南の各遺跡の遺構分布状況と遺構深度の把握を目的とした遺構確認調査が県文化財保護課と町教育委員会によって実施された（宮城県教育委員会 2002・2003）。地表面で遺物の分布が確認された範囲を中心として幅約2mのトレンチ333か所を設定し、計11,669m²を調査した結果、事業実施区域内の大まかな遺構の分布状況が明らかとなった。これを踏まえた協議の結果、遺構の存在する範囲については基本的に盛土による現状保存を図り、計画田面が遺構面よりも低くなる切土範囲と、幹線農道・作業道・水路の建設に伴って遺構面が掘削される範囲については、工事着手前に事前調査を実施して文化財保護法上必要な措置としての記録保存を図るという基本方針で合意に達した。また、作業道のうち未舗装の砂利道とする計画で遺構面に掘削が及ぼない範囲については、確認調査を実施した上で盛土による現状保存を図ることになった。

平成14年度には事業実施区域のうち県道岩沼藏王線の南側を平成15・16年度、北側を平成17-21年度に順次施工する事業計画が地方振興事務所より提示され、これを受け平成15年度に県道南側の3遺跡、平成17-21年度（その後の事業計画見直しなどにより平成25年度まで延長することで合意）に北側の13遺跡の計16遺跡を対象とする事前調査計画（室内整理を含む）を町教育委員会が策定した。県道南側については平成15年度、北側については平成16年度に土木工事等に伴う文化財発掘調査についての依頼書が地方振興事務所より藏王町へ提出され、事前調査の実施にあたっては地方振興事務所を委託者、藏王町を受託者とする業務委託契約を締結し、事業費のうち受益者負担分を除いた額を委託金として地方振興事務所が負担することなどが確認された。

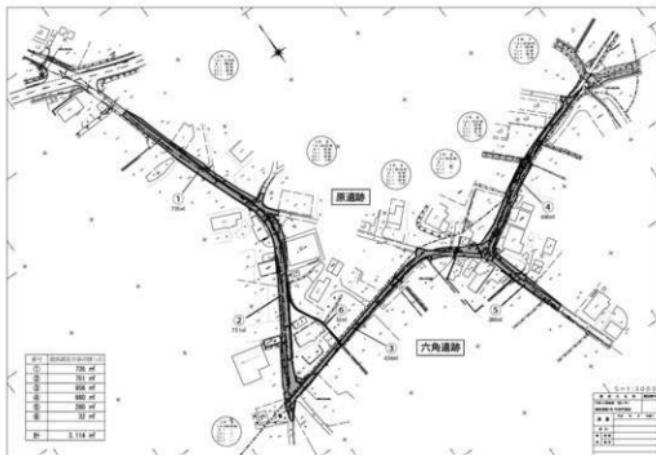
平成17年度には地方振興事務所が県道北側の詳細な事業設計案をまとめ、これに基づく埋蔵文化財発掘の通知が町教育委員会を経由して県教育委員会へ提出された。これに対して県教育委員会からは工事着手前の発掘調査実施を指示する通知書が交付され、事前調査に着手する運びとなった。

町教育委員会は県文化財保護課の協力を得て、都遺跡、窪田遺跡（南部）、新城館跡（H15・16年度、蔵王町教育委員会2005）、車地戸遺跡、鍛冶屋敷遺跡、原遺跡、上葉の木沢遺跡、中葉の木沢遺跡（H17年度、同2006）、六角遺跡（H18・19年度、同2008）、戸ノ内遺跡（H19・20年度、同2009a）、窪田遺跡（北部、H20年度、同2011b）、十郎田遺跡（H19・20年度、同2011d・e）、西屋敷遺跡（H21年度、同2012）、前戸内遺跡（H20・21年度、同2013）の事前調査を順次実施してきた。

本書で報告するのは、平成21年度に実施した磯ヶ坂遺跡（第5図）と、平成23年度に実施した六角遺跡・原遺跡（第6図）の事前調査の結果である。各遺跡の調査結果については本書が最終報告であり、この後に総括編を刊行して本事業計画にかかる遺跡の事前調査をすべて終了する計画となっている。



第5図 円田10工区工事施工計画図(磯ヶ坂遺跡)



第6図 集落道1号工事施工計画図(六角遺跡・原遺跡)

第3章 調査の方法と経過

第1節 磯ヶ坂遺跡の調査

調査前の現況 磯ヶ坂遺跡は、円田盆地北西縁の高木丘陵と東縁の愛宕山丘陵との接続点付近に位置する。盆地北縁から東縁付近を南流する雁柄川の左岸に北から張り出す小規模な舌状丘陵の頂部から麓部に立地し、東西を南から入る沢で画されている。遺跡の現況は畑地および水田で、地表面に縄文土器・石器、古代の土器などの遺物が散漫に分布する状況が観察された。

遺構確認調査 平成13・14年度に実施された遺構確認調査は事業計画区域のうち町道小村崎中央線以南の遺跡を対象としたものであり、町道北側にある本遺跡は未実施であった。このため、平成17年度に町教育委員会が県文化財保護課の協力を得て本遺跡の遺構確認調査を実施した（藏王町教育委員会2006）。

この結果、舌状丘陵東側（東部地区）では丘陵先端部の南側を雁柄川、東側を沢によって侵食されており、丘陵麓部で溝跡1条、土坑3基、柱穴2か所を確認した。西側（西部地区）は舌状丘陵西側の沢と雁柄川とに挟まれた緩傾斜地で、溝跡5条、土坑6基、柱穴3か所を確認した。いずれの地区でも遺物は出土せず、確認した遺構の時期・性格は不明であった。両地区での遺構の密度は薄いと考えられ、遺跡の本体は今回の事業計画区域外の舌状丘陵頂部周辺であろうと推定された。

事前調査の方法 事前調査は西部地区と東部地区とに分けて実施することとし、それぞれ平成21年度に業務委託契約（委託者：宮城県大河原地方振興事務所、受託者：藏王町）を締結して実施したものである。発掘調査では工事予定範囲内に地形などを考慮して調査区を設定し、重機による表土除去の後、手作業による遺構確認と遺構精査を行なった。表土下に旧耕作土等の新しい土層が認められる場合は、適宜手掘りで層厚を確認しながら重機による掘削を行なった。また、重機掘削の過程で湿地であることが確認された範囲についてはトレーンチ状の部分掘削に留め、遺構・遺物が確認されない場合は簡易な記録を行なって調査を終えた。確認した遺構については平板測量により1/100縮尺の遺構平面図を作成し、必要に応じて1/20縮尺の断面図を作成した。また、調査中はデジタル一眼レフカメラおよび35mmモノクロームフィルムを用いて、必要に応じて遺構の検出状況と土層断面、完掘状況、遺物の出土状況および調査区全景などの記録写真を撮影した。デジタルデータについてはRAIDディスクおよびDVD-ROMに記録して保管している。出土遺物は調査区および遺構、出土層位別に取り上げた。

西部地区的発掘調査 作業道・水路の整備予定範囲2,388m²を対象としたもので、1区(703m²)、2区(893m²)、3区(792m²)を設定して調査を実施した（第7図）。また、2・3区に隣接する畠地（1,584m²）について、切土による田面整備の要望が出されたことから、調査区内の遺構の状況を確認した上で対応を協議することとした。調査の過程で1・2区は沢地の中に位置しており遺構が分布せず、3区に少数の遺構が分布することが判明した。このため、田面部分について3区を拡張して調査範囲に加えることとした。調査面積は合計3,972m²に及び、調査期間は平成21年4月2日～5月30日の約2か月間を要した。

確認した遺構は土坑7基、溝跡9条、柱穴23か所である。柱穴は調査区内に散在し、建物などは確認できなかった。遺物は土坑、溝跡などから縄文土器、弥生土器、須恵器、陶磁器、古錢が少数出土した。

東部地区的発掘調査 作業道・水路および切土による田面の整備予定範囲4,785m²を対象としたもので、1区(1,094m²)、2区(287m²)、3区(2,160m²)、4区(659m²)、5区(220m²)、6区(291m²)、7区(74m²)を設定して調査を実施した（第7図）。調査の過程で1・2・7区は沢地の中に位置しており遺構が分布しないこと、6区は削平により地形が改変されていることが判明し、舌状丘陵先端部の尾根上から

北東斜面に位置する3-5区に遺構が分布することが確認された。また、3区に隣接する畠地の設計変更により、切土範囲と追加する計画案が提示されたことから、当該範囲を8区(418m²)として調査を行なったが、遺構は確認されなかった。調査面積は合計5,203m²に及び、調査期間は平成21年10月1日~11月30日の約2か月間を要した。

確認した遺構は竪穴住居跡1軒、貯蔵穴6基、落とし穴6基、近世墓8基、土坑13基、溝跡1条、柱穴17か所である。遺物は竪穴住居跡、貯蔵穴、近世墓などから繩文土器、弥生土器、ロクロ土器師、須恵器、石器、火打石、ガラス製小玉、煙管、毛抜き、和鉄、鉄鍋、古銭が少數出土した。

基礎整理作業 平成21年度に当該年度調査成果の基礎整理のための業務委託契約を締結し、平成21年12月1日~平成22年3月25日の約4か月間の工程で実施した。本遺跡の調査成果については出土遺物の洗浄と注記、接合と修復の作業を実施したほか、図面と写真などの記録類の基礎的な整理作業を実施した。遺構平面図については現場で作成した1/100縮尺の平板測量図を基に工事用測量基準杭を基準とする3mグリッドを設定し、東西・南北方向に数字を付して位置関係を確定させた。

第2節 六角遺跡・原遺跡の調査

調査前の現況 六角遺跡・原遺跡は、円田盆地北西縁の高木丘陵から盆地中央部に向かって南東方向に長く張り出す低平な舌状丘陵上に立地する。この舌状丘陵の基部付近に後原遺跡、中央付近に原遺跡、中央~先端部に六角遺跡が登録されている。丘陵の両裾は沢または盆底面で画され、湿地が広がっている。遺跡の現況は畠地・水田・宅地で、地表面に繩文土器・石器、古代の土器などの遺物が比較的濃密に散布する状況が確認された。

これまでの調査 平成14年度に県文化財保護課が遺構確認調査を実施し、六角遺跡では古墳時代前期、飛鳥・奈良時代、平安時代の竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡12棟など、原遺跡では古代の水田跡が確認された（宮城県教育委員会2003）。田面・作業道・水路を整備する工事に伴う発掘調査は、平成17年度に原遺跡の1,400m²、平成18・19年度に六角遺跡の25,800m²を対象として町教育委員会が実施した。この結果、原遺跡では落とし穴状土坑9基、六角遺跡では竪穴住居跡52軒、掘立柱建物跡29棟、大溝跡4条、落とし穴状土坑39基など多数の遺構を確認し、六角遺跡では古墳時代前期、飛鳥・奈良時代、平安時代の集落跡、中~近世の建物群などが形成されていたことが判明した（藏王町教育委員会2006・2008）。原遺跡の調査は丘陵東斜面の辺縁部を対象としたもので、丘陵上の遺構の分布状況は不明であった。一方、遺跡範囲を縦断・横断する複数の調査区が設定されて遺跡全体の大まかな遺構の分布状況が判明した六角遺跡では、丘陵頂部に古墳時代前期、頂部から緩斜面部の広範囲に奈良・平安時代の遺構群が分布し、これらの遺構群の一部は隣接する原遺跡へも続いているものと推定された。

事前調査の方法 今回の発掘調査は集落道工事予定範囲3,114m²（六角遺跡1,628m²、原遺跡1,486m²）を対象とし、平成23年度に業務委託契約（委託者：宮城県大河原地方振興事務所、受託者：藏王町）を締結して実施した。発掘調査では、隣接地の発掘調査結果から遺構が分布することが確実と考えられた地点には当初より調査区を設定して調査を行なった。これ以外の地点では工事予定範囲内に遺構確認を目的としたトレッチを設定し、遺構の分布が確認された場合には随時トレッチを拡張して調査区とした。トレッチ掘削および調査区の表土除去は重機を使用した。遺構が確認されなかったトレッチでは簡単な記録を行なって調査を終え、確認した遺構については工事用測量基準杭を基準として1/20縮尺の遺構平面図を作成し、必要に応じて同縮尺の断面図を作成した。写真記録と保管、出土遺物の取り上げ方法については前述の磯ヶ坂遺跡と同様である。最終的な発掘調査面積は六角遺跡・原遺跡の合計で480m²、調査期間は平成23年10月1日~11月25日の約2か月間を要した。



第7図 現況測量図・調査区配置図

第2表 業務工程表

遺跡名	平成21年度		平成23年度		平成25年度	
	発掘調査(西部)	発掘調査(東部)				
磯ヶ坂遺跡	■	■	■ 基礎整理作業			■ 本整理作業・報告書刊行
六角遺跡 原遺跡		■		■ 発掘調査		■ 基礎整理作業・ 本整理作業・報告書刊行
該当業務名称	H20 円田2期地区 (狙い手) - 206号	H21 円田2期地区 (狙い手) - 206号	H23 円田2期地区 (狙い手) - 361号		H25 円田2期地区 (狙い手) - 202号	

六角遺跡の調査 集落道工事予定範囲 1,628m²（延長約 410m 分）を対象として実施した。平成 18 年度の発掘調査で竪穴住居跡などが確認されている地点の隣接地に 1 区（約 52m²）、2 区（約 59m²）を設定し、これ以外の地点に遺構確認調査用トレンチ 10 か所（1T～10T）を設定した。この結果 2・3T で竪穴住居跡が確認されたことから、周辺を拡張して 3 区（約 150m²）を設定して調査を実施した。遺構確認調査用トレンチを含めた調査面積は 314m²である。確認した遺構は竪穴住居跡 2 軒、柱列跡 2 条、土坑 1 基、井戸跡 1 基である。遺物は竪穴住居跡、井戸跡などから縄文土器、土師器、須恵器、ロクロ土師器、中世陶器、ミニチュア土器、石器、礫石器、石製品が出土した。

原遺跡の調査 集落道工事予定範囲 1,486m²（延長 270m 分）を対象として実施した。対象地内の遺構の分布状況は不明であったことから、遺構確認調査用トレンチ 10 か所（1T～10T）を設定した。この結果、2T で柱穴 2 か所、4T で溝跡 3 条、5T で竪穴住居跡 1 軒、柱穴 3 か所を確認した。2・4T で確認した遺構は堆積土にしまりがなく遺物を含まないことから新しい掘り込みと判断した。5T で確認した竪穴住居跡はトレンチ内で西半を確認し、東半は工事予定範囲外へ延びていることから、確認した範囲のみを精査した。調査面積は 166m²である。遺物は竪穴住居跡などから土師器、焼成粘土塊が出土した。

第3節 整理作業

整理作業の方法 整理作業は平成 25 年度に磯ヶ坂遺跡・六角遺跡・原遺跡の本整理と報告書作成のための業務委託契約を締結し、平成 25 年 6 月 7 日～平成 26 年 3 月 25 日の約 10 か月間の工程で出土遺物の実測と写真撮影、実測図・遺構図トレース、および本書の執筆・編集と印刷・製本を実施した。

遺構図については、手実測で作成した図面をイメージスキャナとビットマップ画像編集ソフトウェアを用いてデジタル画像化し、調査員が作成した遺構調書を参照しながらパソコン内でベクトル画像編集ソフトウェアを用いてデジタルトレースを行なった。遺物については、洗浄の後に注記を行ない、可能な限り接合と修復を行なった上で遺物調書を作成し、遺物の性格と残存状況などに応じて実測図あるいは拓本を作成した。遺物の実測図・トレース図についてはすべて手作業により作成した。実測図等の作成が終了した遺物については、デジタル一眼レフカメラを用いて写真撮影を行なった。

以上の経過を経て作成した遺構・遺物調書をもとに執筆した本文と、遺構・遺物の写真・図面等のレイアウトおよび編集作業を DTP ソフトウェアを用いて実施し、本書の印刷・製本を完了した。

第4章 調査の結果

第1節 磯ヶ坂遺跡

1. 基本層序

調査区ごとの立地条件により土層の堆積状況に違いが見られるが、基本層序はⅠ～Ⅷ層に大別される（第3表）。Ⅰ層は表土ないしは現耕作土で、層厚は15～25cm程度である。Ⅱ層は旧表土ないしは旧耕作土で、層厚は10～30cm程度である。近世～近代の陶磁器片などを含む。Ⅲ層はクロボクあるいはノボクと称される黒色火山灰土で、層厚は20～60cm程度である。丘陵斜面部から沢地に堆積し、斜面下部では複数の再堆積層を形成する。Ⅳ層はⅢ層下部とⅤ層上部に形成された漸移層で、層厚は20cm程度である。Ⅴ層は黄褐色ロームで、層厚は30～40cm程度、Ⅵ層は白色粘土の水成堆積物で、層厚は30～50cm程度である。Ⅶ層は猿岩と通称される青灰色凝灰質シルトで、層厚は20～40cm程度である。川崎スコリア（板垣ほか1981）に相当するとみられる。Ⅷ層は砂礫を含む白色粘土層で、層厚は20cm以上である。

2. 遺構と遺物

（1）西部地区

確認した遺構は、土坑7基、溝跡9条、柱穴23か所である。いずれも丘陵部の西3区に分布する（第8図）。柱穴は散在しており建物などは確認できなかつた。遺物は土坑、溝跡などから縄文土器、弥生土器、須恵器、陶磁器、銅鏡がごく少数出土した。

出土遺物の年代と出土状況などから、確認した遺構は弥生時代・近世に位置づけられるものがある。以下、確認した主要な遺構と遺物について詳述する。なお、遺構は全体の様相を把握でき特徴的なもの、遺物が出土しているものについて記述し、文末にすべての遺構の観察表を作成して掲載した（第4表）。

① 土坑

【SK2土坑】（第10図、写真図版2・10）

【位置】西3区／東向緩斜面

【重複】なし

第3表 基本層序

層名	土性	性格	層厚(cm)	備考
I層	黒褐色シルト	表土・現耕作土	15-25	
II層	黒色シルト	旧表土・旧耕作土	10-30	近世～近代の陶磁器片を含む
III層	黒色シルト	黒色火山灰	20-60	丘陵部では流出・削平により消失
IV層	暗褐色シルト	漸移層	20	
V層	黄褐色 粘質シルト	黄褐色ローム	30-40	遺構確認面
VI層	白色粘土	水成堆積物	30-50	
VII層	青灰色 凝灰質シルト	スコリア 堆積物	20-40	川崎スコリア (Za-Kw)
VI層	白色粘土	水成堆積物	20-	砂礫を含む

調査区内すべての層位を確認した地点はなく、丘陵部ではⅢ・Ⅳ層が流出・削平により消失している。遺構はいずれもV層の上面で確認した。

【規模・形状】平面形が長軸43cm、短軸40cmの楕円形で、断面形は深さ6cmの椀形を呈する。底面は平坦である。

【堆積土】黄褐色ローム粒を少量含む暗褐色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。

【遺物】底面付近の堆積土中で弥生土器深鉢が出土した（第12図1-3）。

【SK5土坑】（第10図、写真図版2）

【位置】西3区／東向緩斜面

【重複】なし

【規模・形状】平面形が長軸70cm、短軸66cmの楕円形で、断面形は深さ28cmのU字形を呈する。底面は平坦である。

【堆積土】黄褐色粘土ブロックと、炭化物片を多く含む黒褐色シルトで、人為的理土と考えられる。

【遺物】弥生土器の小破片が出土した。

【SK9土坑】（第10図、写真図版3・10）

【位置】西3区／東向緩斜面

【重複】SK9→SK8

【規模・形状】平面形が長軸110cm、短軸100cmの

梢円形で、断面形は深さ44cmの逆台形を呈する。底面は平坦である。

【堆積土】2層に細分される。1層は黄褐色ローム粒を含む黒褐色シルト、2層は黄褐色ロームブロックを多量に含む褐色粘質シルトである。いずれも人為的埋土と考えられる。

【遺物】銅鏡(寛永通寶6点、第12図8・9)が出土した。

【SK17 土坑】(第10図)

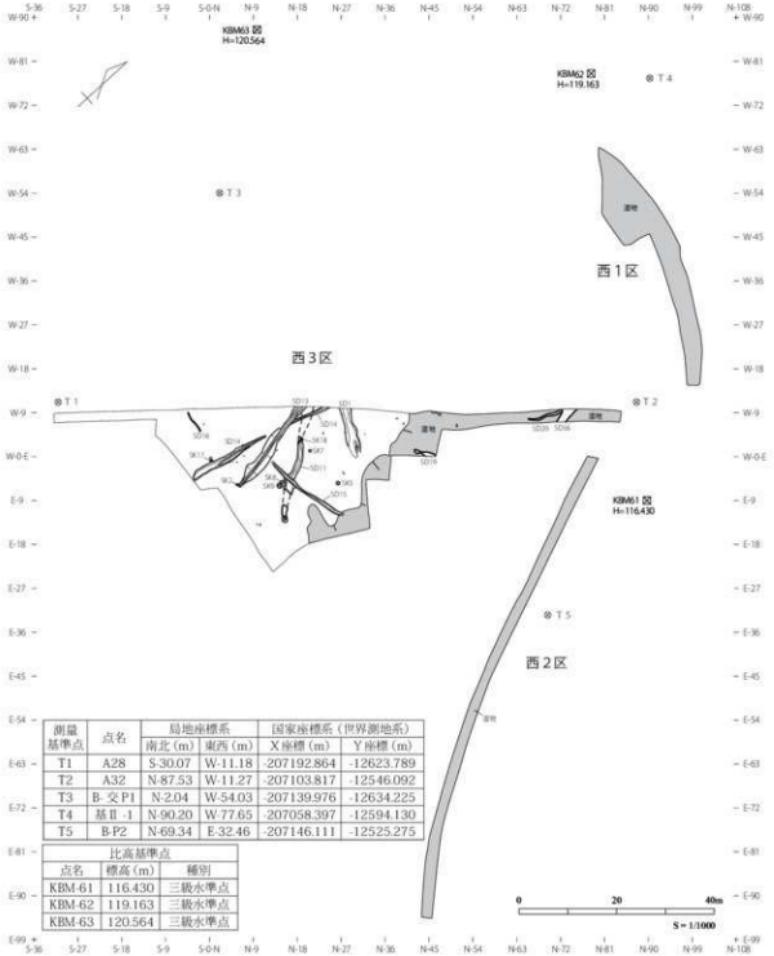
【位置】西3区／東向緩斜面

【重複】なし

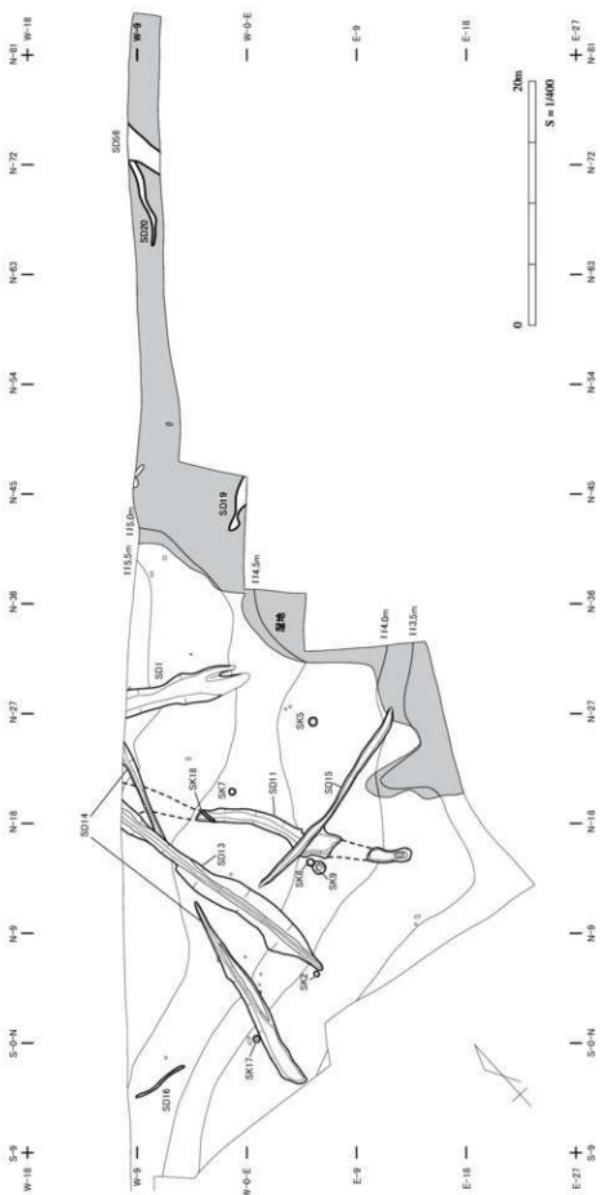
【規模・形状】平面形が直径55cmの円形で、断面形は深さ20cmの椀形を呈する。底面は皿状に浅く窪む。

【堆積土】炭化物粒・礫を多く含む黒色粘土で、人為的埋土と考えられる。

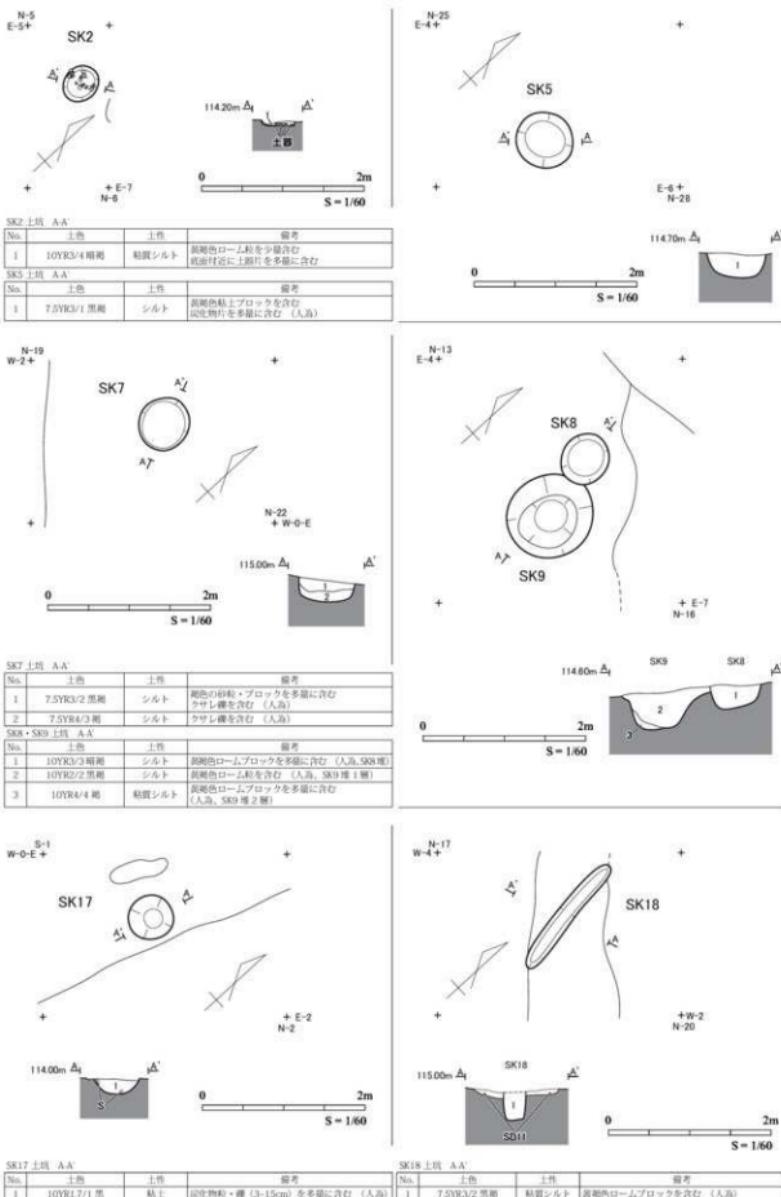
【遺物】堆積土から弥生土器深鉢の小破片が出土した。



第8図 西部地区調査区配図



第9図 西3区測量配置図



第10図 SK2・5・7~9・17・18土坑

② 溝跡

【SD1溝跡】(第11図、写真図版3・10)

【位置】西3区／東向緩斜面

【重複】なし

【規模・形状】北西—南東方向に延び、長さ10.5mを確認した。北西側は調査区外へ延びており、南東側は削平により消失している。上幅150~260cm、底幅140cmで、横断面形は深さ16cmの逆台形を呈する。

【堆積土】黄褐色砂質ロームブロック、小礫を多量に含む黒褐色シルトで、自然流入土と考えられる。

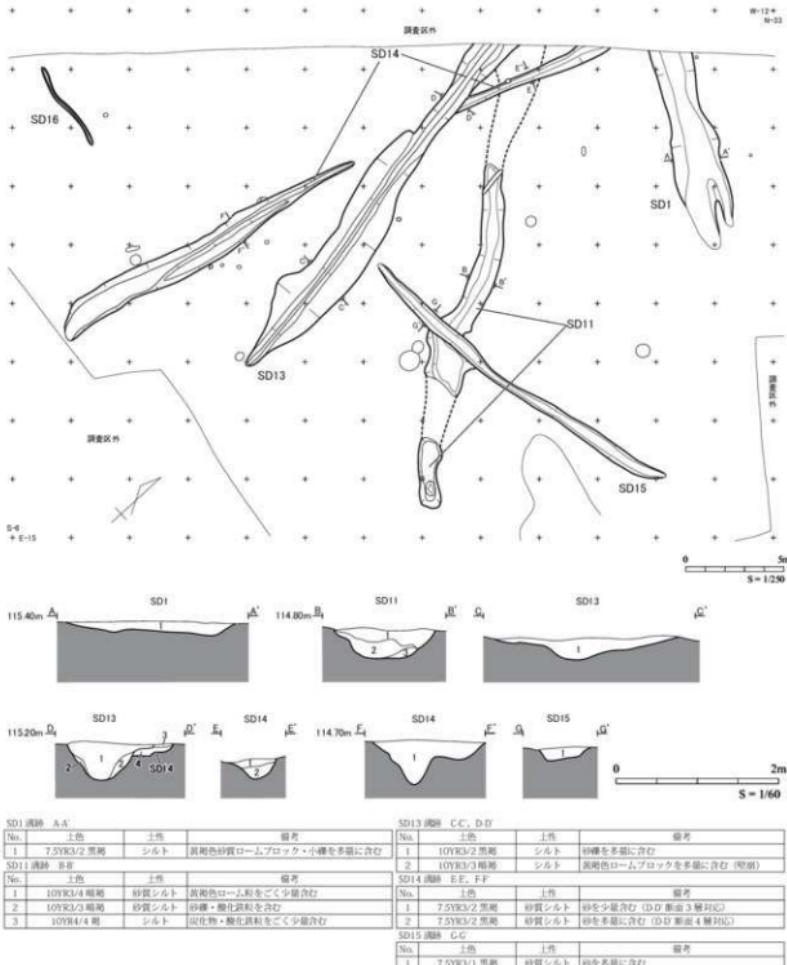
【遺物】堆積土から陶器擂鉢が出土した(第12図4)。

【SD13溝跡】(第11図、写真図版3・10)

【位置】西3区／東向緩斜面

【重複】SD14→SD13

【規模・形状】北西—南東方向に延び、長さ21.0mを確認した。北西側は調査区外へ延びており、南東側



第11図 SD1・11・13~16溝跡

は削平により消失している。上幅 90~290cm、底幅 15~35cm で、横断面は深さ 95cm の逆台形あるいは皿状を呈する。

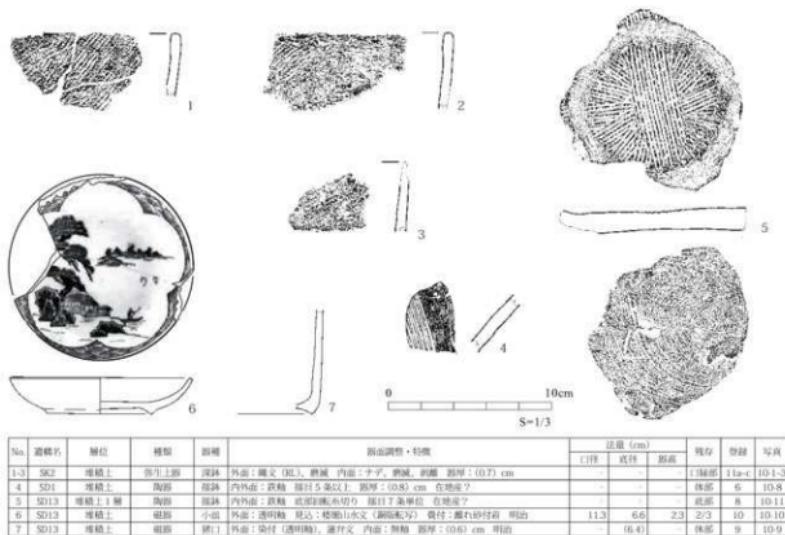
〔堆積土〕2 層に細分される。1 層は砂礫を多量に含む黒褐色シルト、2 層は黄褐色ロームブロックを多量に含む暗褐色シルトである。1 層は自然流入土、2 層

は自然崩落土と考えられる。

〔遺物〕堆積土 1 層から陶器擂鉢（第 12 図 5）、堆積土から磁器碗・皿・小皿（第 12 図 6）・猪口（第 12 図 7）、瓦質土器火鉢？の小破片が出土した。

〔SD14 溝跡〕（第 11 図、写真図版 3）

〔位置〕西 3 区／東向緩斜面



第 12 図 SK2・SK9 土坑、SD1・13 溝跡、遺構出土遺物

〔重複〕 SD11 → SD14 → SD13

〔規模・形状〕 南北方向に延び、長さ 30.7m を確認した。一部削平により消失しているが、両端が調査区外へ延びているとみられる。上幅 30~150cm、底幅 20~100cm で、横断面形は深さ 54cm の逆台形を呈する。
 〔堆積土〕 2 層に細分される。1 層は少量の砂を含む黒褐色砂質シルト、2 層は多量の砂を含む黒褐色砂質シルトで、いずれも自然流入土と考えられる。
 〔遺物〕 堆積土から弥生土器の小破片が出土した。

(2) 東部地区

確認した遺構は、竪穴住居跡 1 軒、貯蔵穴 6 基、落とし穴 6 基、近世墓 8 基、土坑 13 基、溝跡 1 条、柱穴 17 か所である。いずれも丘陵部の東 3~5 区に分布する(第 13 図)。遺物は竪穴住居跡、貯蔵穴、近世墓などから縄文土器、弥生土器、ロクロ土師器、陶器、石器、煙管、和鉄、毛抜き、鉄錐、火打石、ガラス小玉、銅錢などが少数出土した。出土遺物の修復後総量は遺物収納コンテナ(44 × 60 × 15cm)で 7 箱分である。

出土遺物の年代と出土状況などから、確認した遺構は縄文時代、弥生時代、平安時代、近世に位置づけられるものがある。以下、確認した主な遺構と遺物について詳述する。なお、遺構は全体の様相が把握でき特徴的なもの、遺物が出土しているものについて記述し、章末にすべての遺構の観察表を作成して掲載した。

① 竪穴住居跡

【SI21 竪穴住居跡】(第 16 図、写真図版 4・11)

〔位置〕 東 3 区／平坦面

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 長辺 2.82m、短辺 2.28m／カマド・貯蔵穴のある東壁の一部が張り出す不整方形を呈する。

〔方向〕 カマド中軸線：N 54° E

〔壁面〕 地山を壁として外傾気味に立ち上がる。残存壁高は最大 12cm である。

〔床面・堆積土〕 住居掘方埋土および地山を床とし、西向きにやや傾斜する。床面を覆う堆積土は地山ブロックを含む暗褐色シルトで、住居廃絶後の自然堆積土と考えられる。

〔主柱穴・周溝・壁材〕 なし

〔カマド〕 住居東壁中央寄りに付設する。幅 38cm、奥行 48cm の範囲で床面が赤色硬化しており、燃焼部底面の痕跡とみられる。側壁は残存していない。

〔貯蔵穴〕 カマド右側の住居南東隅で貯蔵穴とみられる土坑 1 基(K1)を確認した。平面形が長軸 84cm、

③ 柱穴跡

西 3 区で 23 か所確認した。ごく散漫に分布し、柱跡あるいは建物跡として確認できたものはない。また、遺物は出土していない。

④ 遺構外出土遺物

西 2 区の基本層 II 層から須恵器坏、西 3 区の遺構確認面から縄文土器(第 12 図 10・11)、弥生土器、陶器の小破片が出土した。

短軸 50cm の楕円形で、断面形は深さ 24cm の逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は 2 層に細分され、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔遺物〕 住居床面直上からロクロ土師器坏(第 16 図 1・2)・甕(第 16 図 3)が出土した。このほか、貯蔵穴・カマド内堆積土・住居内堆積土・住居掘方埋土・遺構確認面からロクロ土師器坏・小型甕・甕の小破片、凝灰岩切石、珪質頁岩製剝片が出土した。凝灰岩切石は 5 × 7 × 14cm の柱状を呈する。

② 貯蔵穴

【SK22 貯蔵穴】(第 17 図、写真図版 8・11)

〔位置〕 東 4 区／平坦面

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形が長軸 80cm、短軸 68cm の略円形で、断面形は深さ 70cm の不整なプラスコ形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕 8 層に細分される。1~3・8 層は黄褐色ローム・スコリア粒を含む暗褐色シルト、4~7 層は黄褐色ローム・スコリア粒、暗褐色土ブロックを少量含む褐色シルトである。1~3 層は人為的埋土、4~7 層は自然崩落土、8 層は自然堆積土と考えられる。

〔遺物〕 堆積土から縄文土器深鉢(第 18 図 1)などの小破片、珪質頁岩製剝片が出土した。

【SK24 貯蔵穴】(第 17 図、写真図版 8・11)

〔位置〕 東 4 区／平坦面

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形が長軸 180cm、短軸 158cm の不整楕円形で、断面形は深さ 85cm のプラスコ形を呈する。底面は皿状に浅く窪む。

〔堆積土〕 4 层に細分される。黄褐色ローム・スコリア粒を含む褐色・黄褐色・暗褐色シルトである。いずれも人為的埋土と考えられる。

〔遺物〕 堆積土から縄文土器深鉢(第 18 図 2)などの小破片、鉄石英製石核、珪質頁岩製剝片が出土した。

【SK25 貯藏穴】(第17図、写真図版7)

〔位置〕東4区／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸170cm、短軸125cmの不整梢円形で、断面形は深さ79cmのプラスコ形を呈する。底面は皿状に浅く窪む。

〔堆積土〕4層に細分される。1・2・4層は黄褐色ローム・白色粘土粒・スコリア片を含む褐色シルト、3層は黄褐色ローム・白色粘土粒を含む黒褐色シルトである。

る。いずれも人為的埋土と考えられる。

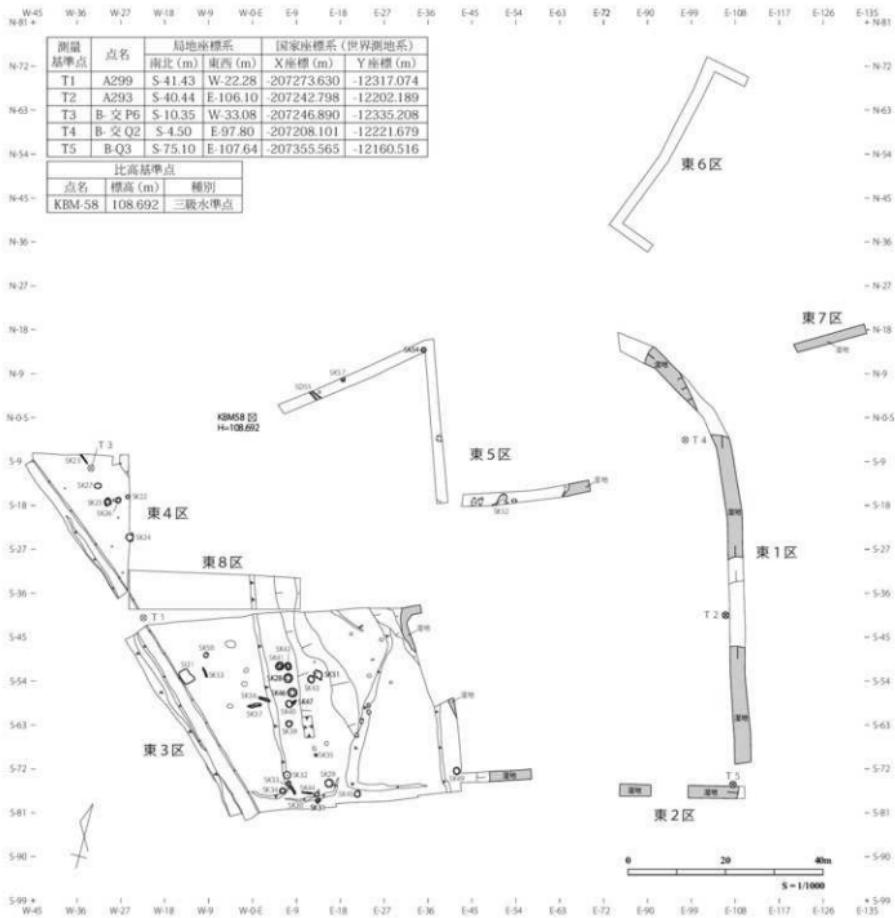
〔遺物〕堆積土4層から頁岩製石核、確認面から土器の小破片が出土した。

【SK27 貯藏穴】(第17図、写真図版8・11)

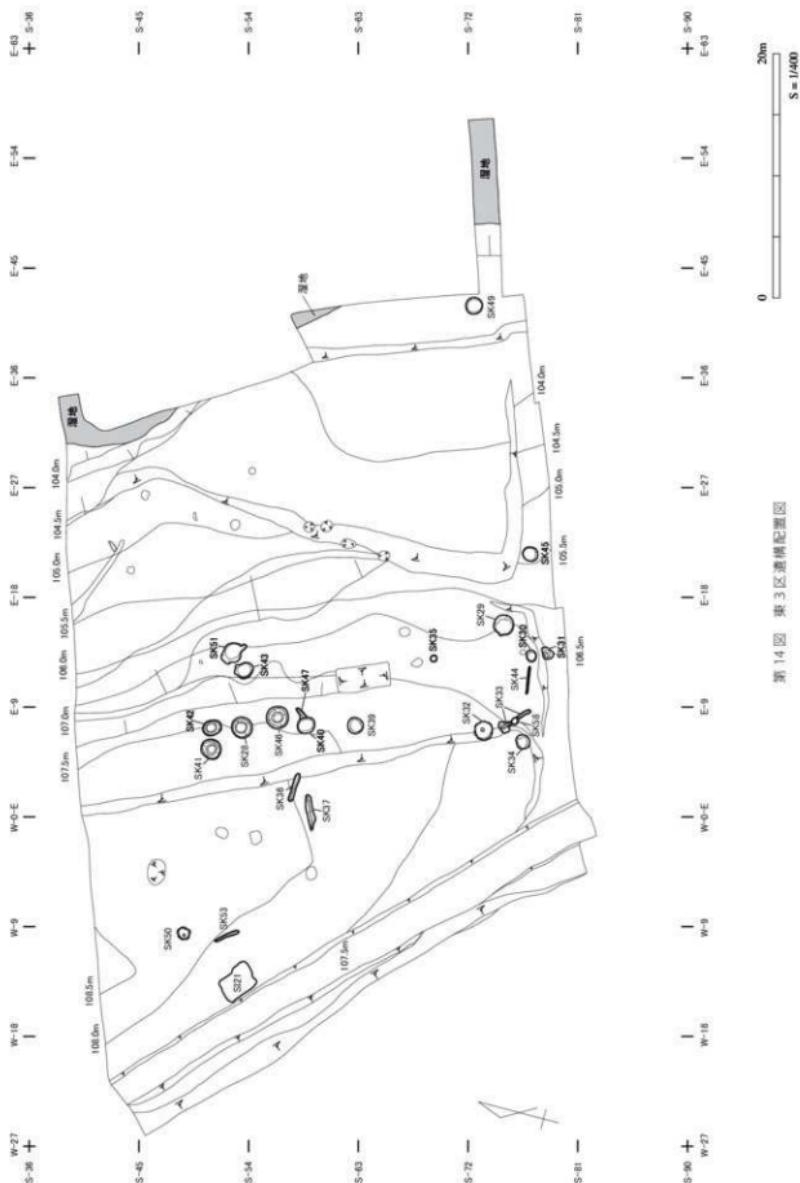
〔位置〕東4区／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸140cm、短軸105cmの梢円形で、断面形は深さ27cmのプラスコ形を呈する。底面は皿状に浅く窪む。

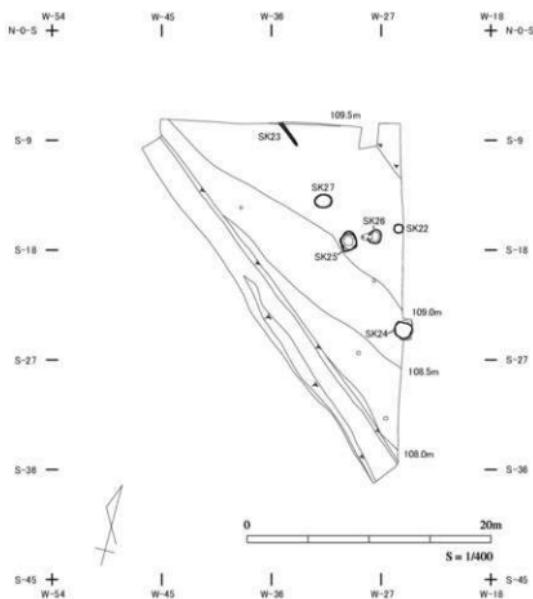


第13図 東部調査区配置図

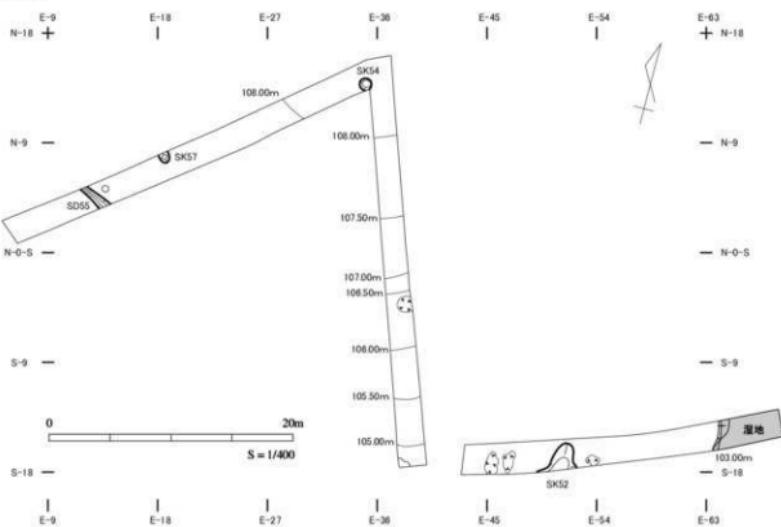


第114図 東3区構造配置図

東4区



東5区



第15図 東4・5区遺構配図

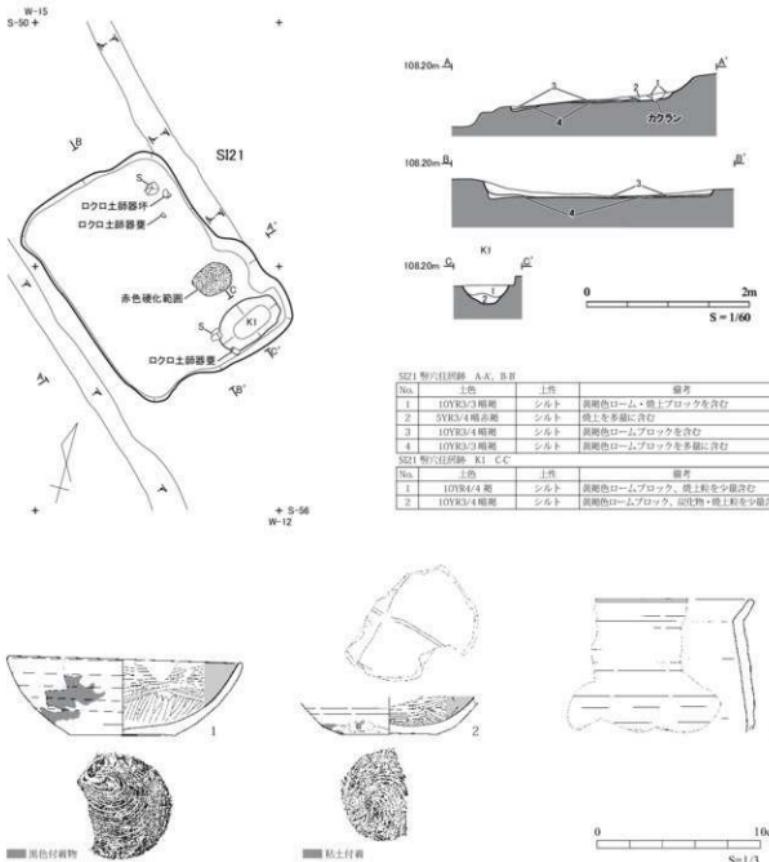
〔堆積土〕5層に細分される。1-4層は焼土ブロック・粒・炭化物粒を含む褐色・暗褐色・極暗褐色シルト、5層は焼土粒を少量含む明褐色粘質シルトである。1-4層は人為的理土、5層は自然崩落土と考えられる。〔遺物〕堆積土から縄文土器深鉢（第18図3）、珪質頁岩製碎片が出土した。

【SK32 貯藏穴】（第18図、写真図版4・11）

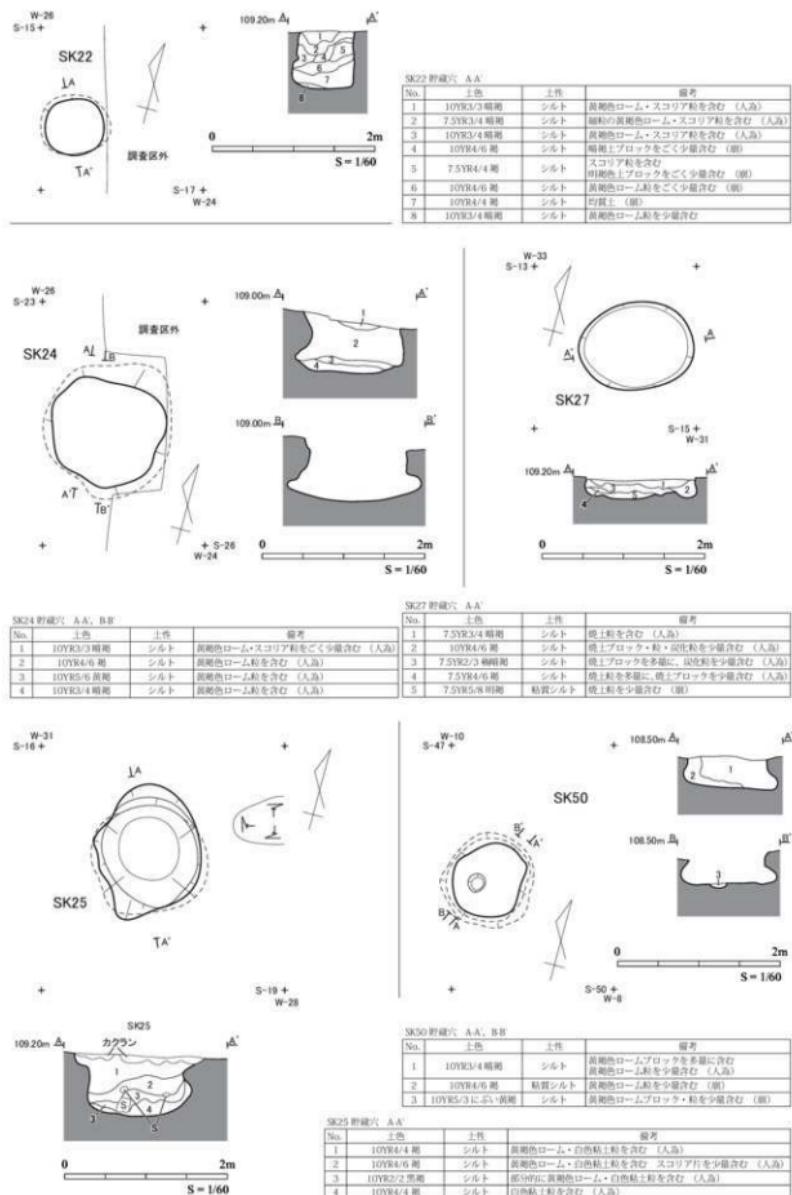
〔位置〕東3区／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸164cm、短軸155cmの略円形、断面形が深さ142cmのプラスコ形を呈する。底面は平坦である。



第16図 SK21 窝穴住居跡

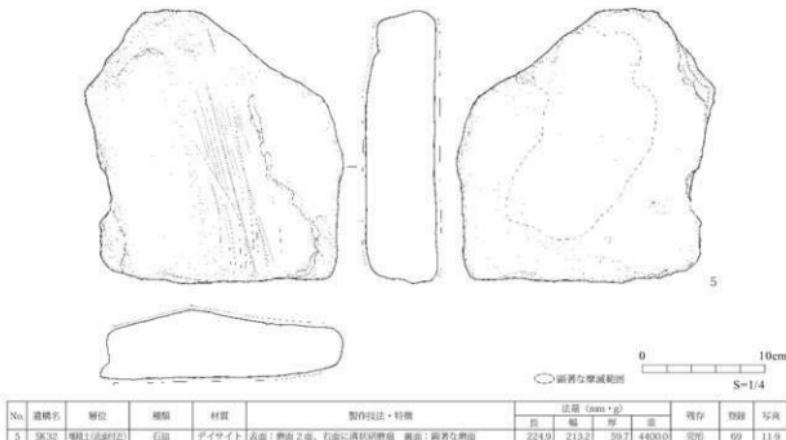
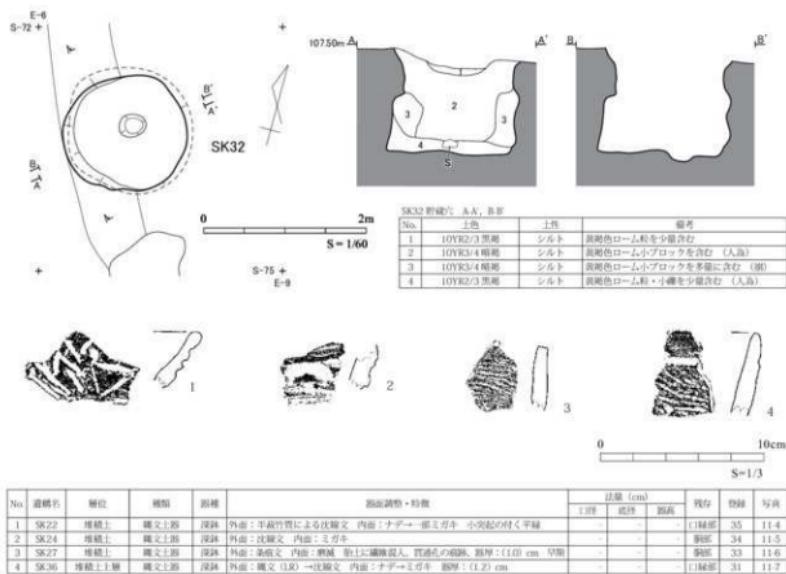


第17図 SK22・24・25・27・50貯藏穴

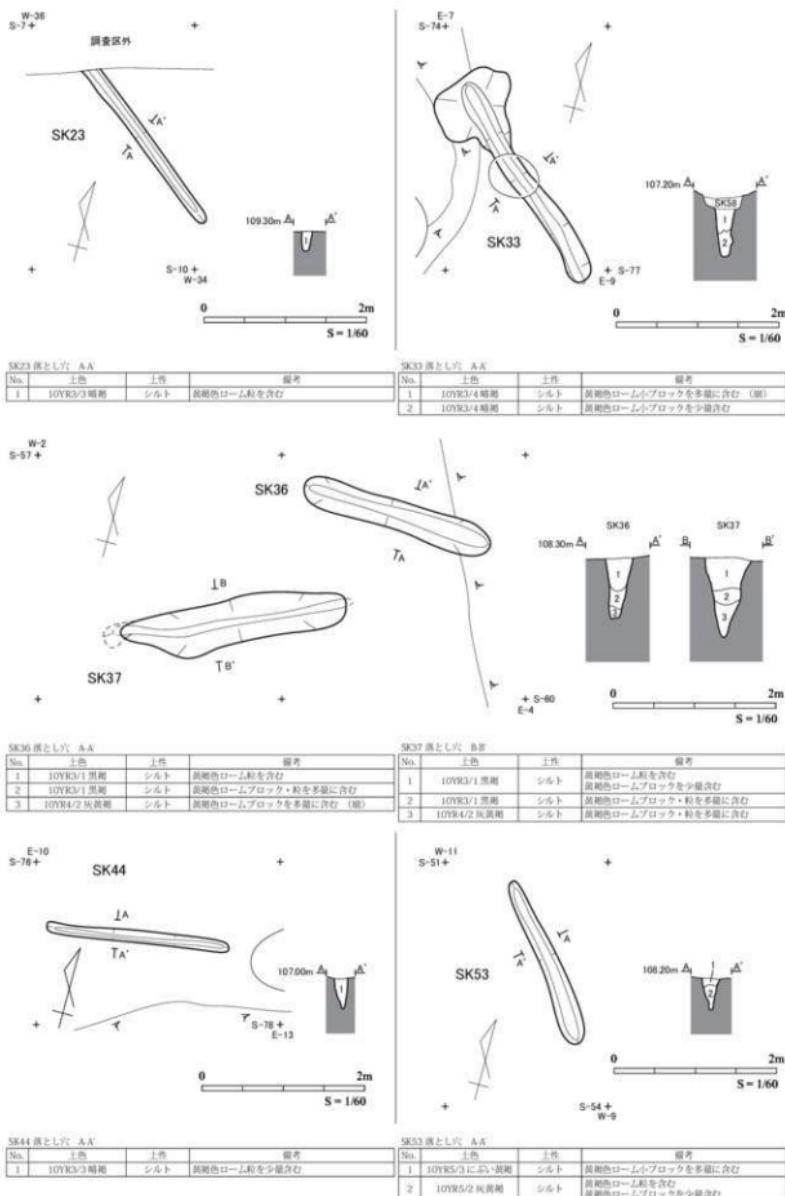
(堆積土) 4層に細分される。1層は黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色シルト、2層は黄褐色ローム小ブロックを含む暗褐色シルト、3層は黄褐色ローム小ブロックを多量に含む暗褐色シルト、4層は黄褐色ローム粒・小礫を少量含む黒褐色シルトである。1層は自

然堆積土、2・4層は人為的埋土、3層は自然崩落土と考えられる。

[遺物] 底面付近の堆積土からディサイト製石皿(第18図5)、堆積土から流紋岩礫、遺構確認面から弥生土器の小破片が出土した。



第18図 SK32 貯藏穴 SK22・24・27・32 貯藏穴、SK36 落とし穴出土遺物



第19図 SK23・33・36・37・44・53落とし穴

【SK50 貯藏穴】(第17図、写真図版5)

【位置】東3区／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】平面形が長軸116cm、短軸113cmの不整円形で、断面形は深さ40cmのフラスコ形を呈する。底面は平坦で、中央付近にピット状の窪みを持つ。

【堆積土】3層に細分される。1層は多量の黄褐色ロームブロックと少量の黄褐色ローム粒を含む暗褐色シルト、2層は黄褐色ローム粒を少量含む褐色粘質シルト、3層は黄褐色ロームブロック・粒を少量含むにぶい黄褐色シルトである。1層は人為的理土、2・3層は自然崩落土と考えられる。

【遺物】なし

③ 落とし穴

【SK23 落とし穴】(第19図、写真図版8)

【位置】東4区／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】一部が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、平面形が長軸230cm以上、短軸12cmの溝形で、横断面形は深さ26cmのU字形を呈する。底面は皿状に浅く窪む。

【堆積土】黄褐色ローム粒を含む暗褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

【遺物】堆積土から縄文土器の小破片が出土した。

【SK33 落とし穴】(第19図、写真図版5)

【位置】東3区／平坦面

【重複】SK33→SK58

【規模・形状】平面形が長軸296cm、短軸37cmの溝形で、横断面形は深さ80cmのV字形を呈する。底面は平坦である。

【堆積土】2層に細分される。1層は多量の黄褐色ローム小ブロック、2層は少量の黄褐色ローム小ブロックを含む暗褐色シルトである。1層は自然崩落土、2層は自然堆積土と考えられる。

【遺物】なし

【SK36 落とし穴】(第19図、写真図版5・11)

【位置】東3区／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】平面形が長軸240cm、短軸43cmの溝形で、横断面形は深さ70cmのV字形を呈する。底面は平坦である。

【堆積土】3層に細分される。1層は黄褐色ローム粒を含む黒褐色シルト、2層は黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む黒褐色シルト、3層は黄褐色ロームブ

ロックを多量に含む灰黄褐色シルトである。1・2層は自然堆積土、3層は自然崩落土と考えられる。

【遺物】堆積土上層から縄文土器深鉢(第18図4)が出土した。

【SK37 落とし穴】(第19図、写真図版5)

【位置】東3区／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】平面形が長軸309cm、短軸60cmの溝形で、横断面形は深さ100cmのV字形を呈する。底面は皿状に浅く窪む。

【堆積土】3層に細分される。1層は黄褐色ローム粒と少量の黄褐色ロームブロックを含む黒褐色シルト、2層は黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む黒褐色シルト、3層は黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む灰黄褐色シルトである。1・2層は自然堆積土、3層は自然崩落土と考えられる。

【遺物】なし

【SK44 落とし穴】(第19図、写真図版5)

【位置】東3区／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】長軸224cm、短軸20cmの溝形で、横断面形は深さ36cmのV字形を呈する。底面は皿状に浅く窪む。

【堆積土】黄褐色ローム粒を少量含む暗褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

【遺物】なし

【SK53 落とし穴】(第19図、写真図版5)

【位置】東3区／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】平面形が長軸215cm、短軸30cmの溝形で、横断面形は深さ40cmのV字形を呈する。底面は皿状に浅く窪む。

【堆積土】2層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含むにぶい黄褐色・灰黄褐色シルトで、いずれも自然崩落土と考えられる。

【遺物】なし

④ 近世墓

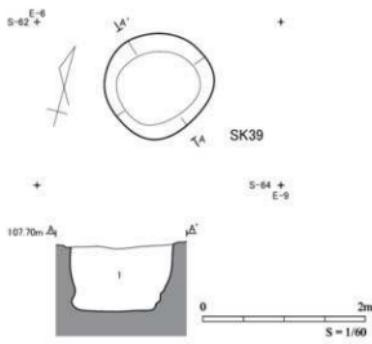
【SK28 近世墓】(第20図、写真図版6・11)

【位置】東3区／平坦面

【重複】なし

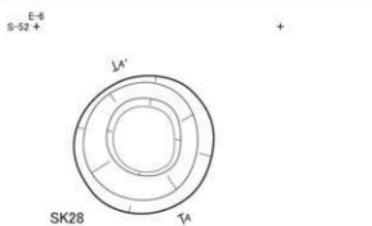
【規模・形状】平面形が長軸175cm、短軸165cmの円形で、断面形は深さ150cmの逆凸字形を呈する。底面は平坦である。

【堆積土】5層に細分される。黄褐色ローム・白色粘



SK28 近世墓 AA'		土性	備考
1	10Y3/4 明周	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む 白粘土・ブロックを少量含む（人馬）
2	明周	シルト	黄褐色ローム・ブロックを極めて多量に含む 白粘土・ブロックを少量含む（人馬）
3	黒粘	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む 白粘土・ブロックを少量含む（人馬）
4	黒粘	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む 白粘土・粘土を混合含む（人馬）
5	明周	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む 白色粘土・ブロックをごく少量含む（人馬）

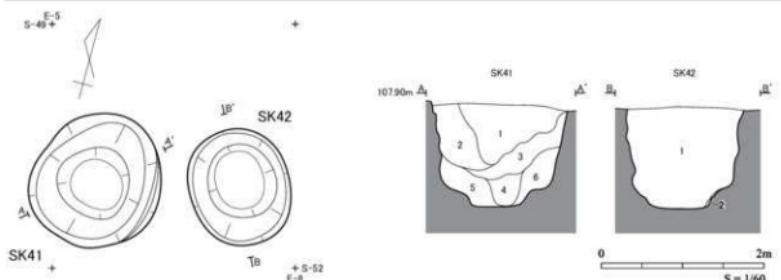
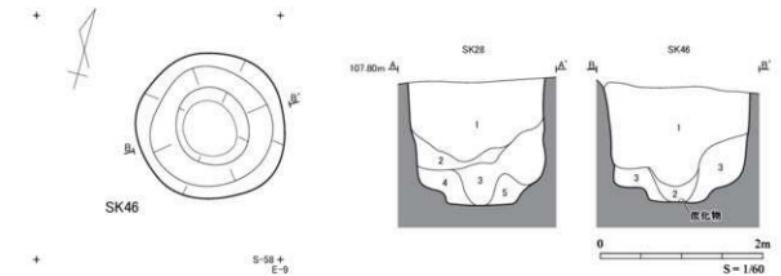
SK29 近世墓 AA'		土性	備考
1	10Y3/3/4 明周	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む 黄褐色ローム・ブロックを少量含む（人馬）



SK41 近世墓 AA'		土性	備考
1	明周	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む 黄褐色ローム・ブロックをごく少量含む（人馬）
2	明周	シルト	黄褐色ローム・ブロックを極めて多量に含む （人馬）
3	黒粘	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む（人馬）
4	黒粘	シルト	黄褐色ローム・ブロックをごく少量含む（人馬）
5	明周	シルト	白粘土（人馬）
6	明周	シルト	白粘土・ブロックを多量に含む（人馬）

SK42 近世墓 BB'		土性	備考
1	10Y4/4 明周	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む 黄褐色ローム・ブロックを少量含む（人馬）
2	10Y4/4 黒	シルト	白粘土を量に含む

SK46 近世墓 BB'		土性	備考
1	10Y3/3/4 明周	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む 黄褐色ローム・白色粘土・ブロックをごく少量含む
2	10Y3/3/4 明周	シルト	下部に化物を含む
3	10Y4/6 明周	シルト	黄褐色ローム・ブロック、白色粘土・ブロックを多量に含む



第20図 SK28・39・41・42・46近世墓

土ブロックを多量に含む黒褐色・暗褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔遺物〕堆積土から鉄釘（角鉤7点）、木片、遺構確認面から縄文土器深鉢（第23図7）が出土した。

【SK39 近世墓】（第20図、写真図版6）

〔位置〕東3区／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸130cm、短軸126cmの略円形で、断面形は深さ80cmのU字形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕黄褐色ロームブロック・粒を含む暗褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔遺物〕なし

【SK40 近世墓】（第21図、写真図版6）

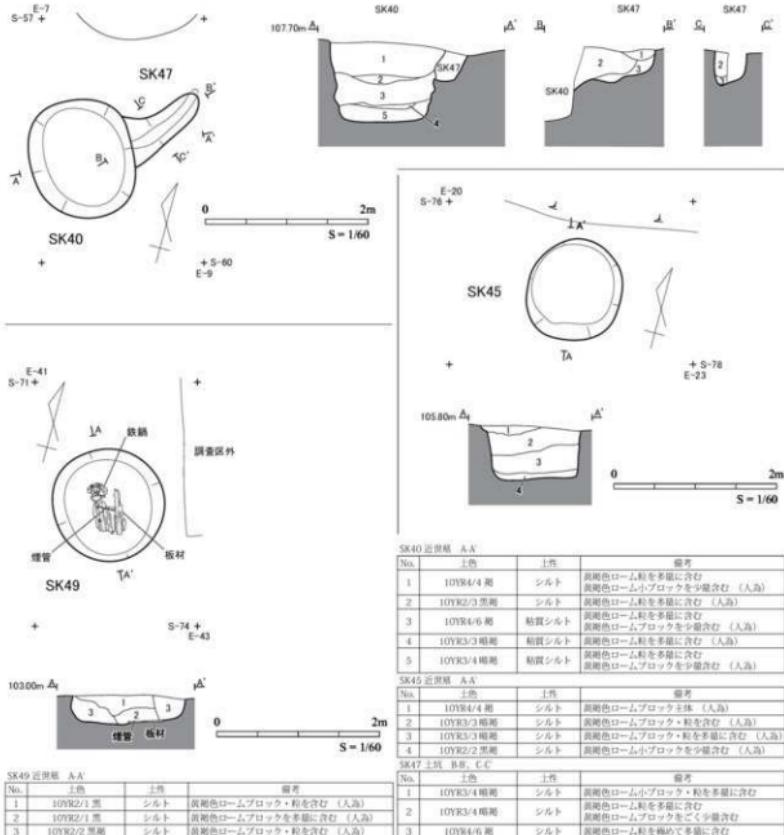
〔位置〕東3区／平坦面

〔重複〕SK47 → SK40

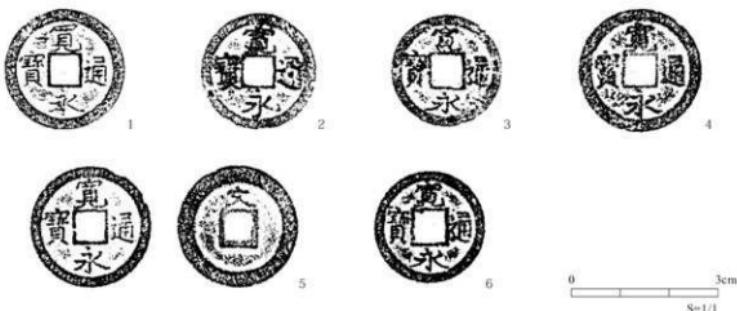
〔規模・形状〕平面形が長軸147cm、短軸126cmの梢円形で、断面形は深さ105cmの逆台形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕5層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む褐色・黒褐色シルト、褐色・暗褐色粘質シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

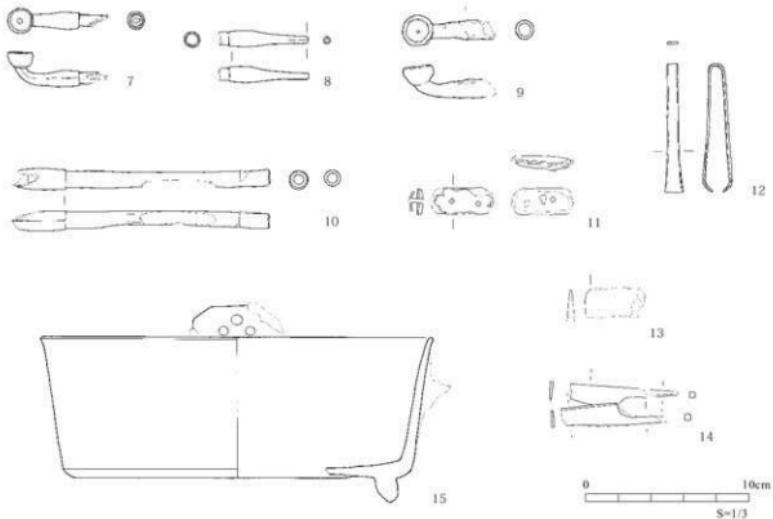
〔遺物〕堆積土から縄文土器・弥生土器・陶器の小破片が出土した。



第21図 SK40・45・49近世墓、SK47土坑

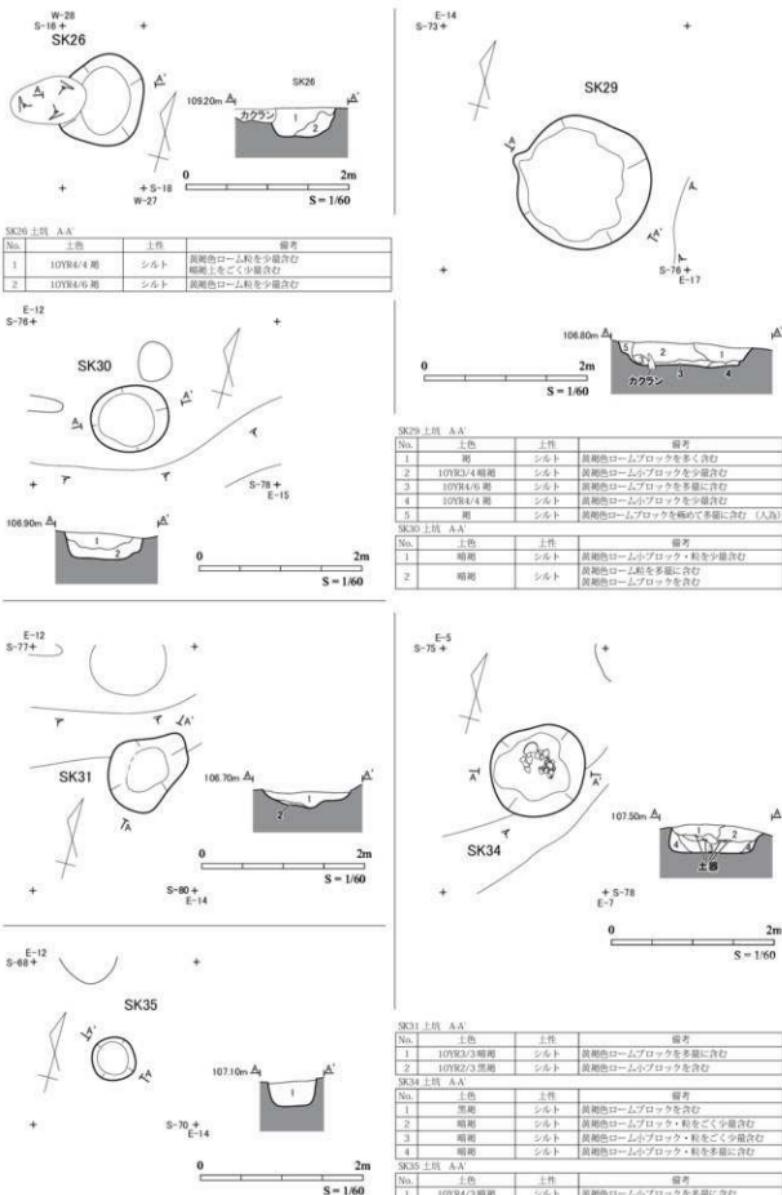


No.	遺物名	層位	種類	材質	特徴	法規 (mm・g)			現存	登錄	写真
						径	幅	厚			
1	SK41	堆積土	實水通寶	銅	銘文「實水通寶」、新舊水銅	25.7	1.2	.34	完形	56a	12.1
2	SK41	堆積土	實水通寶	銅	銘文「實水通寶」、古舊水銅	24.2	1.1	.3	完形	56b	12.2
3	SK41	堆積土	實水通寶	銅	銘文「實水通寶」、新舊水銅	23.1	0.9	.22	完形	56c	12.3
4	SK42	堆積土	實水通寶	銅	銘文「實水通寶」、新舊水銅	25.5	1.0	.30	完形	65	12.14
5	SK42	坑面	實水通寶	銅	銘文「實水通寶」、背有「文」、新舊水銅（文銅）	25.1	1.2	.18	完形	66a	12.15
6	SK42	坑面	實水通寶	銅	銘文「實水通寶」、新舊水銅	23.0	1.0	.16	完形	66b	12.16

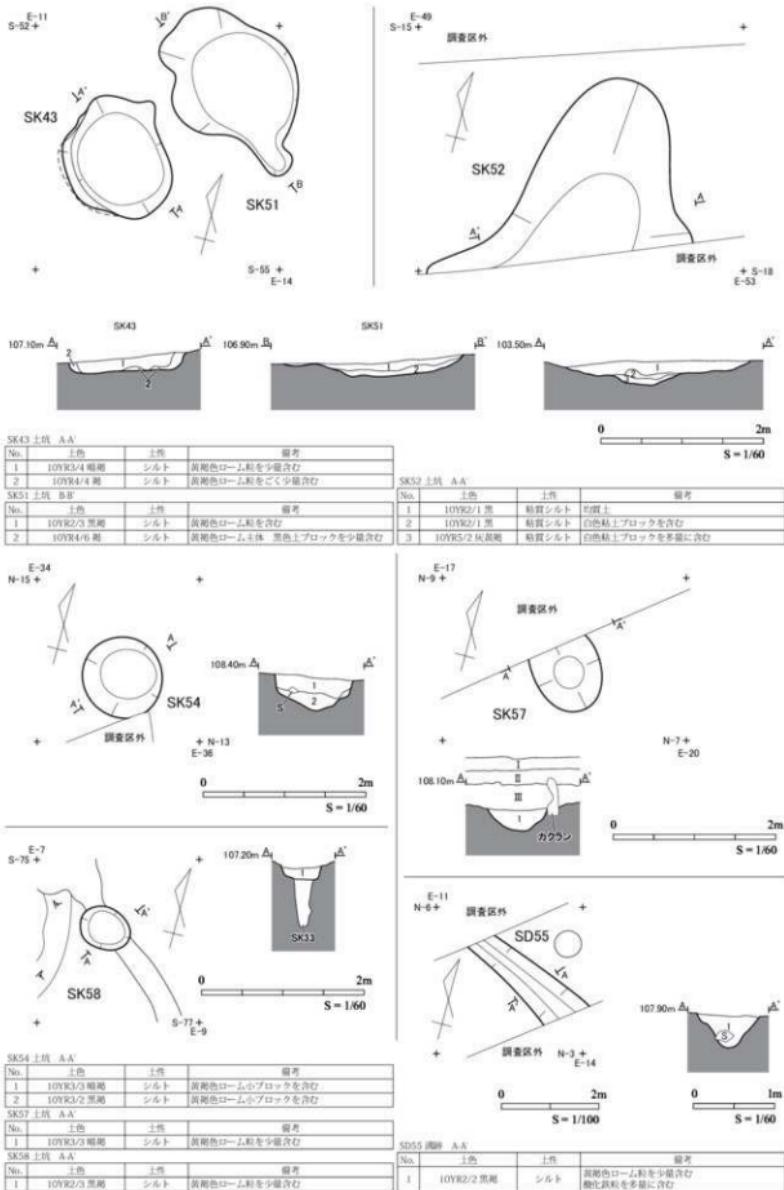


No.	遺物名	層位	種類	材質	特徴	法規 (mm・g)			現存	登錄	写真
						径	幅	厚			
7	SK41	堆積土	鐵劍（短兵）	銅	被筒形劍、竹製鞘子、劍身存、劍身長さ：4.6cm、火切付：1.5cm、小穴：0.9cm （6.2）	（1.1）	-	-	52	12.11	
8	SK41	堆積土	鐵劍（短兵）	銅	被筒形劍、柄長さ：4.5cm、火切付：0.4-0.9cm （5.6）	（1.0）	-	-	71	12.12	
9	SK46	坑面	鐵劍（短兵）	銅	被筒一部欠損、火切付：1.9cm （5.8）	（1.2）	-	-	62	13.2	
10	SK49	坑面（発掘直後）	鐵劍（短兵）	銅・竹	被筒と被筒子・柄の一部、被筒子長さ：10.9cm、被筒子幅：1.1cm、小穴：1.2cm （15.9）	1.3	-	-	72	13.11	
11	SK46	堆積土	货币或め金具	銅・銀	銅子・銀製の棒の棒の品目数2-3本より結合、銅製の品目：鍍金：5.1×30mm （1.7）	（3.9）	（0.9）	-	60	13.6	
12	SK41	堆積土	毛氷鉋	銅	刃幅：1.1cm、頭小筋：0.7cm （8.0）	0.7	0.1	完形	57	12.13	
13	SK41	堆積土	不明品	銅	下部・右側欠損、玉筋製大打石（No.44a）と位置関係にて出土 （0.8）	（1.8）	（0.4）	-	44b	12.10	
14	SK46	坑面	不明品	銅	基部・刀部外周輪刃欠損、玉筋製大打石（No.45a）と位置関係にて出土 （7.2）	（2.6）	（0.2）	-	45c	13.5	
No.	遺物名	層位	種類	材質	特徴	法規 (cm)			現存	登錄	写真
						径	幅	高さ			
15	SK49	坑面	圓（1644）	銅	銅圓（銅鏡）方孔圓（1644）と合併、基部・左側・3分の1、底部・鏡部（逆円鏡部）2分の残存 （24.1）	（19.8）	12.1	1/4	48	14	

第22図 SK41・42・46・49 近世墓出土遺物



第24図 SK26・29・30・31・34・35 土坑



第25図 SK43・51・52・54・57・58土坑、SD55溝跡

袋物は煙草入れとみられ、留め金具は袋のかぶせに取り付けた装飾のある銀製の前金具と銅製の裏座からなる。
【SK49 近世墓】(第21図、写真図版5・13・14)

〔位置〕東3区／北向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸138cm、短軸136cmの円形で、断面形は深さ36cmのU字形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕3層に細分される。黄褐色ロームブロック・

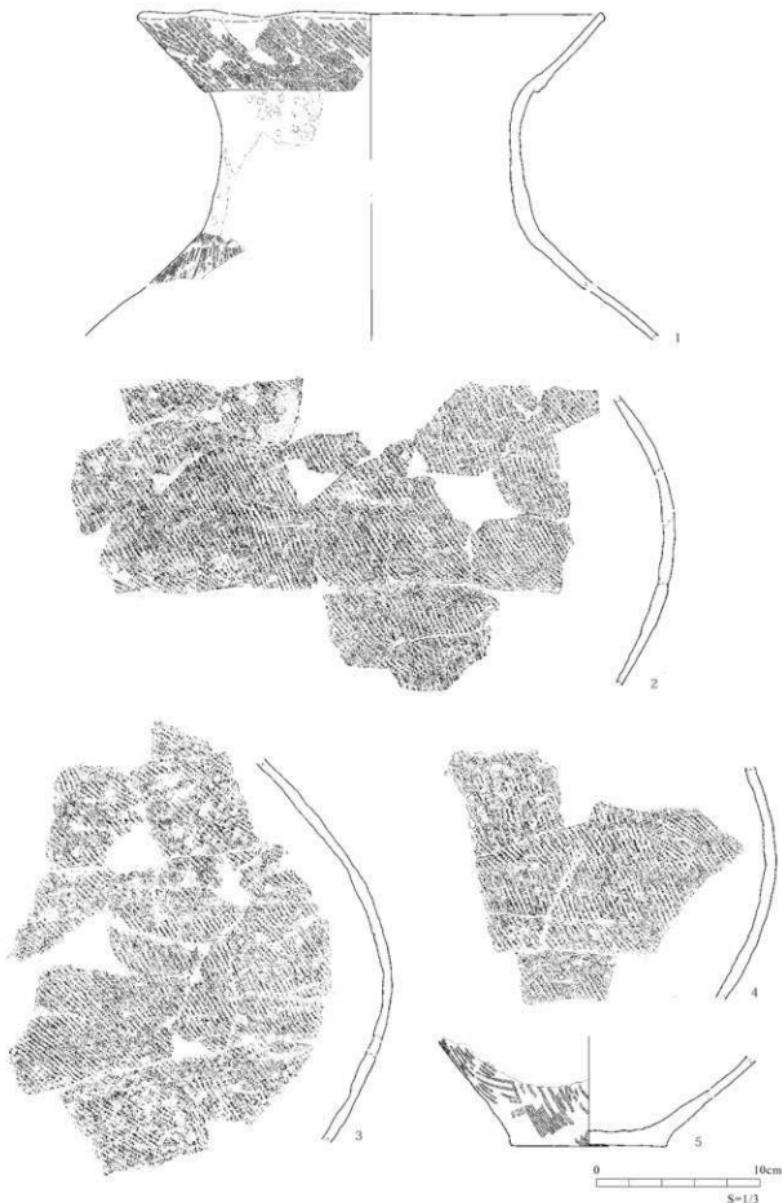
粒を含む黒色・黒褐色シルトで、いずれも人為的理土と考えられる。3層は埋葬時の埋土、1-2層は埋葬時の理土起源の崩落土と考えられる。

〔遺物〕底面直上から木製板材が出土し、板材の直上で椎管(第22図10、写真図版13-11)、ガラス製小玉(2点、第23図2・3)、骨片(歯14点、写真図版13-12)が出土した。また、板材に隣接して底面直上から吊耳鉄鍋(第22図15)が逆位に伏せられた状態で出土した。

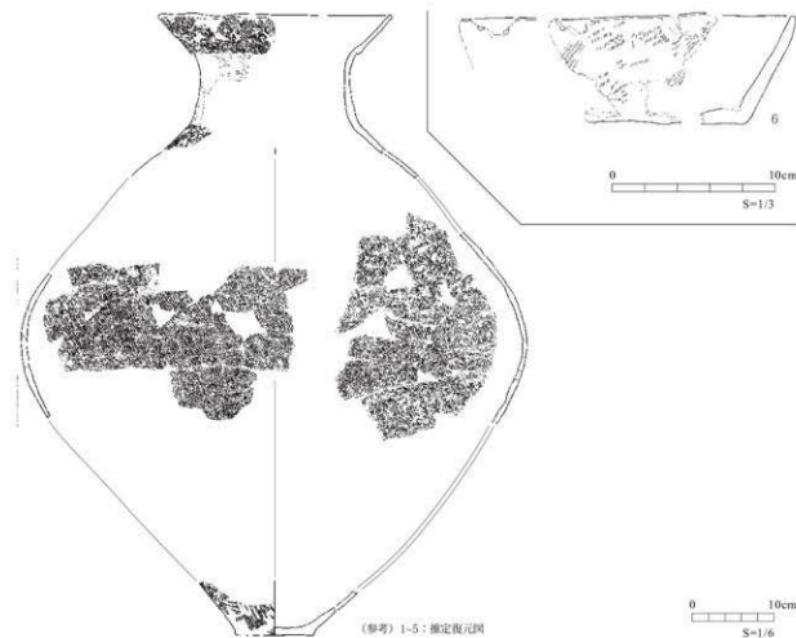


第26図 SK26・29土坑出土遺物

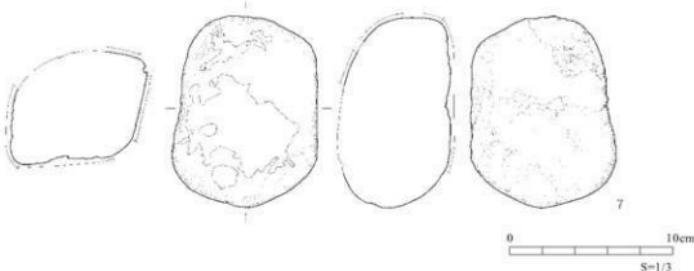
No.	遺物名	層位	種類	説明	測量調整・特徴					
					口徑	底径	高さ	測量部	登録	写真
1	SK26	堆積土	陶文土器	深鉢	外底: 円筒形孔、薄壁織文(0.5cm) 内面: ナメ、粗面、小破損口縫	-	-	1.縫部	32	15-1
2	SK29	堆積土上層	陶文土器	深鉢	外底: 植物印捺痕+手引文 内面: 細密文、波状口縫、底面部欠損 断土に纖維混入 早田織葉・岩山下層式 No.23-26: 同一部	-	-	1.1-2.縫部	25	15-3
3	SK29	堆積土上層	陶文土器	深鉢	外底: 手引文 内面: 束縞文、波状口縫 断土に纖維混入	-	-	1.縫部	23	15-4
4	SK29	堆積土上層	陶文土器	深鉢	外底: 植物印捺痕+手引文 内面: 束縞文、波状口縫、断土に纖維混入 早田織葉・岩山下層式 No.23-26: 同一部	-	-	1.縫部	24	15-2
5	SK29	堆積土上層	陶文土器	深鉢	外底: 束縞文+手引文、以化物付口 内面: 束縞文、断土に纖維混入 早田織葉 (1.1cm) 早期織葉・手引文下層式 No.23-26: 同一部	-	-	1.縫部	26	15-5



第27図 SK34+58 土坑出土遺物（1）



No.	遺物名	層位	種類	面積	剖面調整・寸法		寸付	底付	既存	登録	写真
					厚	幅					
1	SK34 墓槽上2層	弥生土器	漆	内面:(口)ナゲー繩文(GL) 一帯赤文フタ、(底)ナゲー(底付) 繩文(GL) 外縁:内面(口)は口付 No.37-41;同一部体	(28.7)	-	(20.1)	口 底付	37	16.1	
2	SK34 墓槽上2層	弥生土器	漆	外縁:ナゲー繩文を複数、炭化植物残 面厚:(0.8) cm No.37-41;同一部体	-	-	-	口 底付	38	16.3	
3	SK34 墓槽上2層	弥生土器	漆	外縁:ナゲー繩文(GL) 内面:ナゲー繩文、黒色付着物 面厚:(0.8) cm No.37-41 同一部体	-	-	-	口 底付	39	16.6	
4	SK34 墓槽上2層	弥生土器	漆	外縁:ナゲー繩文(GL) 内面:ナゲー繩文、黒色付着物 面厚:(0.8) cm No.37-41 同一部体	-	-	-	口 底付	40	16.4	
5	SK34 墓槽上2層	弥生土器	漆	外縁:(口)ナゲー繩文(GL)、(底付近)ナゲー(底)ナゲー 内面:不明(ナゲ?), 黒色付着物、鉄鏪頭着 No.37-41;同一部体	-	9.7	(6.7)	底付	41	16.5	
6	SK34 墓槽面	弥生土器	漆	外面:ナゲー繩文(L), (底)ナゲー 内面:ナゲー(縁部付近に2つの貫通孔(火掘))	-	-	6.7	口 底付	36	15.6	



No.	遺物名	層位	種類	材質	製作技法・特徴		寸幅 (mm・g)	寸	幅	厚	重	既存	登録	写真
					長	幅								
7	SK34 墓槽上1層	磨石	デイサイト	玄武岩、漂砾、上部斜面、右斜面、左斜面、胸面、底部:新しい表面	118.2	89.5	70.0	1197.0	形	70	15.7			

第 28 図 SK34・58 土坑出土遺物 (2)

⑧ 遺構外出土遺物

平成 17 年度の遺構確認調査で弥生土器（第 30 図 1）、繩文土器、土器器、剥片が出土している。

東 1 区表土から繩文土器深鉢の小破片が出土した。

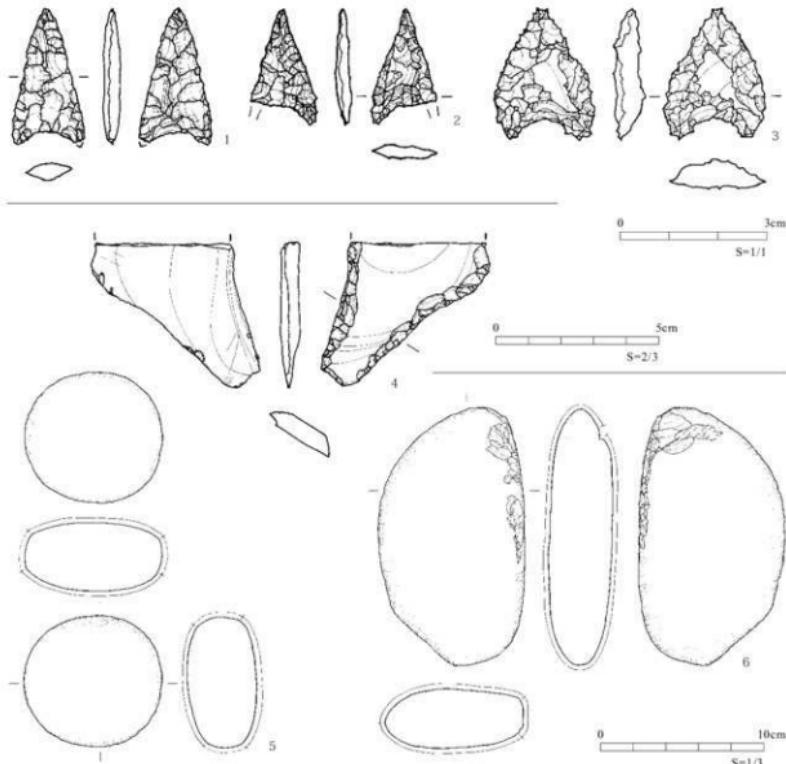
東 3 区遺構確認面から繩文土器深鉢（第 30 図 7-10）、注口土器・ミニチュア土器・弥生土器・陶器碗・瓶、磁器碗・皿・瓦質土器の小破片、流紋岩製石鑿（第 31 図 1）、珪質頁岩製削器（第 31 図 4）、珪質頁岩・流紋岩製微細剥離ある剥片、頁岩・珪質頁岩製剥片、流紋岩礫、安山岩製磨石（第 31 図 5）、ディサイト製

磨石（第 31 図 6）、擾乱土からロクロ土器器の小破片、珪質頁岩製石鑿（第 31 図 2・3）が出土した。

東 4 区基本層 1 層から繩文土器、陶器の小破片、珪質頁岩製剥片、遺構確認面から須恵器環、繩文土器の小破片、珪化凝灰岩製剥片、鉄石英製石核、擾乱土から繩文土器の小破片が出土した。

東 5 区基本層 1 層からロクロ土器器の小破片が出土した。

また、東部地区の丘陵部の畠地で繩文土器深鉢（第 30 図 2-6）、珪質頁岩製剥片が表面採集された。



第 31 図 遺構外出土遺物（2）

No.	調査区	被覆	種類	材質	製作法・特徴	法規 (mm・g)				現存	登録	写真
						長	幅	厚	重			
1	東部 3 区 壁芯部	石頭	縄文器	珪質頁岩	打制法: 基盤面: 被覆により変形 正面右基盤面: 斜削	28.0	14.8	3.8	1.1	実物	46	18.3
2	東部 3 区 壁丸	石頭	縄文器	珪質頁岩	打制法: 基盤面: 正面左基盤面: 新しい折削	24.0	3.1	13.4	0.6	部分欠損	60	18.2
3	東部 3 区 壁丸	石頭	縄文器	珪質頁岩	打制法: 基盤面: 正面からの急角度剥離	27.1	6.4	20.7	3.1	実物	49	18.1
4	東部 3 区 壁芯部	石頭	珪質頁岩	珪質頁岩	両側面: 壁面からの急角度剥離 素材打制剥離	44.0	52.5	6.0	13.2	部分欠損	47	18.4
5	東部 3 区 壁芯部	磨石	珪質頁岩	珪質頁岩	片面: 磨削 剥離全周: 打制磨	81.0	85.0	42.3	479.5	実物	67	18.5
6	東部 3 区 壁芯部	磨石	ディサイト	珪質頁岩	片面: 磨削 剥離全周: 正面右側面: 内面に不連続な剥離	159.2	90.0	39.5	886.5	実物	68	18.6

3. 考察

(1) 西部地区

① 遺物と遺構の年代

遺構と遺物の確認状況 遺構は、土坑7基、溝跡9条、柱穴23か所を確認した。遺物は縄文土器、弥生土器、須恵器、近世・近代陶磁器、銅鏡が少數出土した。土器・陶器類はいずれも小破片である。遺物の出土状況を見ると、縄文土器は遺構外からの出土である。弥生土器はSK2・5・17土坑などから出土している。近世・近代陶磁器はSD1・13溝跡から出土している。古銭は寛永通寶でSK9土坑から出土している。

遺物の特徴と年代 遺構出土の縄文土器には平口縁の深鉢の口縁部破片で、入組三叉文を施す精製土器がある。縄文時代晚期の大洞BC式に比定される可能性がある。SK2土坑出土の弥生土器は平口縁の深鉢の口縁部破片で、縄文を施す粗製土器である。SK9土坑出土の銅鏡は寛永通寶で、1668年以降の鋳造で幕末まで流通した新寛永銭である。SD1・13溝跡出土の陶器擂鉢は在地産とみられる。SD13溝跡出土の磁器小皿は見込に銅版転写を用いて棲闇山水文を繪付けする。銅版転写は1890年代後半には量産品陶

磁器の主要な装飾技法として確立し、大正末～昭和初めにゴム版絵付けが実用化されるまで主流を占めたとされている（成瀬2001）。このことから、SD13溝跡出土陶磁器は明治時代後半と考えられる。

遺構の機能時期 遺物の年代から、SK2・5・17土坑は弥生時代、SK9土坑は江戸時代、SD13溝跡は明治時代後半に位置づけられる可能性がある。これ以外の遺構については遺物が出土していないため機能時期を明らかにできないが、溝跡の多くは近代以降のものである可能性が考えられる。

② 遺構の性格

機能時期がある程度推定できた遺構には弥生時代・江戸時代の土坑、近代の溝跡がある。弥生時代の土坑の性格については不明であるが、付近に集落などが存在する可能性が考えられる。江戸時代の土坑についても性格は不明であるが、古銭が出土していることから近世墓の可能性も考えられる。近代の溝跡は規格性に乏しく、等高線と直交するように掘られていることから排水性を意識したものと推定される。建物跡などの生活に関わる遺構は確認されなかったことから、耕作地に関わる区画溝などの性格が考えられる。

(2) 東部地区

① 遺物と遺構の年代

遺構と遺物の確認状況 遺構は、堅穴住居跡1軒、貯蔵穴6基、落とし穴6基、近世墓8基、土坑13基、溝跡1条、柱穴17か所を確認した。遺物は縄文土器、弥生土器、ロクロ土師器、須恵器、近世陶器、石器、煙管、ガラス製小玉、金属製品、銅鏡が少數出土した。土器・陶器類は遺構出土の一部を除けば小破片が多い。石器は剥片石器、礫石器、火打石、金属製品は鉄鍋、鉄釘、袋物留め金具、不明品がある。遺物の出土状況を見ると、縄文土器はSK22・24・25・27貯蔵穴、SK23・36落とし穴、SK26・29-31・43土坑などから出土している。弥生土器はSK32貯蔵穴、SK34・58土坑から出土している。ロクロ土師器はSI21堅穴住居跡から出土している。近世陶器・煙管・鉄鍋・ガラス製小玉・火打石・古銭などはSK28・40-42・46・49近世墓から出土している。

遺物の特徴と年代 全般的に遺物の出土量は多くないが、ややまとまりの見られる遺構出土遺物について、その特徴と年代を検討する。

＜SK29土坑＞ 縄文土器深鉢1個体がある。胎土に纈維を含み、内外面に貝殻条痕文を施す条痕文土器で

ある。波状口縁で頸部が緩い「く」の字状を呈し、底部形状は不明である。口縁部頂部の外面に粘土貼付による楕円形突起を持つ。外面に貝殻条痕文の後、外面の口縁部に半截竹管による押引文、口唇部に棒状工具による刻目文を施す。

こうした特徴を示す土器群は、山形県村山市三カノ瀬遺跡（加藤1969・1982）で確認され、関東地方の茅山下層式（赤星・岡本1957）に並行するものと考えられている（相原1990）。茅山下層式は関東地方で鶴ヶ島台式（岡本1961）に後続し、茅山上層式に先行する縄文時代早期後葉前半期の土器群であるが、東北地方南部ではこれまで断片的な様相しか把握されていない（相原前掲）。

以上のことから、SK29土坑出土土器についても現段階では上述のような断片的な様相の域を出るものではないが、関東地方の茅山下層式並行期（縄文時代早期後葉前半）に位置づけられるものと考えられる。

＜SK34・58土坑＞ 弥生土器壺1個体などがある。口縁・頸部、胴部の部分資料のため全体の器形は詳らかでないが、胴部が強張り、頸部が直立てて口縁がやや受口状となる複合口縁壺である。外面の胴部に縱走・斜行縄文、口縁部に斜行縄文を施す。

こうした特徴を示す土器群は、福島県白河市天王山遺跡（藤田 1950・1951）、泉崎村踏瀬大山遺跡（岩越ほか 1964）、いわき市朝日長者・夕日長者遺跡（いわき市教育委員会 1981）などに認められる。天王山遺跡出土土器は天王山式（坪井 1953）の標識資料として知られ、受口状の複合口縁、口縁部突起、交互刺突文、縱走縄文、下向連弧文などが特徴とされる（中村 1976）。踏瀬大山遺跡出土土器は、天王山式と同様に複合口縁を主体とするものの、突起を持つもののが少なく平口縁が主体であること、全体的に文様が簡素化され斜行縄文が多用されることなどの相違点が見出され、天王山式に後続する形式として踏瀬大山式が設定されている。朝日長者・夕日長者遺跡出土土器は、小突起が消失し、複合部下端に刺突や押圧を施すものや、地文だけのものが見られ、関東地方北東部を中心には分布する弥生時代終末期の十王台式（山内 1939）に比定されている。

SK34・58 土坑出土土器は共通した特徴が見られ、一括性のあるものと判断される。これらは平口縁を主体とし、交互刺突文・連弧文を伴わないことから天王山式土器の範疇には含まれないものである。また、複合口縁部を含めて全体に器壁が薄く、文様は地文のみが主体であるなど、十王台式土器に近い特徴が看取される。以上のことから、SK34・58 土坑出土土器は踏瀬大山式 - 十王台式期（弥生時代後期後半）に位置づけられるものと考えられる。

＜SI21 穫穴住居跡＞ ロクロ土師器坏2点、甕1点がある。ロクロ土師器は表衫ノ入式（氏家 1957）の範疇に含まれる。表衫ノ入式については主に坏類の形態と製作技法の検討から、時期が降るほど口径に占める底径の比率（底径口径比）が小さくなる傾向や、ロクロ台からの切り離し後に再調整を行なわなくなる傾向などが明らかにされている。

SI21 穫穴住居跡出土土器について見ると、坏は体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がそのまま外傾する。口径 14.6cm、底径 6.4cm、器高 4.7cm、底径口径比 0.44 である。底部の切り離しは回転糸切りで、切り離し後に外面の体下部に手持ちヘラケズリ？による再調整を施すものの 1 点、再調整を施さないもの 1 点である。いずれも内面の底部に放射状、体部に横方向のヘラミガキ調整の後、黒色処理を施す。甕は体部が内弯し、口縁部が短く外傾する。

こうした特徴を示す土器群の類例としては、多賀城市多賀城跡第 61 次調査（鴻の池地区）第 10 層出土土器（宮城県多賀城跡調査研究所 1992）がある。

鴻の池 10 層出土土器については、①ロクロ土師器坏は体部が内弯気味に立ち上がるものが主体で、口径 13-14cm 台、器高 4cm 台、底径口径比は 0.40-0.45 のものが多い。②底部の切り離しはほとんどが回転糸切りで、切り離し後の再調整は施さないものが多い。③内面底部のヘラミガキは放射状のものが多い。などの特徴が明らかにされ、その年代は 9 世紀後半四半期を中心とした頃と考えられている（田村 1995）。

以上のことから、SI21 穫穴住居跡出土土器については出土点数が少ないため明確な位置づけは難しいものの、年代的には 9 世紀後葉頃（平安時代前葉後半）と考えておきたい。

＜SK41・42・46・49 近世墓＞ 銅銭、煙管、毛抜き、和銖、吊耳鉄鋲、火打石などがある。各遺構の出土遺物の組成は次のとおりである（数字は点数）。

SK41	銅銭 8（古寛永 1 + 新寛永 2）、煙管 1、毛抜き 1、火打石 1、不明鉄製品 1、ガラス製小玉 1、油片、骨片
SK42	銅銭 5（文政 1 + 新寛永 2）、木片
SK46	銅銭 6（新寛永 1）、煙管 1、和銖 1、袋物留め金具 1、火打石 2、鉄鋲、木片、骨片
SK49	煙管 1、吊耳鉄鋲 1、ガラス製小玉 2、木製板材、骨片

銅銭のうち銭文が判読できるものはすべて寛永寛年で、铸造年が 1636-1659 年とされる古寛永銭 1 点、1668 年とされる文政 1 点、1668 年以降とされる新寛永銭 4 点がある。煙管はいずれも竹製の羅宇の両端に金属製の雁首・吸口を装着する羅宇煙管で、雁首の火皿と首部の接合部分に補強帯を持ち、火皿下部の脂返しは下方へ湾曲しない形態である。こうした形態は古泉弘氏（2001）による煙管の編年では第Ⅲ段階に該当し、18 世紀前半のものとされている。古泉編年は第Ⅰ段階を除いてほぼ全国的に同一の年代の変化を辿ることが追認されており、仙台市沼尚遺跡（仙台市教育委員会 2010）でも、第Ⅲ・Ⅳ段階の煙管と 18 世紀の陶磁器の共伴が確認されている。鉄鋲は腰部から口縁部まで直線的に外傾し、吊耳 2 か所を持つ。底部に逆円錐状の脚部 2 か所が残存する。栗原市下藤沢Ⅱ遺跡 24 号墓塚（瀬峰町教育委員会 1988）、岩手県安代町閔沢口遺跡 DIV-204 墓塚（岩手県埋蔵文化財センター 1986）などに類例が見られる。

遺構の機能時期 遺物の年代などから、SK29 土坑は縄文時代早期後葉前半、SK34・58 土坑は弥生時代後期後半、SI21 穫穴住居跡は 9 世紀後葉（平安時代前葉後半）。近世墓群は 18 世紀頃（江戸時代中期）に位置づけられる。これ以外の遺構については遺物の出土がないかごく少量のため機能時期を推定する根拠に乏しいが、落とし穴群は縄文時代、貯蔵穴群は縄文・弥生時代に概ね帰属するものと考えられる。

②遺構の性格

機能時期の推定できた遺構には縄文時代早期後葉前半・弥生時代後期後半の土坑、9世紀後葉の竪穴住居跡、18世紀頃の近世墓群のほか、縄文時代の落とし穴群、縄文・弥生時代の貯蔵穴群がある。

落とし穴群と貯蔵穴群はいずれも丘陵の尾根筋上に分布するが、遺構の性格から考えて複数の機能時期が想定される。このうち弥生土器片が出土しているSK32 貯蔵穴と、弥生時代後期後半のSK34・58 土坑は調査区内の丘陵先端側にまとまって分布する。貯蔵穴群に伴う住居跡などの居住施設は確認されなかったが、調査区外の丘陵部に縄文・弥生時代の集落跡が展開している可能性が考えられる。

9世紀後葉の竪穴住居跡は丘陵西斜面上部に単独で存在する。少量ながら遺構外でも若干のロクロ土師器が出土していることから、調査区外の丘陵部に小規模な集落跡が展開している可能性も考えられる。

近世墓群は丘陵尾根上に6基が線状にまとまりを持ち、東斜面に2基が離れて分布する。東斜面の一

部は後世の削平によって地形が改変されており、さらにいくつかの墓が設けられていた可能性がある。近世墓群は近隣の六角遺跡（本章第3節）、前戸内遺跡（藏王町教育委員会2013）でも確認されており、円田盆地周辺では主に丘陵上に墓域が設けられたことが窺える（本章第3節に詳述）。

なお、SK49 近世墓では鉄製吊鎖が出土し、鍋被り葬の事例と考えられる。鍋被り葬は中世末から近世の東北・関東・信州地域に散見される特異な葬制である。鍋被り葬による被葬者は特定の階層や職業、性別、年齢との結びつきはなく、特殊な病気や事件・事故による異常な死を迎えた者に対する葬送儀礼と考えられている（閑根2003）。鍋被り葬墓は東北中・北部では通常の墓域内に設けられる事例が多いに対し、東北南部・関東地方では単独墓や特殊墓域など通常の墓と異なる扱いがなされる傾向が指摘されている（閑根前掲）。SK49 近世墓について見ると、近世墓が集中する丘陵尾根部から離れた湿地際に単独で設けられており、通常の墓と異なる扱いがなされた可能性がある。

（3）まとめ

- ・西部地区では弥生時代・江戸時代の土坑、近代の溝跡が確認された。遺構の分布状況は散漫であり、今回の調査地点では各時期を通じてまとまった集落が営まれることはなかったものと考えられる。近代の溝跡については耕作地に関わる区画溝などの性格が推定される。
- ・東部地区では縄文時代早期後葉前半・弥生時代後期後半の土坑、9世紀後葉（平安時代前葉後半）の竪穴住居跡、18世紀頃（江戸時代中期）の近世墓群のほか、縄文時代の落とし穴群、縄文・弥生時代の貯蔵穴群が確認された。
- ・縄文時代早期後葉前半の土坑からは関東地方の茅山下層式に並行すると考えられる条痕土器が出土した。当該期の土器群は東北地方南部ではこれまで断片的な様相しか把握されておらず、単独出土に近い本資料もその域を出るものではないが、宮城県では管見の限り初出の資料であり、土器群の分布を考える上で重要と考えられる。
- ・弥生時代後期後半の土坑からは複合口縁壺などが出土し、踏瀬大山・十王台式に並行する土器群と考えられる。円田盆地周辺では踏瀬大山式に並行する土器群が大橋遺跡（宮城県教育委員会1980）、六角遺跡（藏王町教育委員会2008）などで、古墳時代前期塙釜式最古段階とされる土器群が大橋遺跡

で出土している。これらとあわせて、本資料は弥生時代終末・古墳時代初頭の土器変遷や文化変容を考える上で重要と考えられる。

- ・縄文時代のある時期には、舌状丘陵の尾根筋上に落とし穴群が設けられ、狩猟場として機能したと考えられる。
- ・縄文・弥生時代のある時期には、舌状丘陵の尾根筋上に貯蔵穴群が設けられ、堅果類など食料の貯蔵庫として機能したと考えられる。これに伴う住居跡などの居住施設は確認されなかったが、調査区外の丘陵部に集落跡が展開している可能性がある。
- ・9世紀後葉（平安時代前葉後半）の竪穴住居跡は丘陵斜面上部に単独で確認された。調査区外の丘陵部に集落跡が展開している可能性も考えられるが、当該期の集落立地を考える上で重要と考えられる。
- ・18世紀頃（江戸時代中期）の近世墓群は舌状丘陵の尾根筋上に設けられていた。近世墓群は近隣の前戸内遺跡、六角遺跡でも確認されており、近世村落における墓域のあり方を考える上で重要である。また、尾根筋上の墓群と離れて湿地際に単独で設けられた墓は、いわゆる鍋被り葬墓と考えられた。鍋被り葬墓は東北・関東・信州地域における特異な葬制として散見されるが、町内では初出の事例である。当地域における近世の葬送儀礼を考える上で興味深い事例と考えられる。



1. 伊豆盆地北端部航空写真（磯ヶ坂遺跡周辺・2002年撮影）



2. 伊豆盆地北部 航空写真（1956年米軍撮影）



3. 磯ヶ坂遺跡 西部地区 近景（南西から）



4. 磯ヶ坂遺跡 東部地区 近景（南西から）

写真図版 2



1. 西 1 区 遺構確認状況 (西から)



2. 西 1 区 遺構確認状況 (東から)



3. 西 1 区 遺構確認状況 (南東から)



4. 西 2 区 遺構確認状況 (北西から)



5. 西 2 区 遺構確認状況 (南東から)



6. 西 3 区 遺構確認作業風景 (北西から)



7. SD15 溝跡 挖削作業風景 (北西から)



8. 西 3 区 遺構確認状況 (北から)



9. 西 3 区 遺構確認状況 (南西から)



10. SK2 土坑遺物出土状況 (北西から)



11. SK2 土坑 断面 (北西から)



12. SK5 土坑発掘状況 (北東から)



13. SK5 土坑 断面 (北西から)



写真図版 4



1. 東 3 区 近景 (北東から)

2. 東 3 区 遺構確認状況 (東から)



3. 東 3 区 遺構確認状況 (北から)

4. 東 3 区 遺構確認状況 (南西から)



5. 東 3 区 遺構確認状況 (北西から)



6. SI21 穫穴住居跡 (南西から)



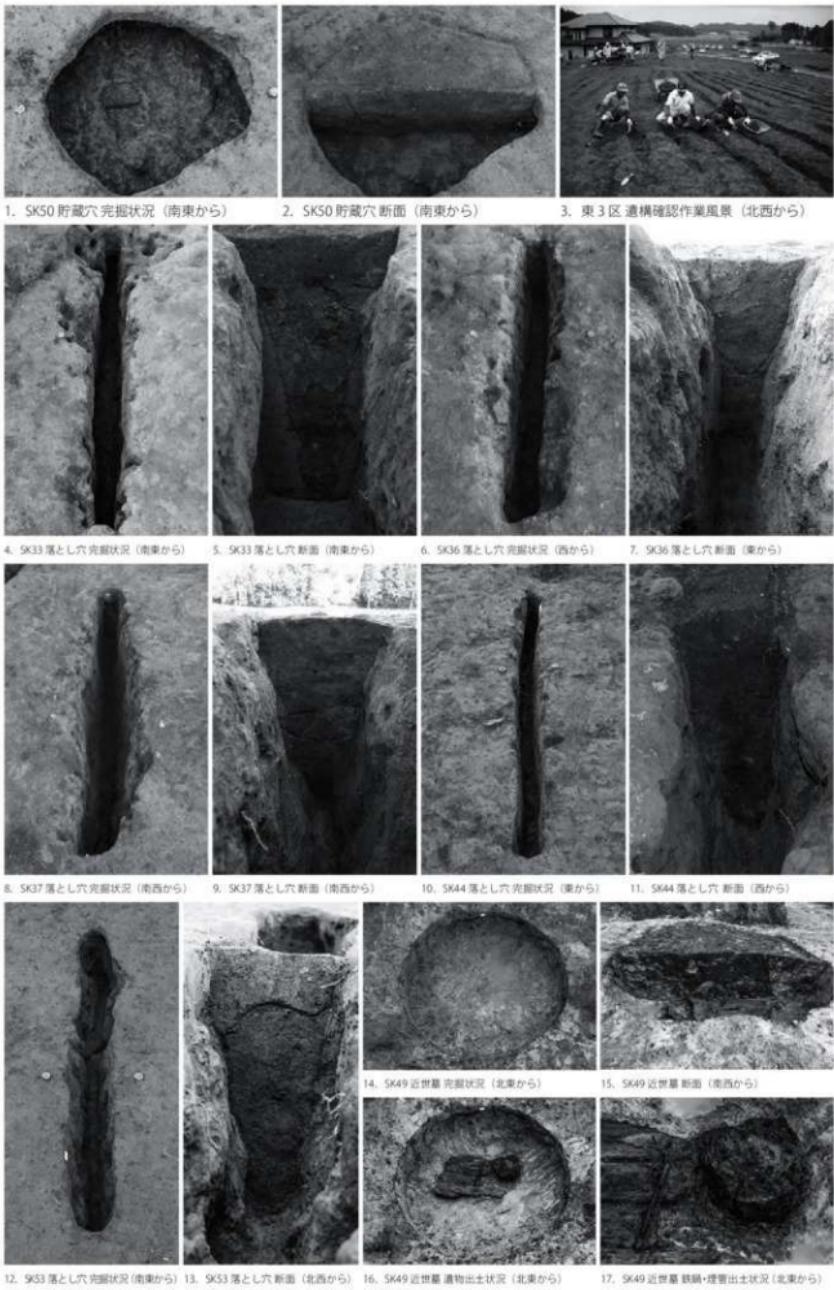
7. SI21 穫穴住居跡 K1 土坑 完掘状況 (南西から)



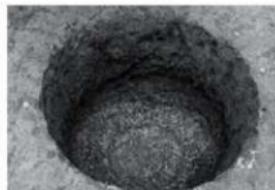
9. SK32 貯藏穴 完掘状況 (南東から)



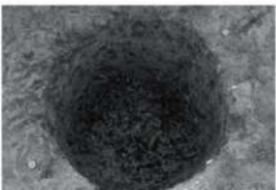
10. SK32 貯藏穴 断面 (南東から)



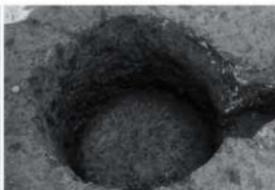
写真図版 6



1. SK28 近世墓 完掘状況（北東から）



3. SK39 近世墓 完掘状況（東から）



5. SK40 近世墓 完掘状況（南東から）



2. SK28 近世墓 断面（北東から）



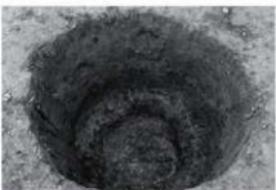
4. SK39 近世墓 断面（北東から）



6. SK40 近世墓 断面（東から）



7. SK41 近世墓 完掘状況（南東から）



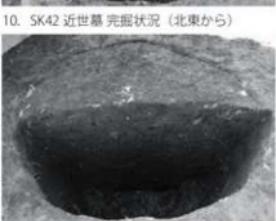
10. SK42 近世墓 完掘状況（北東から）



13. SK45 近世墓 完掘状況（東から）



8. SK41 近世墓 断面（南東から）



11. SK42 近世墓 断面（北東から）



14. SK45 近世墓 断面（東から）



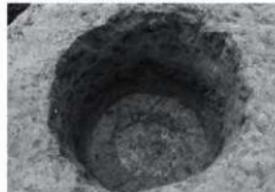
9. 西3区 遺構確認作業風景（北から）



12. SK42 近世墓 遺物出土状況（北東から）



15. SK25 貯藏穴 遺構掘削作業風景（南西から）



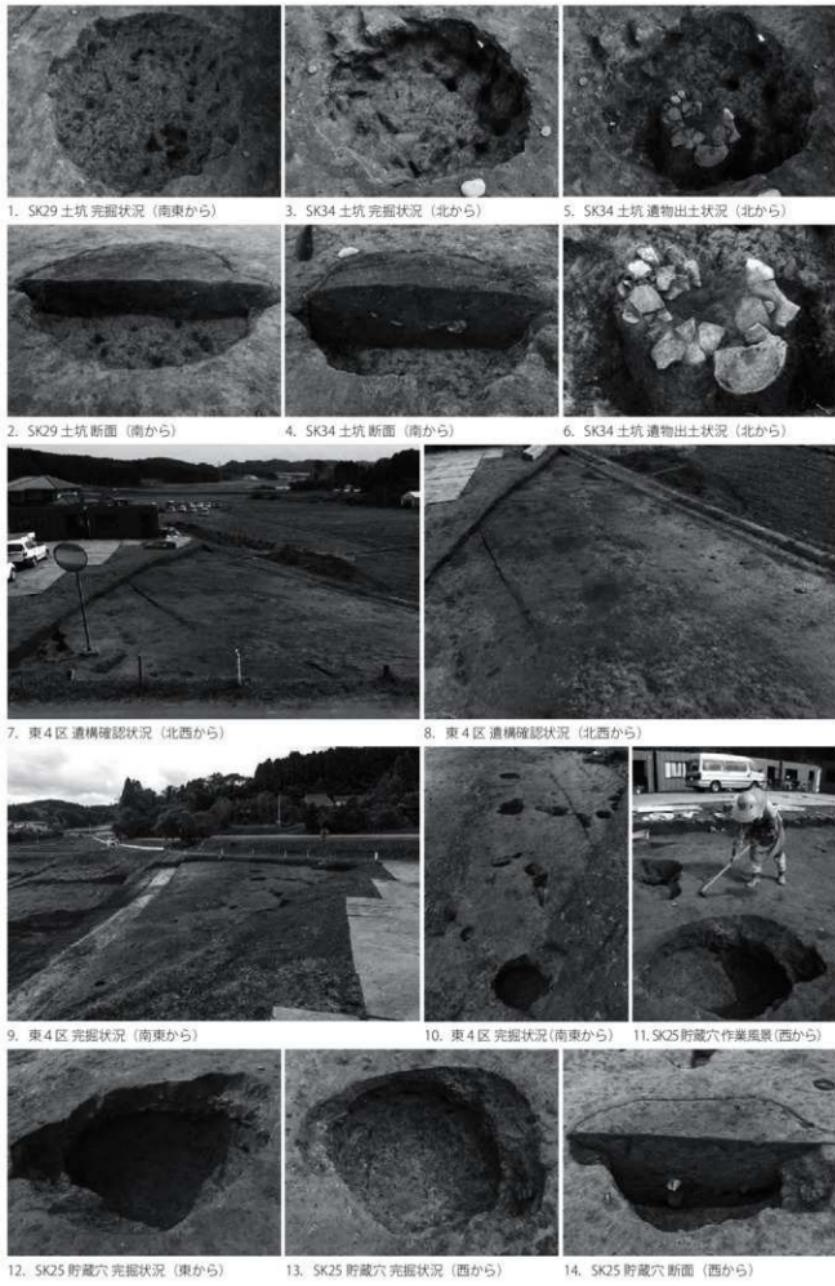
16. SK46 近世墓 完掘状況（北東から）



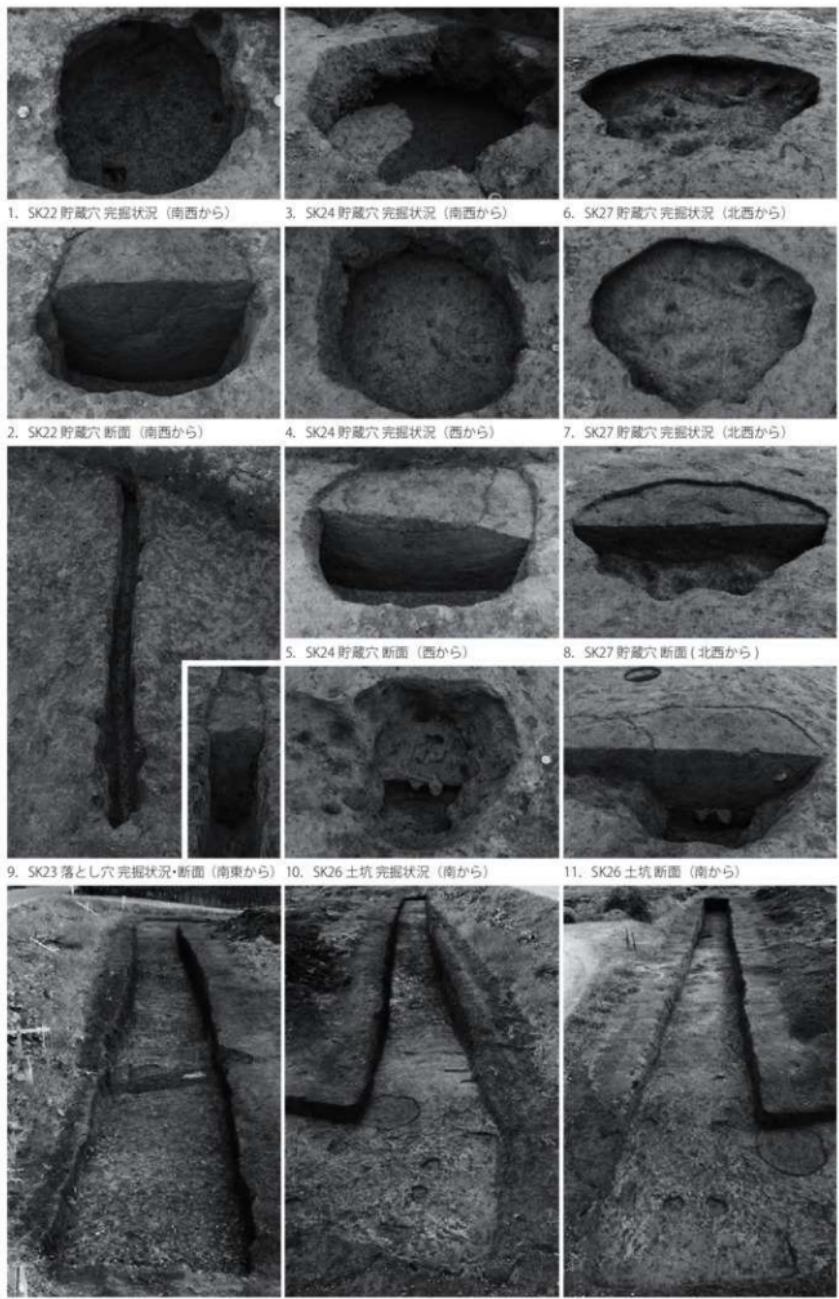
17. SK46 近世墓 断面（南東から）



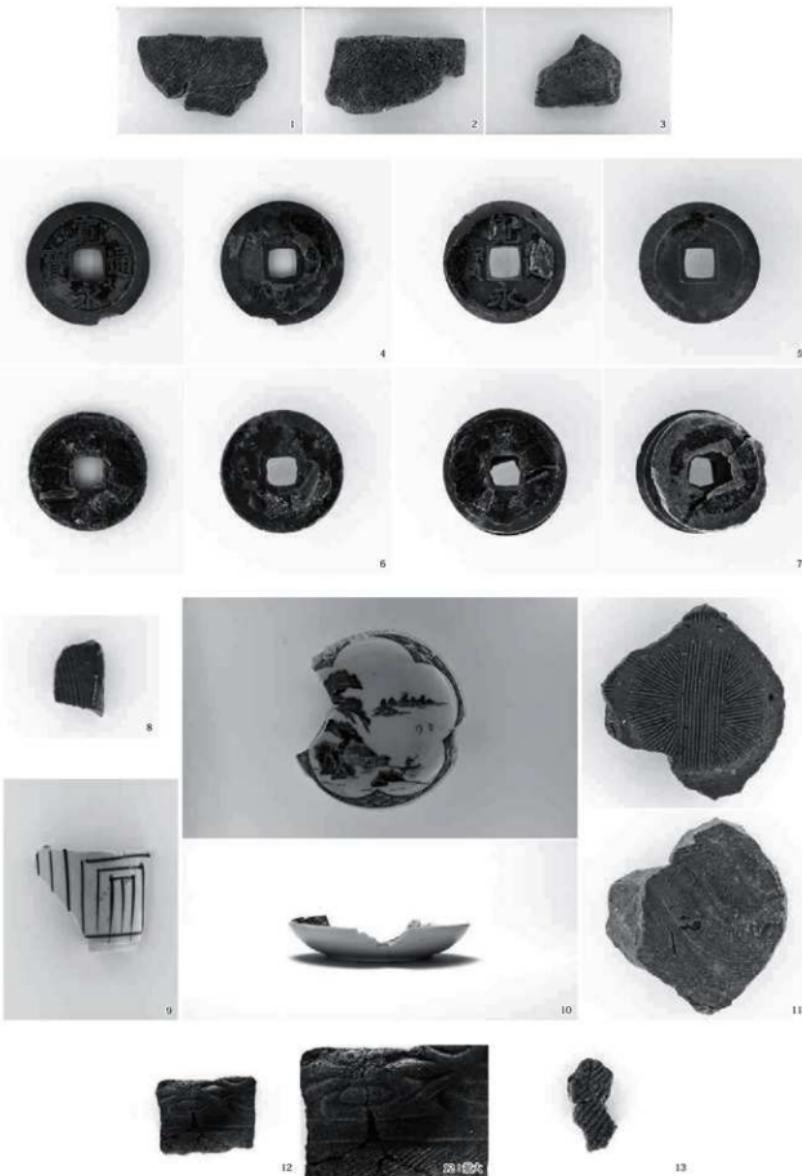
18. SK46 近世墓 遺物出土状況（北東から）



写真図版 8

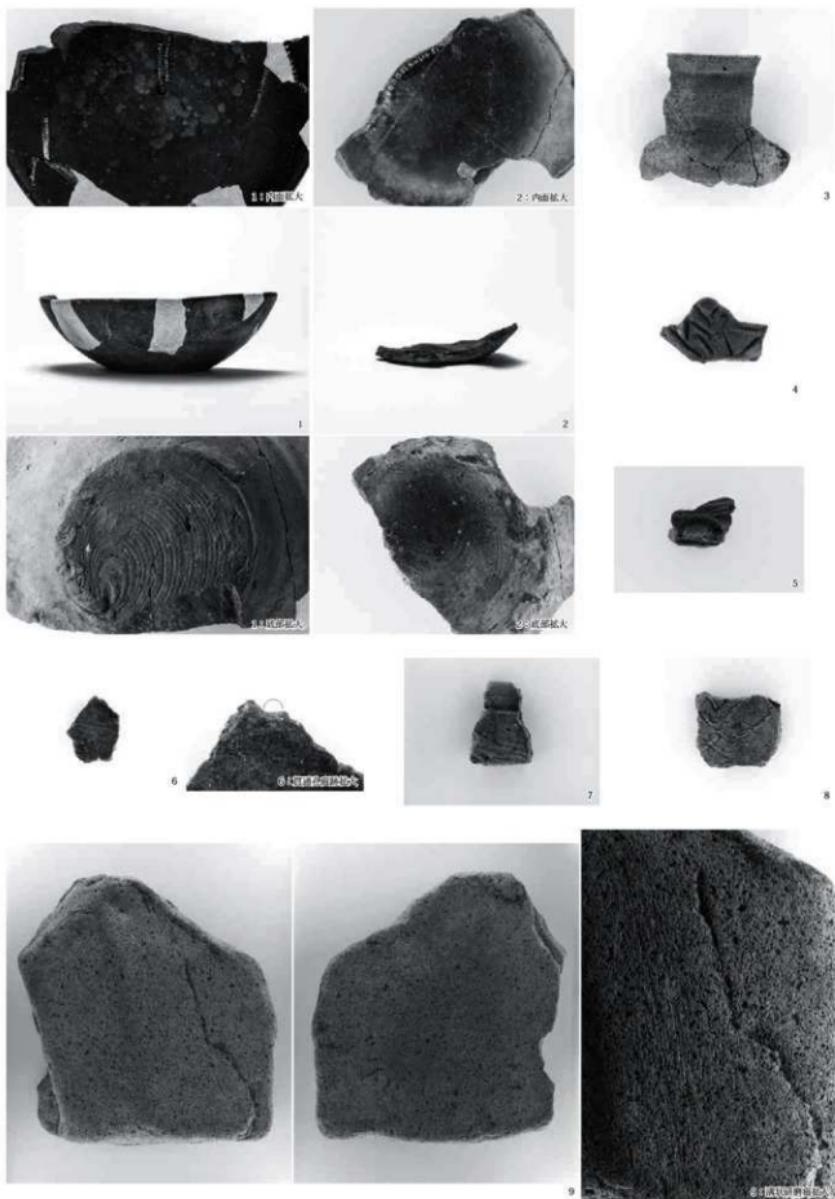




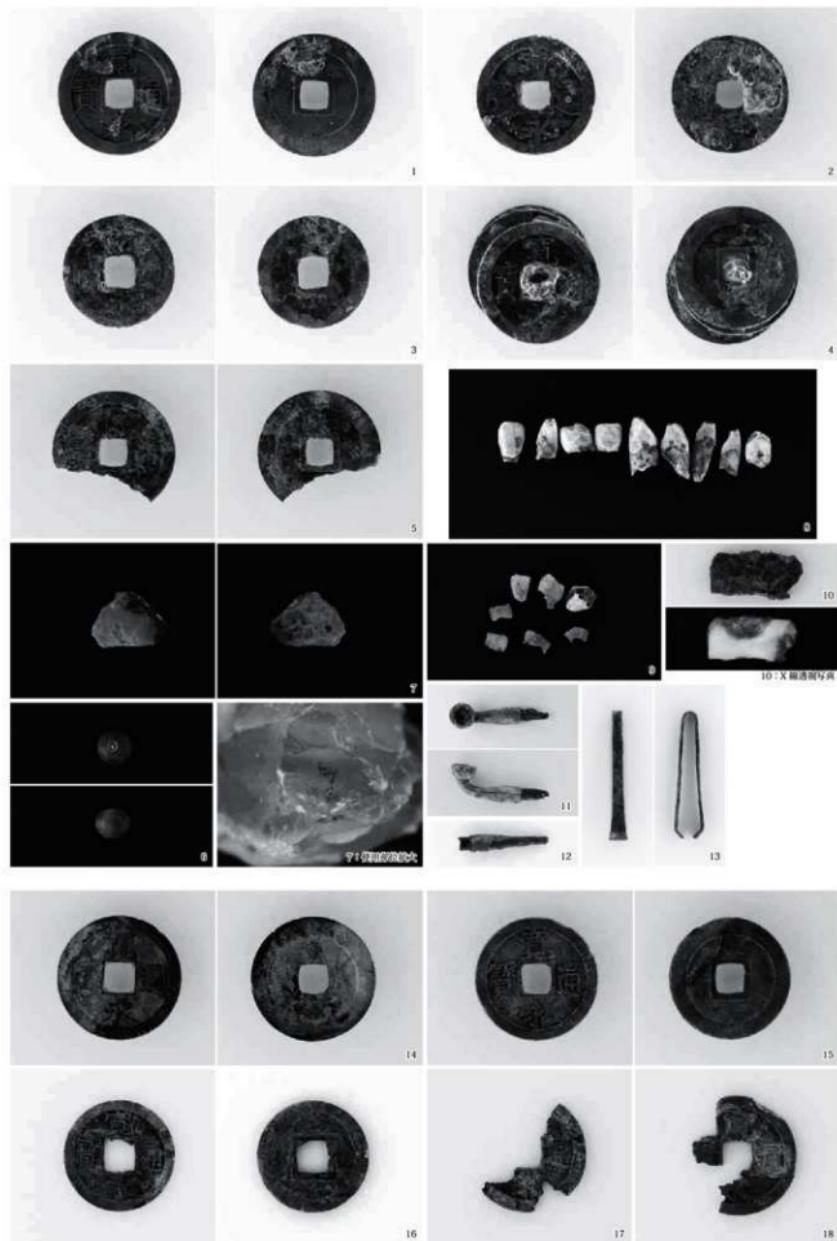


(1~3・8~13: 5号1/3, 4~7: 5号1/1)

SK2・9 土坑、SD1・13 溝跡、遺構外出土遺物
(1~3: SK2・第12回, 4~5: SK9・第12回, 6~7: SK9, 8: SD1・第12回, 9~11: SD13・第12回, 12~13: 遺構外・第12回)

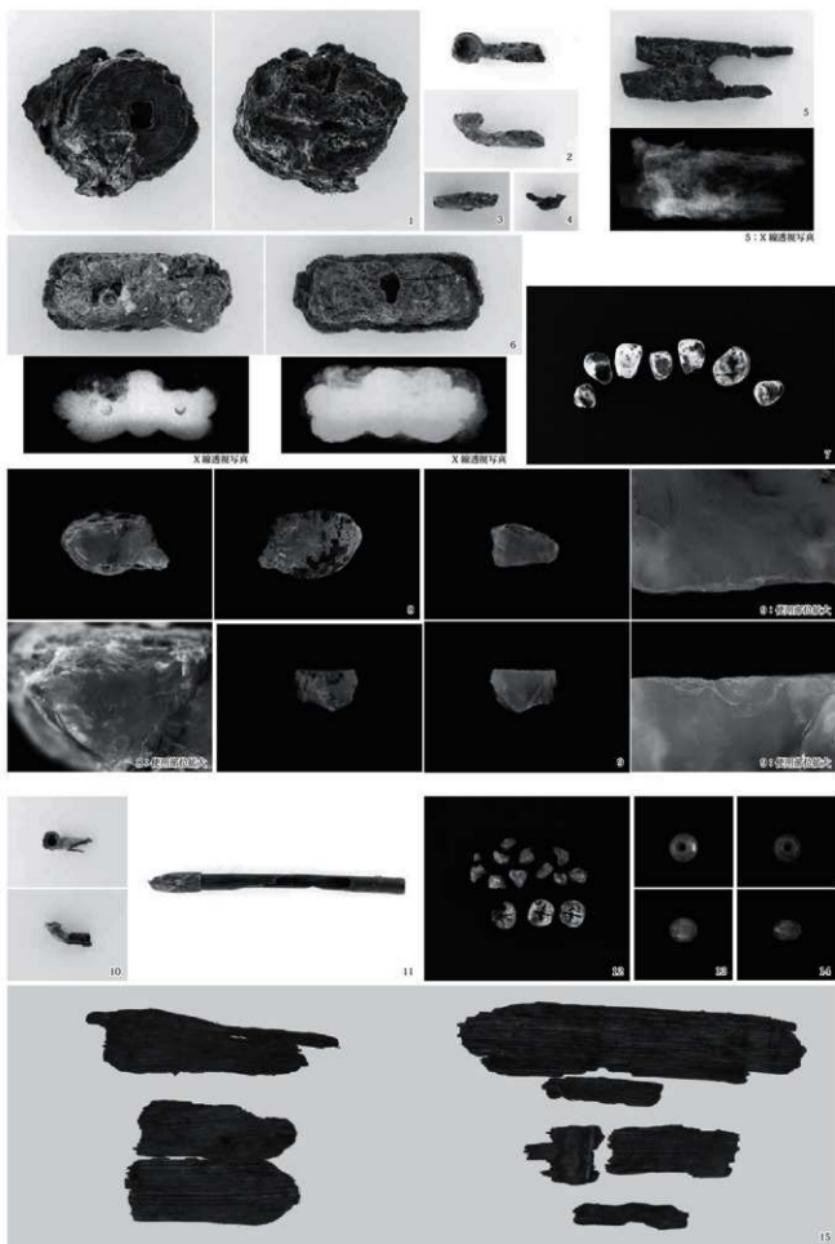


(1～8: 5号1/3、9: 5号1/4)
SI21 穫穴住居跡、SK22・24・27・32貯藏穴、SK36 落とし穴、SK28 近世墓出土遺物
(1～3: SI21・第16回、4: SK22・第18回、5: SK24・第18回、6: SK27・第18回、7: SK36・第18回、8: SK28・第23回、9: SK32・第18回)



(1～5・6・8・9・14～18: S 1/1, 7: S 2/3, 10～13: S 1/3)
SK41・42 近世墓出土遺物

(1～3・10～13: SK41・第22回, 4・5・8・9: SK41, 6・7: SK41・第23回, 14～16: SK42・第22回, 17・18: SK42)



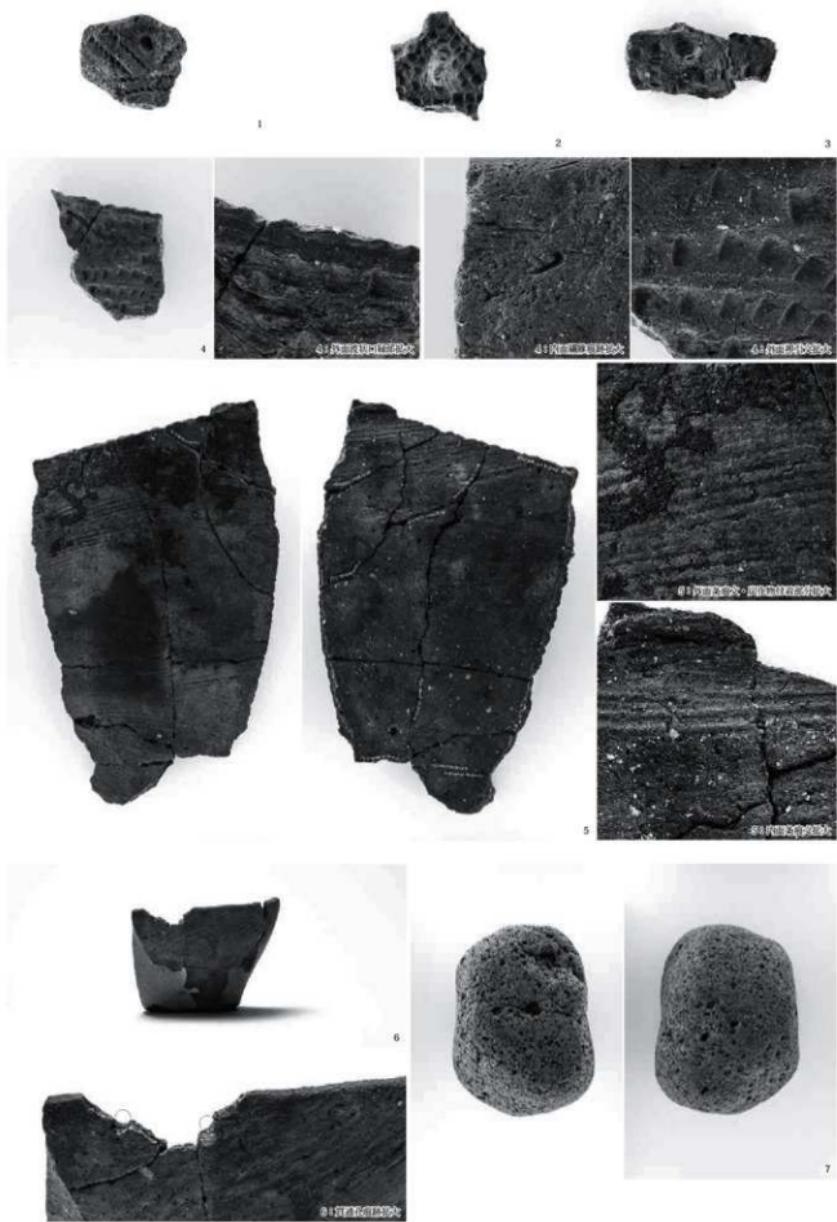
(1・6・7・12～14：S与1/1、5：S与1/2、2～4・10・11・15：S与1/3、8・9：S与2/3)
SK46・49 近世墓出土遺物

(1・3・4・7：SK46、2・5・6：SK46・第22回、8・9：SK46・第23回、10・12・15：SK49、11・13・14・16：SK49・第22・23回)



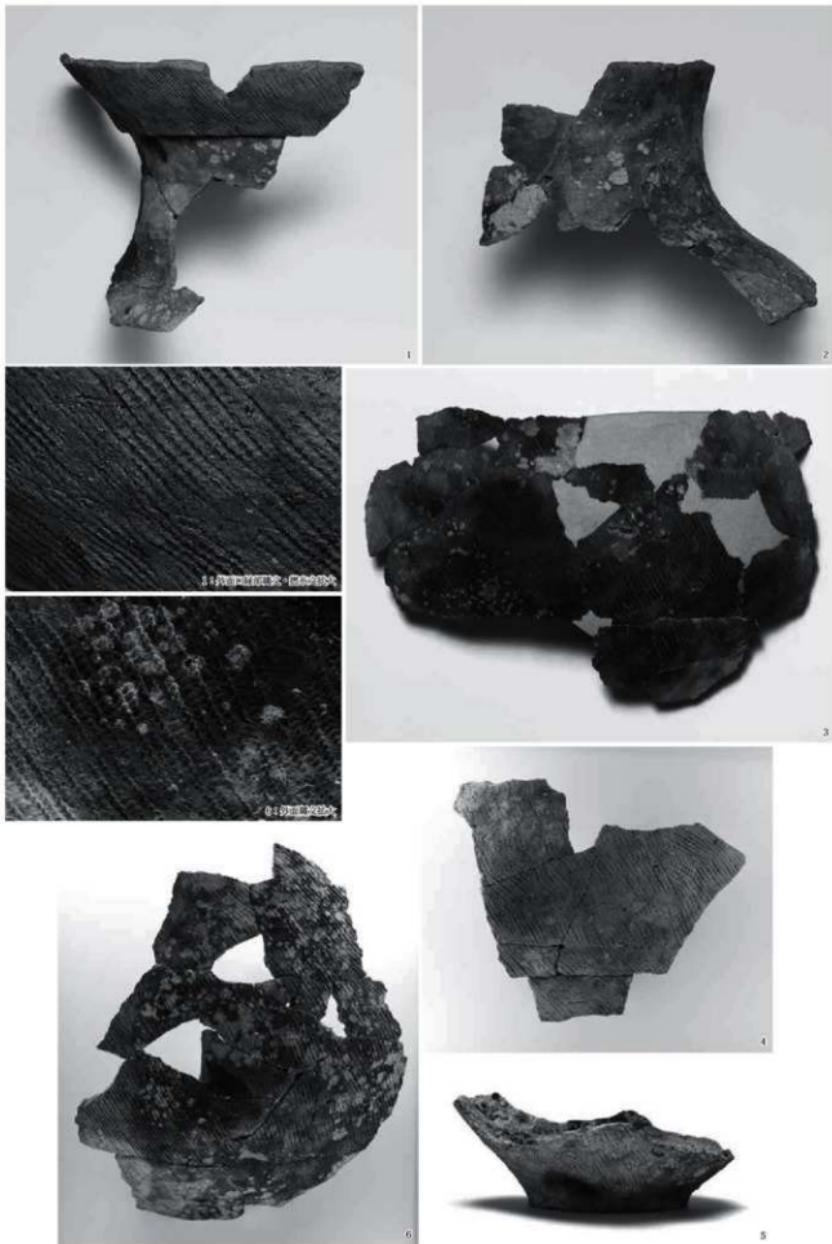
SK49 近世墓出土遺物
(第22回)

(S 1/3)

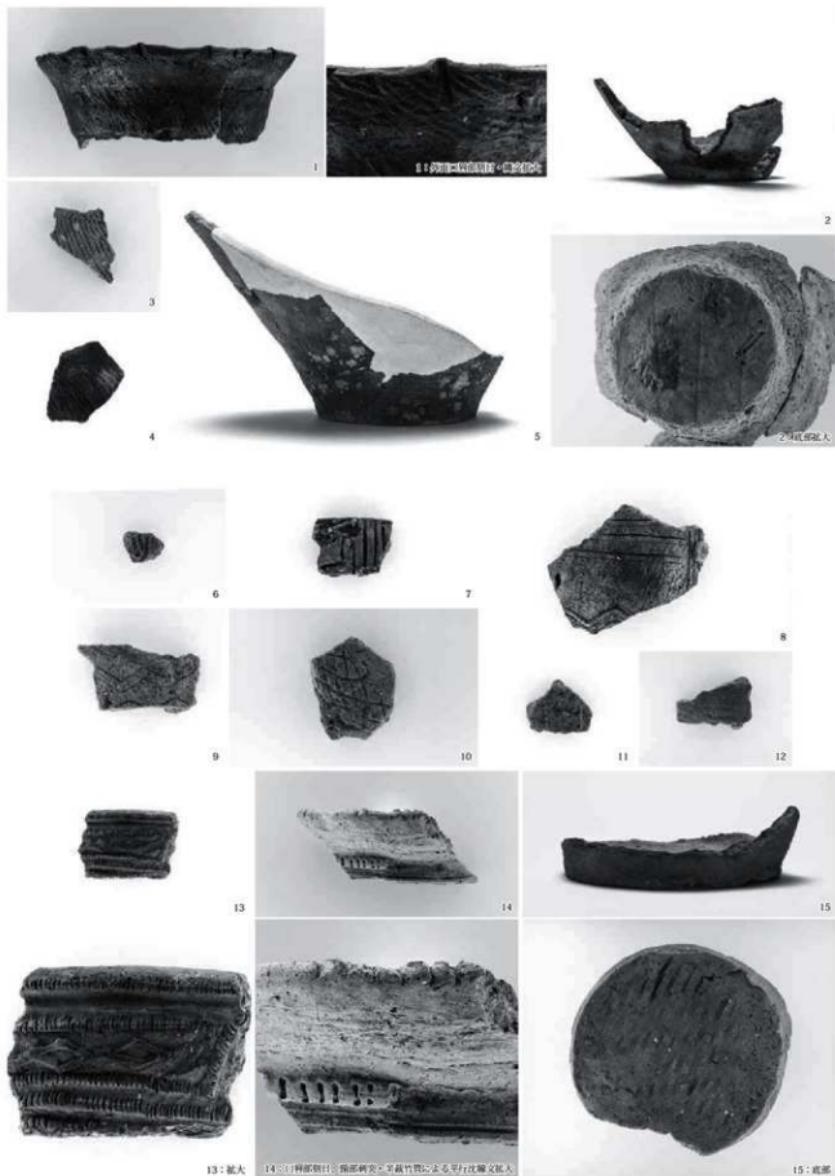


SK26・29・34 土坑出土遺物
(1:SK26・第26回、2～5:第SK29・第26回、6・7:SK34・第28回)

(S 与 1/3)



SK34・58 土坑出土遺物
(第27回)



(S 与 1/3)

SK58 土坑、遺構外出土遺物

(1~5: SK58・第29回, 6~15: 遺構外・第30回)



(1~3:5 約 1/1、4:5 約 2/3、5・6:5 約 1/3)

遺構外出土遺物

(第 31 図)

35図7)、住居掘方埋土から砥石(第35図11)、遺構確認面からロクロ土師器壺(第35図1)、砥石(第35図10)が出土した。

このほか、カマド内堆積土・崩落土、P1柱穴堆積土、住居掘方埋土、遺構確認面から土師器壺、ロクロ土師器壺・甕、須恵器壺・甕の小破片が出土した。

〔SI1004 壁穴住居跡〕(第36図、写真図版4-6・9・10)
〔位置〕3区／平坦面

〔重複〕SI1004 → SA1006

〔規模・形状〕長辺 6.70m、短辺 5.70m 以上／方形

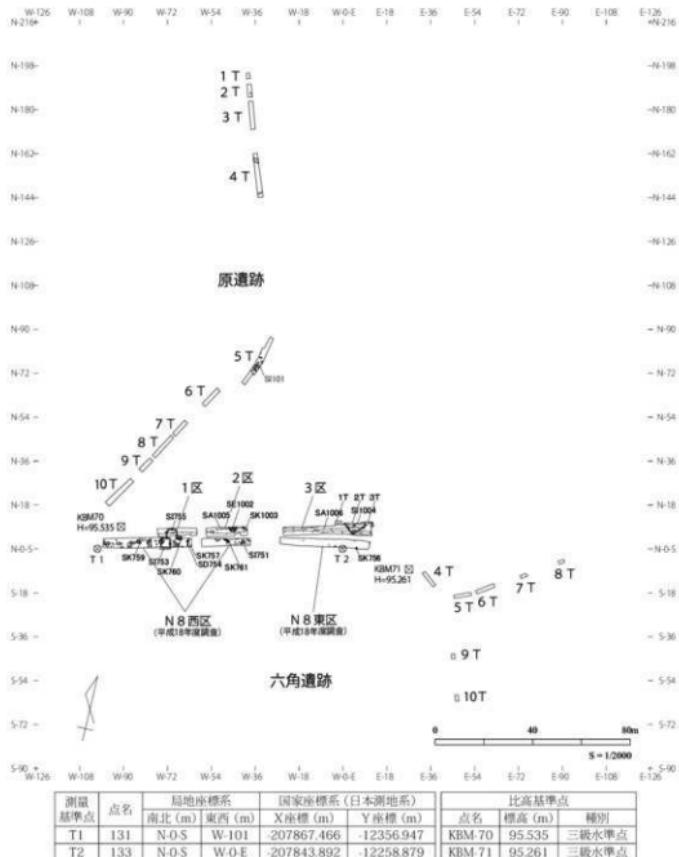
〔方向〕南辺：N-45°-E

〔壁面〕地山を壁として床面から垂直に立ち上がる。残存壁高は最大9cmである。

〔床面・堆積土〕貼床または住居掘方理土を床とする。貼床は黄褐色ローム・焼土ブロック・炭化物粒を多量に含む黒褐色粘質シルトで構築され、硬化面を形成する。

〔主柱穴〕住居平面形の対角線上とみられる位置で3か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸 60-115cm、短軸 50-75cm の橢円形で、深さ 75-80cm である。1か所で柱材の抜き取り痕跡、2か所で平面形が直径 22-25cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔周溝・壁柱穴〕住居外周に沿って上幅 15-30cm、底



第32図 六角遺跡・原遺跡調査区配置図

幅5~23cm、床面からの深さ20cmで横断面形がU字形を呈する周溝と、壁柱穴30か所を確認した。周溝の堆積土は黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む暗褐色シルトで人為的理土と考えられ、周溝の埋め戻し後に壁柱穴が掘られている。壁柱穴の掘方理土は周溝埋土と類似する。1か所で柱材の抜き取り痕跡、14か所で平面形が10~18cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。壁材痕跡は確認されなかった。

〔カマド・炉跡〕不明

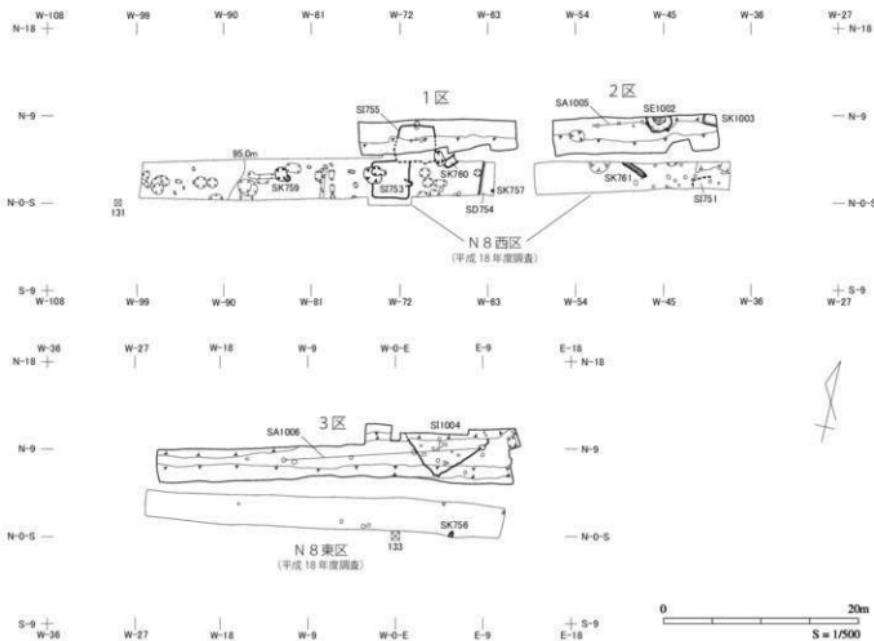
〔貯蔵穴〕住居南隅で土坑1基(K1)を確認した。平面形が長軸115cm、短軸80cmの不整角丸方形で、断面形は深さ60cmの箱形を呈する。堆積土は7層に細分され、黄褐色ロームブロック・粒、焼土ブロックなどを含む黒色・黒褐色シルトである。1~6層は住居廃絶後の自然堆積土、7層は貯蔵穴機能時の堆積土と考えられる。

〔その他の施設〕住居南隅で柱穴1か所(P8)、南西辺中央やや南寄りで溝1条(D1)を確認した。P8は

掘方の平面形が長軸30cm、短軸15cmの楕円形で、深さ10cmである。柱材の抜き取り痕跡を確認した。D1は上幅15cm、底幅10cm、横断面形が深さ8cmの楕円形を呈する溝で、長さ30cmを確認した。住居南西辺の周溝と接続しており、堆積土は黄褐色ロームブロック・粒を少量含む暗褐色シルトで、人為的理土と考えられる。

〔遺物〕住居床面直上で土師器高环(第37図5)・壺(第38図3)、砥石(第38図11)、K1貯蔵穴堆積土から土師器环(第37図1・2)・器台(第37図3)・高环(第37図6)・壺(第37図4、第38図1・2)・壺(第38図4)、繩文土器(第38図10)、P2柱穴堆積土から繩文土器(第38図5)、住居内堆積土から繩文土器(第38図6~9)が出土した。

このほか、住居床面直上、K1貯蔵穴堆積土、住居内堆積土、住居掘方埋土、遺構確認面、P2・6・8・10・16柱穴堆積土から土師器鉢・高环・壺・壺、繩文土器の小破片、珪質頁岩製剣片、磁石が出土した。



第33図 1~3区遺構配置図

② 柱列跡

【SA1005 柱列跡】(第39図、写真図版3)

〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西2間（4.95m）

〔方向〕E-17°-N

〔柱穴〕3か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸35-57cm、短軸28-50cmの略円形・隅丸方形で、深さ26-30cmである。すべての柱穴で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西から（260）-（235）cm

〔遺物〕なし

【SA1006 柱列跡】(第39図、写真図版4)

〔位置〕3区／平坦面

〔重複〕SI1004 → SA1006

〔規模・形状〕東西3間（20.15m）

〔方向〕E-17.0°-N

〔柱穴〕4か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸30-57cm、短軸15-24cmの楕円形・隅丸方形で、深さ16-51cmである。すべての柱穴で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西から（675）-（640）-（700）cm

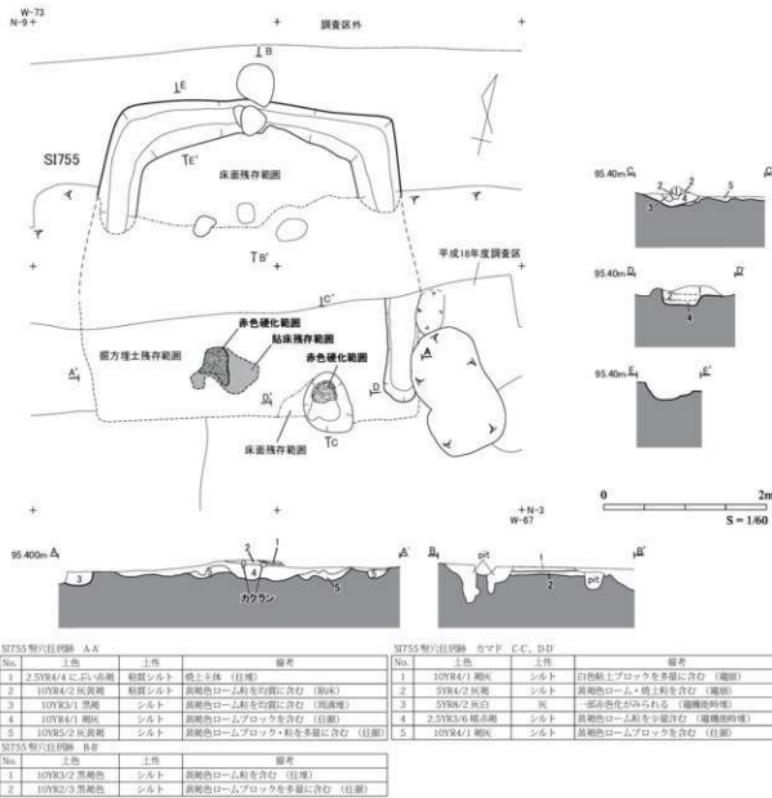
〔遺物〕なし

③ 井戸跡

【SE1002 井戸跡】(第40図、写真図版6・11・12)

〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕なし



第34図 SI755 穂穴住居跡

〔規模・形状〕平面形が長軸 244cm、短軸 154cm 以上の略円形で、断面形は深さ 272cm の漏斗形を呈し、底面は平坦である。掘方と井戸側、井戸側の抜き取り痕跡、水溜め部を確認した。掘方の平面形は直径 135cm の略円形を呈し、壁面は下半が抉れてオーバーハングしている。井戸側は平面形が一辺 60cm 程度の方形を呈し、高さ 80cm が残存する。南東・南西隅に角材が設置され、間に割材が立ち並んだ状態で残存することから、方形縦板組で隅柱を持つ構造と考えられるが、側板材を押さえる横桟材とみられるものは残存

していない。井戸側の接地面より下部の掘方は平面形が一辺 65cm の方形、断面形が深さ 15cm の逆台形を呈し、水溜め部として機能したと考えられる。

井戸側の隅柱に用いられている角材は、一边 12-14cm、長さ 66-72cm で、芯持材 1 点、芯去材 1 点である。芯持材のものは側面の一部に顕著な面取りの痕跡が観察されるが、下端には伐採時のものとみられる円錐形の切削痕を残す。芯去材のものは側面に削肌を残し、下端部側は比較的平坦な切削面が見られる。側板材は幅 11-19cm、厚さ 4-9cm、長さ

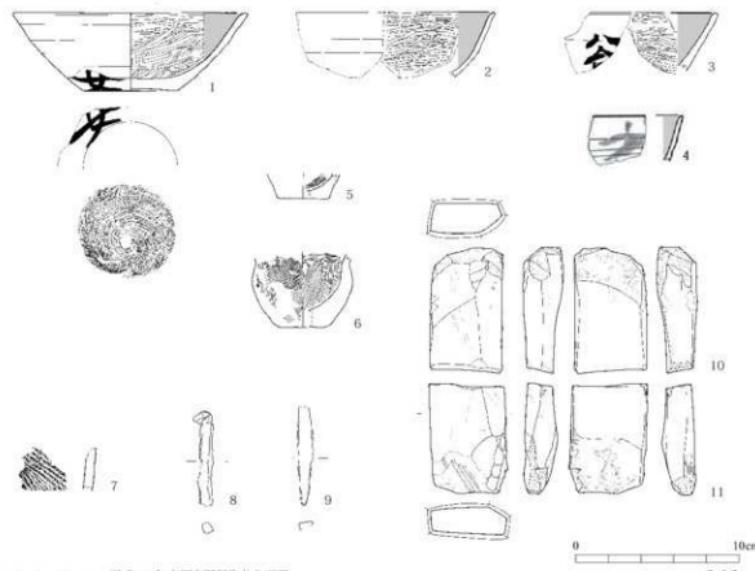
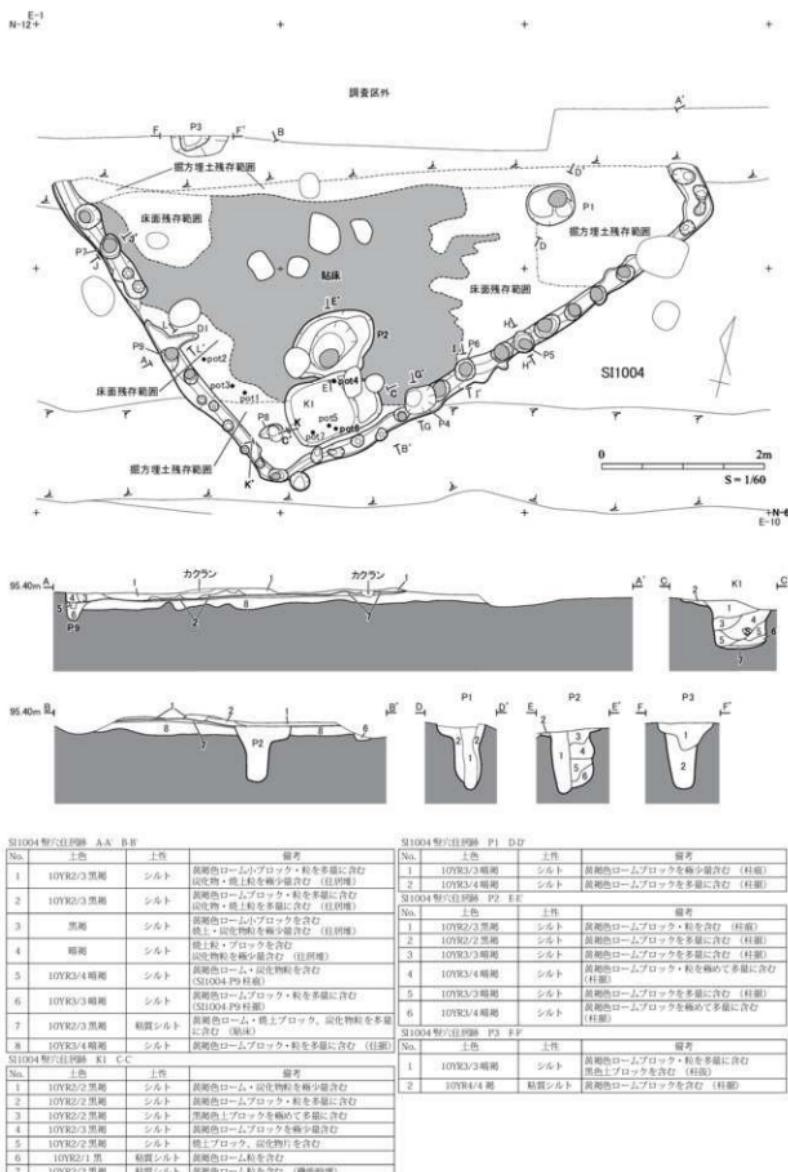


図 4・8・9・10・11：平成 18 年度調査既報告分を再掲

No.	遺構名	層位	種類	断面	断面調査・特徴	法量 (cm ³)			現存	登録	写真
						上辺	中辺	底辺			
1	S1755	壁遺構	ロクロ上層部	环	外面：ロクロナギ。内面：(K) 回転式切り→ナギ 内面：(K) 鉛鉄板ヘラミガキ→(K) 残り方柱→ハサミ+手一色色斑 面外下部：墨書き「女」	(14.4)	5.8	(4.9)	3/5	9	11-1
2	S1755	西浦埋構上	ロクロ上層部	环	外面：ロクロナギ	-	-	-	(4.0)	11-2	11-2
3	S1755	西浦埋構上	ロクロ上層部	环	外面：ロクロナギ 内面：ハサミ+手一色色斑	-	-	-	(3.6)	11-3	11-3
4	S1755	西浦埋構上	ロクロ上層部	环	外面：ロクロナギ。ハサミ+手一色色斑 内面：墨書き「女」	-	-	-	(3.2)	11-4	11-4
5	S1755	堆積土	ミニチュア	小形	内外面：ナギ	-	-	-	(3.2)	(1.6)	11-6
6	S1755	西浦埋構上	ミニチュア	環	外面：(K) ナギ→(K) ハサミ→(K) ロコナギ 内面：(K) ナギ→(K) ロコナギ	(2.9)	(4.6)	6.5	12	11-7	
7	S1755	堆積土	縫跡	外面：墨書き (L)	内面：ナギ 厚さ：(0.6) cm	-	-	-	-	26	11-5
No.	遺構名	層位	種類	材質	特徴	法量 (mm ³)			現存	登録	写真
8	S1755	断面直上	釘	鉄	頭部幅 11.0mm 斜削断面1/4強 斜削下斜削欠損	(5.8)	(0.8)	0.7	6.5	1-1	061134 11-8
9	S1755	断面直上	釘	鉄	頭部幅1/4強 斜削欠損	(6.1)	(0.9)	0.5	5.2	2-2	061135 11-9
No.	遺構名	層位	種類	材質	製作手法・特徴	法量 (mm ³)			現存	登録	写真
10	S1755	壁遺構	磚石	粘土質灰岩	板状 磁石数：6 下端側面所蔵 061618 上端側面	7.7	4.5	2.4	119.0	1/2	06150 11-10
11	S1755	柱倒壊部	磚石	粘土質灰岩	板状 磁石数：5 上端側面所蔵 061610 上端側面	6.8	4.7	2.0	90.0	1/2	06148 11-11

第 35 図 S1755 積穴付居跡出土遺物



第36図 SI1004 穴穴住居跡 (1)

SI1004 縦穴住居跡 P4. G.G.

No.	上色	土性	参考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む 黑色土・ブロックを極少量含む(柱壙)
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを含む(柱壙)

SI1004 縦穴住居跡 P5. H.H.

No.	上色	土性	参考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロック・以化物鉱を極少量含む (柱壙)
2	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む(柱壙)

SI1004 縦穴住居跡 PG. II

No.	上色	土性	参考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む 以化物鉱を極少量含む(柱壙)
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを含む 以化物鉱を極少量含む(柱壙)

SI1004 縦穴住居跡 PT. JJ.

No.	上色	土性	参考
1	10YR2/3 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・小ブロック・鉄鉱を含む 黑色土・ブロックを含む(柱壙)
2	10YR2/3 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・小ブロック・鉄鉱を含む 黑色土・ブロックを含む(柱壙)

SI1004 縦穴住居跡 PB. KK.

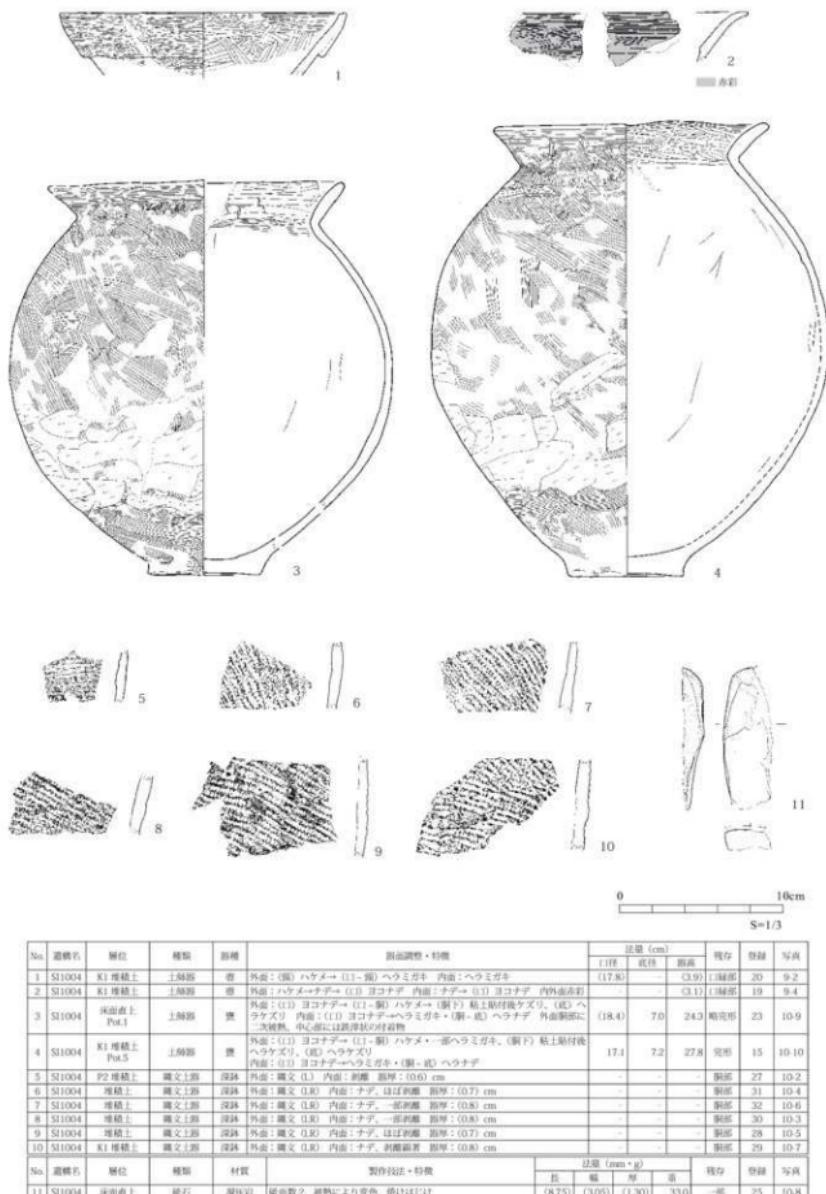
No.	上色	土性	参考
1	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロック・鉄鉱を含む(柱壙)
2	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを含む(柱壙)

SI1004 縦穴住居跡 DI. LL.

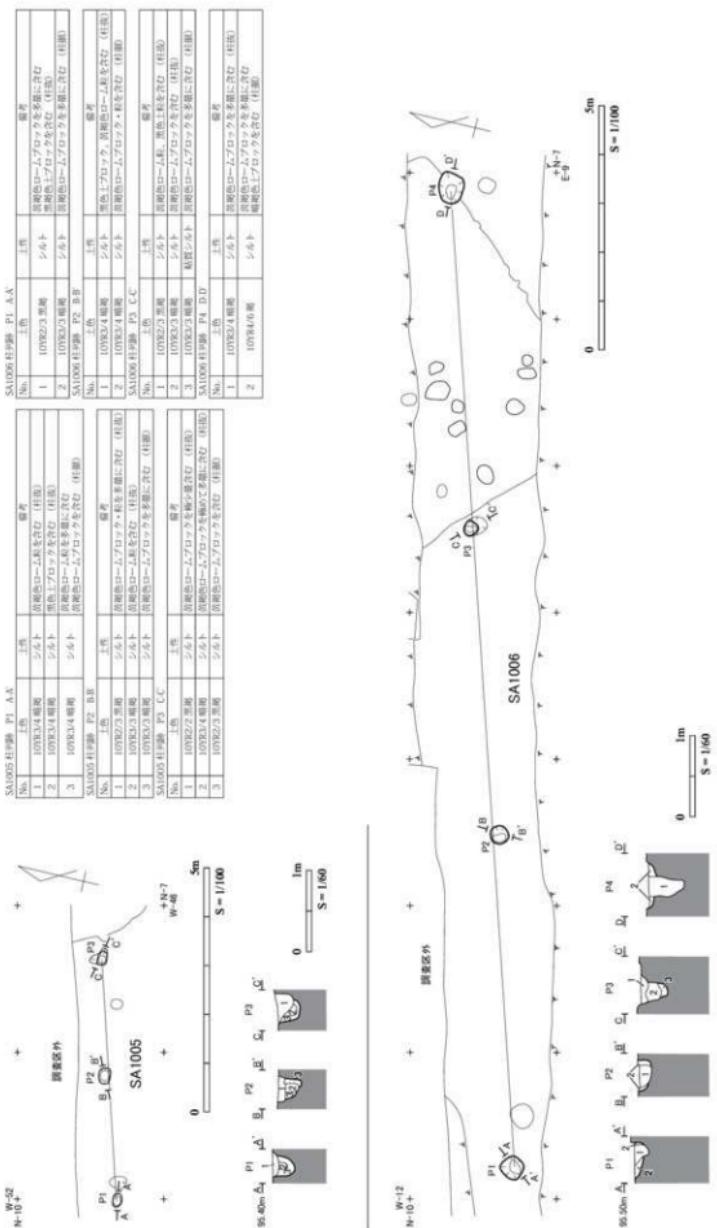
No.	上色	土性	参考
1	10YR2/3 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロック・鉄鉱を含む(柱壙)

1 2 3 4 5 6

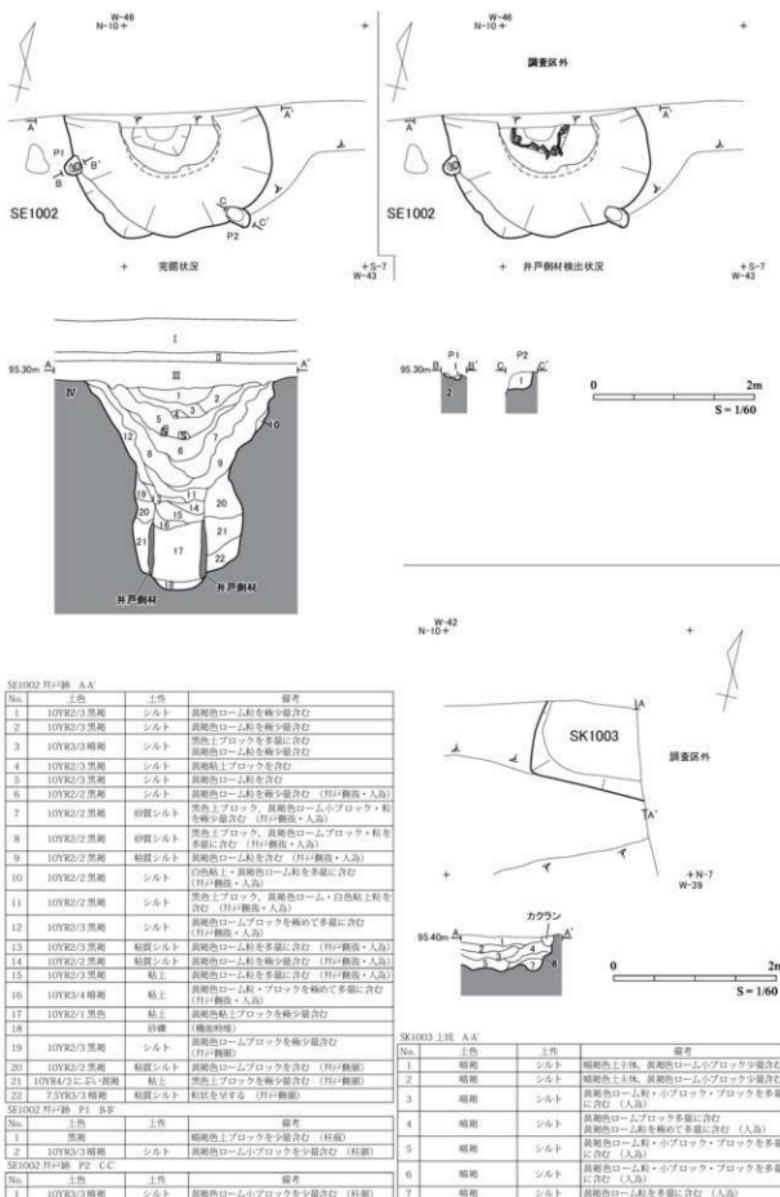
第37図 SI1004 縦穴住居跡（2）出土遺物（1）



第38図 SI1004 窑穴住跡出土遺物（2）



第39図 SA1005・1006柱列跡



第40図 SE1002井戸跡、SK1003土坑

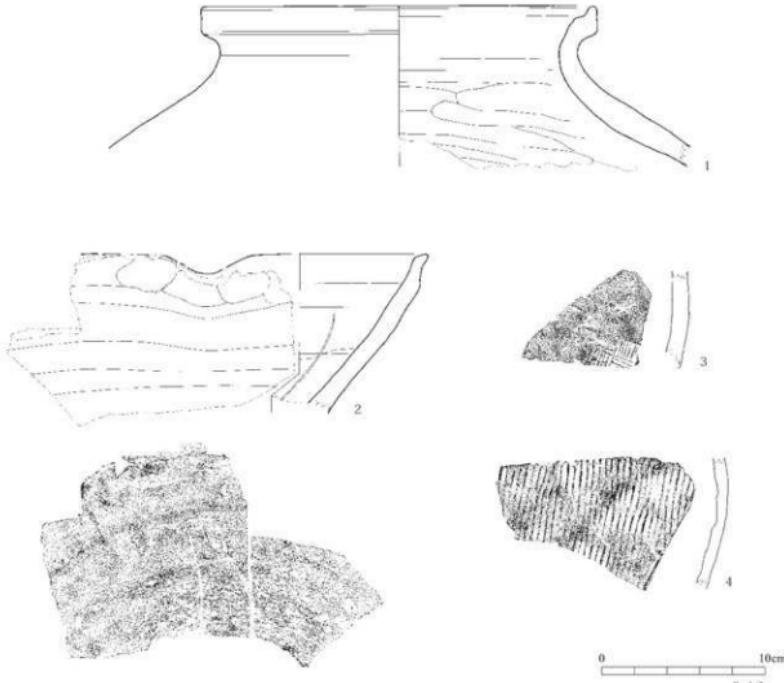
57~79cmで、いずれも芯去材である。横断面形は半月形を呈し、側面に削痕を残す。下端の木口形状は様々で、直線的な切痕の痕跡は見られない。このほか、幅4~11cm、厚さ2~6cm、長さ57~66cmの杭状の割材が出土した。

〔その他の施設〕柱穴2か所(P1・2)を確認した。井戸側抜き取り穴に壊されている。掘方の平面形は直径21~32cmの略円形で、深さ8~21cmである。1か所で平面形が直径8cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔堆積土〕22層に細分される。1~5層は黄褐色ローム粒、黄褐色粘土・黒色土ブロックを含む黒褐色・暗褐色シルト、6~16層は黄褐色ロームブロック・粒、

黒色土ブロックなどを含む黒褐色シルト・粘質シルト・砂質シルト・粘土、暗褐色粘土、17層は黄褐色粘土ブロックをごく少量含む黒色粘土、18層は砂礫、19~22層は黄褐色ローム・粘土ブロック、黒色土ブロックを含む黒褐色シルト・粘質シルト、暗褐色粘質シルト、にぶい黄褐色粘土である。1~5層は自然堆積土、6~16層は井戸側抜き取り後の人为的埋土、17層は井戸廃絶後の自然堆積土、18層は井戸機能時の堆積土、19~22層は井戸側掘方埋土と考えられる。

このことから、本遺構では井戸の使用が中止されて井戸側内部の下半が自然埋没(17層が堆積)した後、上部を朝顔形に掘り広げて井戸側の上半を抜き取った



第41図 SE1002 井戸跡出土遺物（1）

No.	遺構名	層位	種類	断面	調査・特徴	法面 (cm)		現存	壁厚	写真
						上段	下段			
1	SE1002	堆積土	中空陶器	便	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ、ナデ 径：(18.1)cm、(19.8)cm、内面底部に自然縫 合	24.4	-	(9.9)	1.1~ 3.0cm	1 11-12
2	SE1002	堆積土	中空陶器	片口調	外面：ロクロナデ+ナデ 内面：ロクロナデ 内面下部：柱用に上の削減	-	-	(0.8)	1.1~ 0.8cm	2 11-15
3	SE1002	堆積土	中空陶器	便	外面：圓柱形山 壁厚：(1.1)cm	-	-	0.05	3 11-13	
4	SE1002	堆積土	中空陶器	便	外面：平行タタキ柱壁厚：(0.8)cm	-	-	0.05	4 11-14	

と推定される。井戸側の抜き取り後は人為的に埋め戻され、埋め戻し土の沈下によるとみられる上部の窪地は最終的に自然埋没している。

【遺物】堆積土から中世陶器片口鉢（第41図2）、甕（第41図1・3・4）、磨石（第42図4）、石皿（第42図1-3）が出土した。このほか、堆積土から土師器環・甕、ロクロ土師器環・甕、須恵器壺・甕、縄文土器、石皿の小破片が出土した。

④ 土坑

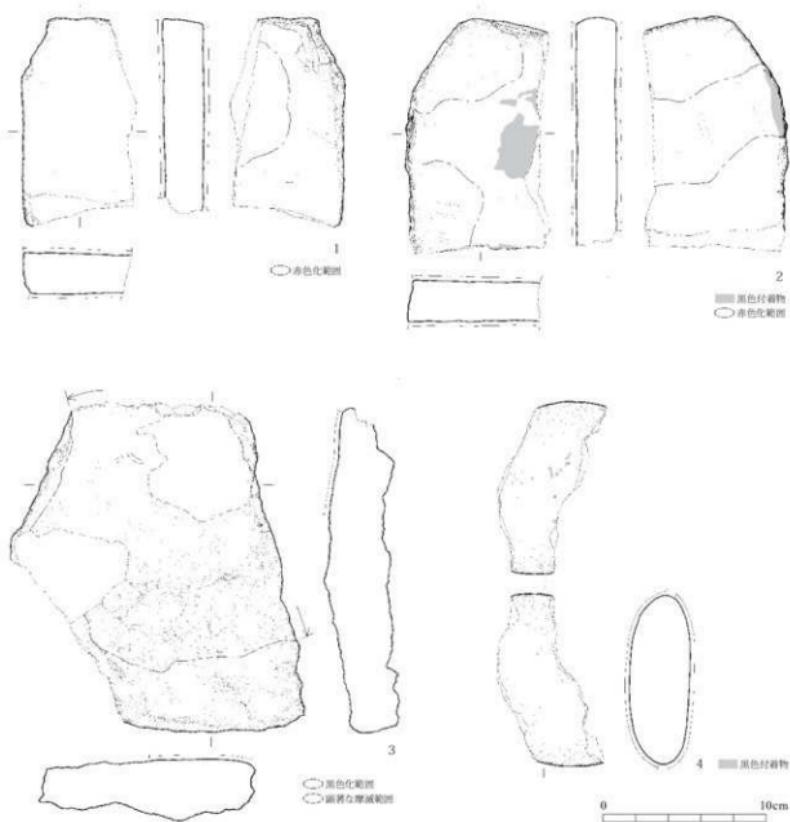
【SK1003 土坑】（第40図、写真図版6）

【位置】2区／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】平面形が長軸138cm以上、短軸108cm以上の方形で、断面形は深さ31cmの不整逆台形を呈するとみられる。底面・壁面は凹凸が著しい。

【堆積土】7層に細分される。1・2層は黄褐色ローム



第42図 SE1002 井戸跡出土遺物（2）

No.	遺物名	層位	種類	材質	製作方法・特徴	法面 (mm × g)				残存	復元	写真
						幅	高	厚	重			
1	SK1003	堆積土	石皿	ディサイト	板状、微細網目、断面により赤色化	(124.0)	(70.5)	25.0	437.0	-無	7	12.1
2	SK1002	堆積土	石皿	ディサイト	板状、微細網目、断面により赤色化、黒色付着物	(145.5)	(89.0)	26.0	641.5	-無	6	12.2
3	SK1002	堆積土	甕	安山岩	丸形容体で横円錐脚あり平行に側面彫刻、断面により黒色化	(203.5)	(18.25)	(38.5)	1835.0	-無	8	12.3
4	SK1002	堆積土	磨石	安山岩	丸形容体、黒色付着物	107.0	66.5	38.0	308.5	-無	3	12.4

ブロックを少量含む暗褐色シルト、3-7層は黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む暗褐色シルトで、1・2層は自然堆積土、3-7層は人為的理土と考えられる。

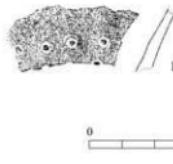
〔遺物〕堆積土から土師器、縄文土器の小破片が出土した。

⑤ 柱穴跡

2・3区で23か所確認した。ごく散漫に分布し、柱列跡あるいは建物跡として確認できたものはない。また、遺物は出土していない。

⑥ 遺構外出土遺物

1区遺構確認面から土師器壺（第43図1）、須恵器甌などの小破片、攪乱から土師器壺の小破片、磨石、流紋岩製石核が出土した。



0 10cm
S=1/3

No.	遺構名	部位	種類	断面	断面調整・寸法		法面 (cm)	既存	現存	厚さ	写真
					上端	下端					
1	1K1	遺構確認面	土師器	他	外部：ヨコナタゲ円筒柄交叉 内部：ハラナゲ	断面：(0.8) cm	113 既存	68	90	14	12.5

第43図 遺構外出土遺物

（2）原遺跡

確認した遺構は、竪穴住居跡1軒、柱穴跡3か所である。いずれも5Tに分布する（第44図）。遺物は竪穴住居跡、柱穴跡などから土師器、焼成粘土塊がごく少数出土した。出土遺物の年代と出土状況などから、確認した遺構は古墳時代前期に位置づけられる。以下、確認した遺構と遺物について詳述する。

① 竪穴住居跡

【SI101 竪穴住居跡】（第45図、写真図版8・12）

【位置】5T／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】長辺3.35m、短边1.88m以上／方形

【方向】西辺：N-6.0°-E

【壁面】地山を壁としてほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は最大7cmである。

【床面・堆積土】住居掘方理土を床とし、ほぼ平坦である。中央南側の一部に暗褐色粘質シルトの硬化面が形成されており、貼床と考えられる。床面を覆う堆積土の状況は調査時の記録に不備があり詳細を記載できないが、黄褐色ローム粒を含む黒褐色シルトなどで、住居廃絶後の自然堆積土と考えられる。

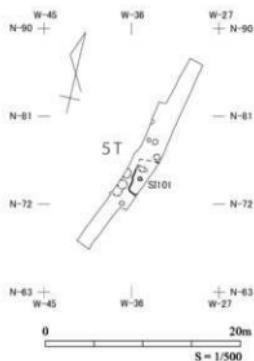
【主柱穴・周溝・壁材】なし

【炉跡】住居中央北寄りの床面に赤色硬化範囲が認められ、炉跡の一部と考えられる。

【その他の施設】住居南西隅の床面で土坑1基

（K1）、中央北寄りの炉跡下で土坑1基（K2）を確認した。K1土坑は平面形が長軸113cm、短軸68cm以上の不整椭円形で、断面形は深さ20cmの皿状を呈する。堆積土は黄褐色ローム粒を含む暗褐色シルトで、人為的理土と考えられる。K2土坑は平面形が長軸67cm、短軸62cmの不整椭円形で、断面形は深さ30cmの椀形を呈する。堆積土は黄褐色ロームブロックを含む暗褐色土で、人為的理土と考えられる。

【遺物】遺構確認面から土師器壺（第46図2）・甌の小破片、住居掘方理土から土師器壺（第46図1）・甌



第44図 5T 遺構配置図

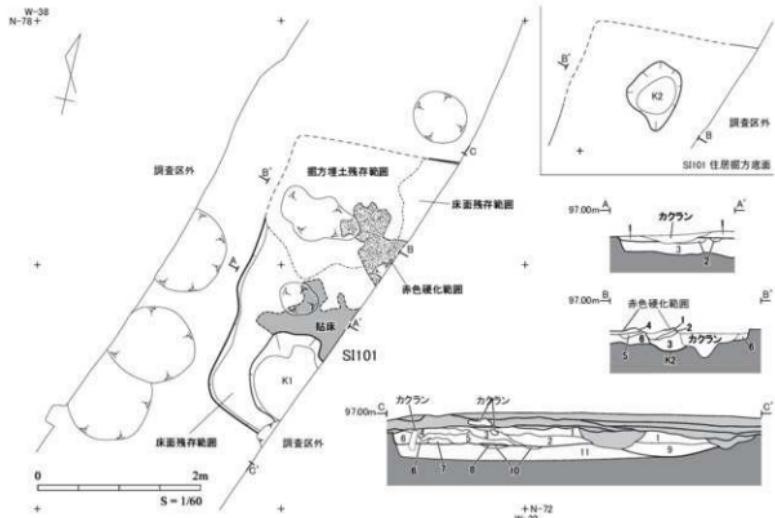
の小破片、焼成粘土塊が出土した。土師器壺（第46図1・2）は頸部～口縁部と体部上半の破片があり、胎土・焼成の状態から同一個体と考えられる。直立する頸部と外傾する口縁部の境に屈曲を持ち、口縁部内面に痕跡的な段を持つ有段口縁の壺で、口縁端部は外反する。口縁部の内外面をヨコナデ調整の後に縱方向のヘラミガキ調整、頸部内外面を横方向のヘラミガキ調整で仕上げる。体部は球形を呈するとみられ、外面に細かいハケメ調整の後、ヘラミガキ調整で仕上げる。壺は口縁部の内外面にヨコナデ調整を施す。

② 柱穴跡

堅穴住居跡の周辺で3か所確認した。遺物は土師器壺などの小破片が出土した。

③ 遺構外出土遺物

5T遺構確認面から土師器壺、表土から土師器壺・壺、9T表土から土師器、10T遺構確認面から土師器壺が出土した。いずれも小破片であるが、土師器壺は無段丸底窓で内面に黒色処理、外面の口縁部にヨコナデ、体部にヘラミガキ調整で仕上げるものがある。



第45図 SI101 堅穴住居跡

3. 考察

(1) 六角遺跡

① 遺物と遺構の年代

遺構と遺物の確認状況 遺構は、竪穴住居跡2軒、柱列跡2条、井戸跡1基、土坑1基、柱穴23か所を確認した。遺物は繩文土器、土師器、須恵器、ロクロ土師器、中世陶器、石器、礫石器、砥石が少數出土した。土器・陶器類は小破片が多いが、SI1004 竪穴住居跡では土師器の良好な一括資料が出土した。このほか、ロクロ土師器はSI755 竪穴住居跡、中世陶器・礫石器はSE1002 井戸跡から出土している。繩文土器・須恵器は遺構外などから小片が出土している。

遺物の特徴と年代 全体的に遺物の出土量は多くないが、やまとまりの見られる遺構出土遺物について、その特徴と年代を検討する。

<SI1004 竪穴住居跡> 土師器環2点、高環2点、器台1点、壺3点、甕2点がある。环は平底で半球形に近い体部を持つ。体部と口縁部の境に屈曲を持ち、口縁部は内弯気味に外傾する。外面はヘラミガキ調整またはハケメ調整で仕上げる。内面に赤彩が残存するものがある。高环は内弯する环部と「八」の字形に聞く脚部で構成される。脚上部は中実で、透孔を小さく三方向に開けるものがある。环部内外面と脚部外面はヘラミガキ調整で仕上げる。环部外面に赤彩が残存するものがある。器台は内弯する受部の破片で、内面にヘラミガキ調整、外面にヨコナデ調整の後、内外面に赤彩を施す。壺は平底で体部が球形を呈し、口縁部が長く外傾する直口壺のほか、複合口縁、単純口縁の壺の口縁部破片がある。直口壺は外面の口縁上端をヨコナデ、他はヘラミガキ調整で仕上げ、内外面に赤彩を施す。複合口縁壺は口縁部が外傾し、口縁端部がわずかに内弯する。内外面にヘラミガキ調整を施す。単純口縁壺は口縁部が外反する。内外面にヨコナデ調整の後、赤彩を施す。甕は平底で体部に丸みを持ち、口縁部が短く外反する。胴部中に最大径を持ち、球胴あるいはやや長胴気味を呈する。外面の調整は口縁部にヨコナデ調整、胴部にハケメ調整、胴部下半にヘラケズリ調整を施す。

このような特徴を持つ土器群は、塙釜式（氏家1957）の範疇に含まれるものである。東北地方南部における当該期の土器編年については辻秀人氏により細分が図られている（辻1994・1995）。塙釜式は辻編年Ⅱ～Ⅲ期に相当し、Ⅱ期では多様な「小型鉢」が存在し、「小型器台」との緩やかなセット関係を持つ

のに対して、Ⅲ期では「小型器台」の上に乗せることを前提に体部を小型で球形に近い形とする「小型丸底鉢」と「小型器台」ととのセット関係が確立するとされている。本土器群の环は辻編年における器種分類でⅢ期のメルクマールとされた「鉢G（小型丸底鉢）」に該当する。高环は「高环E・F」の中間的な形態と考えられ、「高环E」はⅡ～Ⅲ期、「高环F」はⅢ期に広く認められる。器台はⅡ～Ⅲ期を通じて存続する「器台D」に該当するとみられる。壺は「壺H・K・S」に該当し、「壺H」はⅡ期には体部がやや扁平で、Ⅲ期には球形に、「壺K」はⅡ期には体部が球形に近く、Ⅲ期の終末にはやや楕円形に変化する。甕は「甕V」に該当し、Ⅱ～Ⅲ期からⅢ期に普遍的に存在する。

以上のことから、SI1004 竪穴住居跡出土土器は塙釜式期（古墳時代前期・4世紀）に位置づけられる。また、辻編年ではⅢ期に位置づけられ、塙釜式の中でも後出の様相を持つものと考えられる。

なお、本遺跡では平成18年度の発掘調査でも当該期の集落跡を確認し、これに伴う第1群土器を塙釜式期（辻編年Ⅲ期）に位置づけており、SI1004 竪穴住居跡出土土器はこれに包括されるものである。

<SI755 竪穴住居跡> ロクロ土師器環4点がある。ロクロ土師器は表杉ノ入式（氏家1957）の範疇に含まれる。表杉ノ入式については主に环類の形態と製作技法の検討から、時期が降るほど口径に占める底径の比率（底径口径比）が小さくなる傾向や、ロクロ台からの切り離し後に再調整を行なわなくなる傾向などが明らかにされている。

SI755 竪穴住居跡出土土器のうち、环の器形を復元できるものは1点のみであるが、体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がそのまま外傾する。口径14.4cm、底径5.8cm、器高4.9cm、底径口径比0.40である。底部の切り離しは回転糸切りで、切り離し後に外底面に軽いナデ調整を施す。内面の底部に放射状、体部に横方向のヘラミガキ調整の後、黒色処理を施す。

資料数が少ないため土器群としての様相把握には限界があるものの、上述の特徴に代表させるとすれば、底径口径比が小さく底部の切り離し後に積極的な再調整を行なわないこと、赤焼土器を伴わないとから10世紀までは降らず、9世紀後葉（平安時代前葉後半）に概ね位置づけられるものと考えておきたい。

<SE1002 井戸跡> 中世陶器甕3点、片口鉢1点がある。いずれも破片資料であり全体の器形を復元できるものはないが、甕は断面し字型の受口状口縁で、幅2cm弱の狭い口縁部を持つ。胴部外面に纏状

押印を持つものがある。片口鉢は体部が直線的に外傾し、口縁部付近に緩やかな屈曲を持つ。

これらは13世紀後半の操業と考えられている白石市一本杉窯跡（宮城県教育委員会1996）や、これにやや先行する可能性のある東北窯跡群に類例が見られ、消費地では蔵王町持長地遺跡（宮城県教育委員会1980）、十郎田遺跡（蔵王町教育委員会2011d・e）、西屋敷遺跡（蔵王町教育委員会2012）など13-14世紀の屋敷跡から出土している。

以上のことから、SE1002 井戸跡出土中世陶器は13-14世紀に位置づけられるものと考えられる。

遺構の機能時期 遺物の年代などから、SI1004 穫穴住居跡は4世紀（古墳時代前期）、SI755 穫穴住居跡は9世紀後葉（平安時代前葉後半）、SE1002 井戸跡は13-14世紀（鎌倉-南北朝時代）に位置づけられる。

②遺構の性格

機能時期の推定できた遺構には4世紀・9世紀後葉の竪穴住居跡、13-14世紀の井戸跡がある。本遺跡の平成18年度調査成果も踏まえながら、今回確認した遺構の正確について述べる。

4世紀の竪穴住居跡は1軒を確認したが、平成18年度調査では今回調査地点の約150m南に6軒、約200m南東に1軒を確認しており、当該期の集落跡が広範囲に展開している可能性が考えられる。

9世紀後葉の竪穴住居跡は1軒を確認した。平成18年度調査では同時期の住居跡は確認されておらず、今回確認した住居跡は単独で営まれたか、小規模な集落を形成していた可能性が考えられる。

13-14世紀の井戸跡は1基を確認した。平成18年度調査では同時期の遺構は確認されていないが、周辺に屋敷跡などが展開している可能性が考えられる。

（2）原遺跡

①遺物と遺構の年代

遺構は、竪穴住居跡1軒、柱穴跡3か所を確認し、ごく少量の土師器、焼成粘土塊が出土した。

SI101 穫穴住居跡出土遺物には土師器壺1個体がある。直立する頸部と外傾する口縁部の壺に屈曲を持ち、口縁部内面に痕跡的な段を持つ有段口縁の壺で、口縁端部は外反する。口縁部の内外面をヨコナデ調整の後に竪方向へのヘラミガキ調整、頸部内外面を横方向へのヘラミガキ調整で仕上げる。体部は球形を呈するとみられ、外面に細かいハケメ調整の後、ヘラミガキ調整で仕上げる。

このような特徴を持つ土器は、塙釜式（氏家1957）の範疇に含まれるものである。前述の辻秀人氏による編年の器種分類では「壺C」に該当する。「壺C」は有段口縁の大型の壺で、仙台平野周辺では辻編年Ⅱ-

2期からⅢ期に確認されており、古い段階のものは体部が球形に近く、口縁部の段も明瞭に作出されるが、新しい段階には体部が楕円形に近づき、口縁部の段も痕跡的になる傾向があるとされている。SI101 穫穴住居跡出土土器は、口縁部の段が痕跡的なものとなっていることから後出的な様相と判断されよう。

以上のことから、SI101 穫穴住居跡出土土器は塙釜式期（古墳時代前期・4世紀）に位置づけられる。また、辻編年ではⅢ期に位置づけられ、塙釜式の中でも後出の様相を持つものと考えられる。

②遺構の性格

機能時期の推定できた遺構には4世紀の竪穴住居跡1軒がある。南側に隣接する六角遺跡では、前述のとおり4世紀の住居跡8軒を確認しており、同時期の集落跡が本遺跡の今回調査地点周辺まで広がっている可能性が考えられる。

（3）まとめ

- 六角遺跡では4世紀（古墳時代前期）・9世紀後葉（平安時代前葉後半）の竪穴住居跡、13-14世紀（鎌倉-南北朝時代）の井戸跡が確認された。
- 原遺跡では4世紀（古墳時代前期）の竪穴住居跡1軒が確認された。
- 4世紀（古墳時代前期）の竪穴住居跡は六角遺跡・原遺跡で各1軒が確認され、六角遺跡の平成18年度調査で確認されていた同時期の集落跡が今回調査地点周辺まで広がっていることが判明した。
- 9世紀後葉（平安時代前葉後半）の竪穴住居跡は1

軒が確認され、単独で営まれたか小規模な集落を形成していた可能性が考えられる。同様の状況は磯ヶ坂遺跡（第1節）でも確認されており、当該期の集落立地を考える上で興味深い成果である。

13-14世紀の井戸跡は1基を確認し、井戸側は方形縦板組で隅柱を持つ構造と考えられる。周辺に屋敷跡などが展開している可能性が考えられる。当該期の屋敷跡は周辺の十郎田遺跡、西屋敷遺跡でも確認されており、円田盆地北部における中世前半の村落景観を考える上で重要と考えられる。



1. 伊田盆地北部航空写真（六角遺跡・原遺跡周辺、2002年撮影）



2. 伊田盆地調査前状況 (西から) 3. 3区 調査前状況 (西から) 4. 3区・4T調査前状況 (北西から) 5. 9・10T調査前状況 (北から) 6. 5～8T調査前状況 (南西から) 7. 3区 捶肥料作業風景



8. 3区 作業風景 (北東から)

9. 2区 作業風景 (西から)



1. 1区 遺構確認状況 (西から)



2. 2区 遺構確認状況 (西から)



3. 3区 遺構確認状況 (西から)



4. 3区 遺構確認状況 (東から)



1. N8 西区 調査状況（東から・平成 18 年度調査）



2. 1T 遺構確認状況（南から）



4. 2T 遺構確認状況（東から）



3. 2 区 作業風景（西から）



6. 4T 遺構確認状況（南東から）



7. 5T 遺構確認状況（北東から）



8. 6T 遺構確認状況（南西から）



9. 7T 遺構確認状況（北東から）



10. 8T 遺構確認状況（北東から）



11. 9T 遺構確認状況（南から）



12. 10T 遺構確認状況（南から）



15. SA1005 柱列跡 P2 断面（南から）



16. SI755 作業風景（西から）



1. SA1006 柱列跡 P1 新面（北西から） 2. SA1006 柱列跡 P2 新面（西から） 3. SA1006 柱列跡 P3 断面（南西から） 4. SA1006 柱列跡 P4 断面（南から）



5. SI755 穹穴住居跡（北半部・南から）

6. SI755 住居跡炉跡 断面（北から・H18）



8. SI755 穹穴住居跡（南半部・北から・平成 18 年度調査）

7. SI755 住居跡力マド 断面（東から・H18）



11. SI1004 窓穴住居跡 P2 完掘状況（東から）

10. SI1004 穹穴住居跡 P1 断面（東から）

12. SI1004 穹穴住居跡 P2 断面（東から）

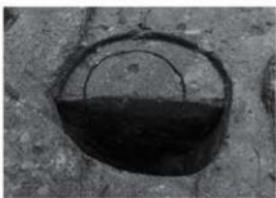
13. SI1004 穹穴住居跡 P3 断面（南から）



1. SI1004 壁穴住居跡（北東から）



2. SI1004 壁穴住居跡 P4 断面（東から）



4. SI1004 壁穴住居跡 P6 断面（東から）



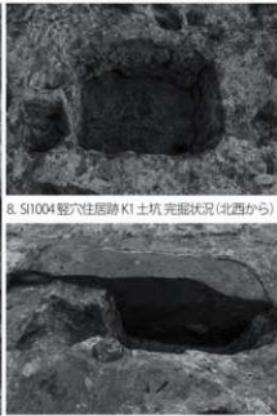
5. SI1004 壁穴住居跡 P7 断面（南東から）



6. SI1004 壁穴住居跡 P8 断面（北西から）



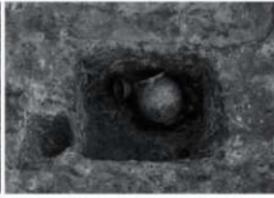
7. SI1004 壁穴住居跡 遺物出土状況（北から）



8. SI1004 壁穴住居跡 K1 土坑 完掘状況（北西から）



10. SI1004 壁穴住居跡 遺物出土状況（西から）



11. SI1004 壁穴住居跡 K1 遺物出土状況（北西から）



12. SI1004 壁穴住居跡 K1 遺物出土状況（西から）



1. SI1004 穫穴住居跡 K1 遺物出土状況（西から）



2. SI1004 穫穴住居跡 D1 断面（西から）



3. SI1004 穫穴住居跡周溝 断面（南東から）



4. SI1004 穫穴住居跡 作業風景



5. SE1002 井戸跡 P2 断面（南から）



6. SE1002 井戸跡 作業風景（西から）



7. SE1002 井戸跡 完掘状況（北から）



8. SE1002 井戸跡 断面（南から）



9. SE1002 井戸跡 完掘状況（北から）



10. SE1002 井戸跡 側材検出状況（南から）



11. SK1003 土坑 完掘状況（東から）



12. SK1003 土坑 断面（西から）



13. 原遺跡 1T 作業風景（南から）



1. 1～4T 調査前状況（北から）

2. 1～4T 調査前状況（北西から）

3. 5～10T 調査前状況（北東から）



4. 1T 遺構確認状況（南から）

5. 2T 遺構確認状況（南から）

6. 3T 遺構確認状況（南から）

7. 4T 遺構確認状況（南から）



8. 5T 遺構確認状況（北から）

9. 5T 遺構確認状況（南から）

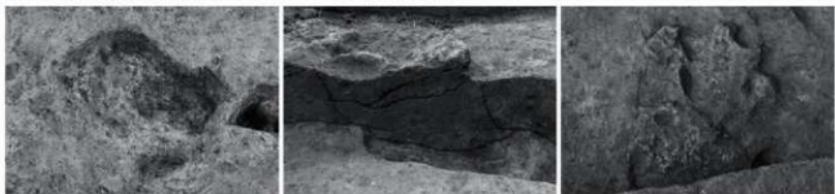


1. 6T 遺構確認状況（北東から） 2. 7T 遺構確認状況（南西から） 3. 8T 遺構確認状況（北東から） 4. 9T 遺構確認状況（南西から）



5. 10T 遺構確認状況（南西から）

6. SI101 窪穴住居跡（東から）



7. SI101 窪穴住居跡 K2 土坑完掘状況（東から） 8. SI101 窄穴住居跡 K2 土坑断面（北から） 9. SI101 窪穴住居跡 炉跡（東から）



10. P101 断面（北西から）

11. P102 断面（北西から）

12. P103 断面（東から）

13. 1T 作業風景（南から）



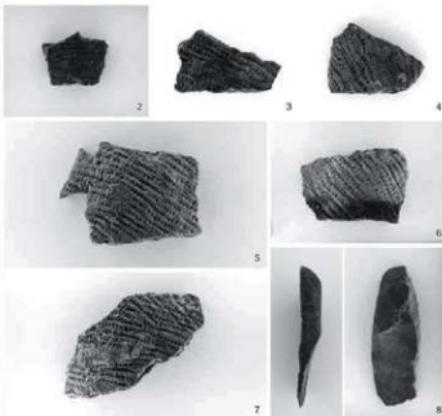
7

8

六角遺跡 SI1004 竪穴住居跡出土遺物 (1)

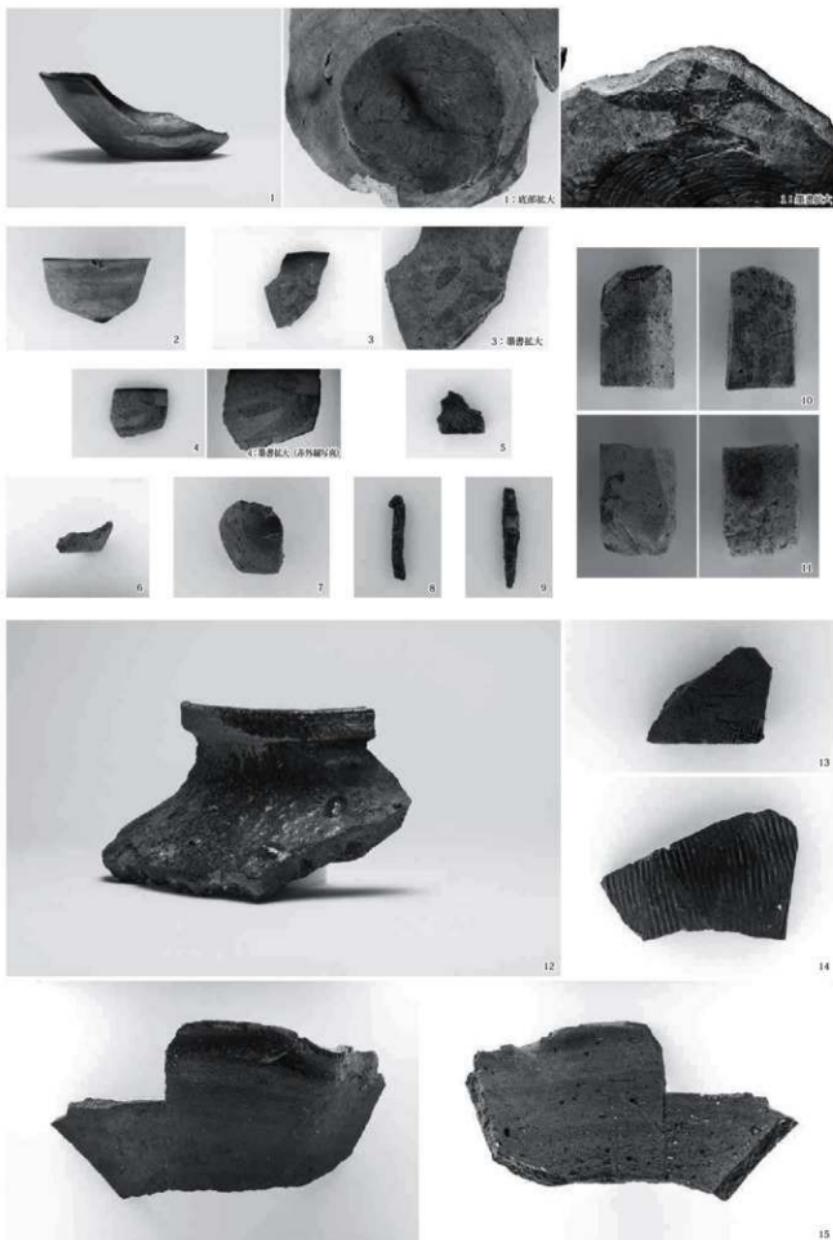
(第 37・38 回)

(S 約 1/3)



六角遺跡 SI1004 積穴住居跡出土遺物（2）
(第 37・38 回)

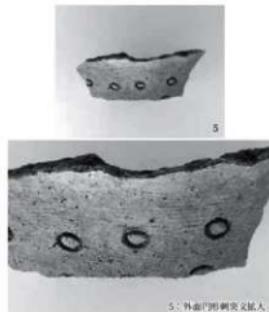
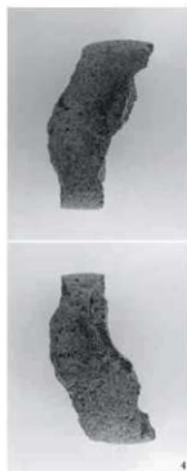
(5 件 1/3)



六角遺跡 S1755 積穴住居跡出土遺物、SE1002 井戸跡出土遺物（1）

(1～11：S1755・第35回、12～15：SE1002・第41回)

(S 与 1/3)



六角遺跡 SE1002 井戸跡出土遺物 (2)、遺構外出土遺物 原遺跡 SI101 穫穴住居跡出土遺物
(1～4: SE1002・第42回, 5: 遺構外・第43回, 6: PI01・第46回, 7: SI01・第46回)

(5 乍 1/3)

第3節 六角遺跡（近世墓編）

1. はじめに

(1) 調査・報告の経緯

県営ほ場整備事業における田面・水路・作業道の工事に伴う六角遺跡の発掘調査は平成18・19年度に実施し、その成果は平成19年度に報告している（藏王町教育委員会2008）。平成18年度の発掘調査では、近世以降の掘り込みと判断された遺構の一部を調査対象とし、近世墓8基の内容を把握したが、上記の報告書には未掲載となっていた。その後、前戸内遺跡（藏王町教育委員会2013）、礫ヶ坂遺跡（本章第1節）でも近世墓群が確認され、これらとの比較検討資料としても重要な意味を持つと考えられたことから、ここに報告して既刊の報告書の内容を補足しておきたい。

(2) 近世墓の確認状況

六角遺跡は、円田盆地北西縁の高木丘陵から盆地中央部に向かって南東方向に長く張り出す低平な舌状丘陵上に立地する。平成18・19年度には、遺跡の立地する舌状丘陵を東西に横断する農道より南側にS1-S3区、北側にN1-N10区を設定して調査を実施した（第47図）。発掘調査面積は合計25,800m²である。

近世墓は遺跡南部の丘陵尾根筋にあたるS1西区で1基（第48図）、遺跡北部の丘陵平坦面にあたるN6西区で8基（第51図）を確認した。S1西区の近世



第47図 平成18・19年度の調査区配置図

墓は単独で、N6西区の近世墓群は東西方向に列状に並んで確認された。これらの近世墓を確認した地点周辺の基本層序は、本書第2節の記載と同様である。

2. 遺構と遺物

(1) S1西区

【SK37近世墓】（第49・50図、写真図版1）

【位置】S1西区／南西向緩斜面

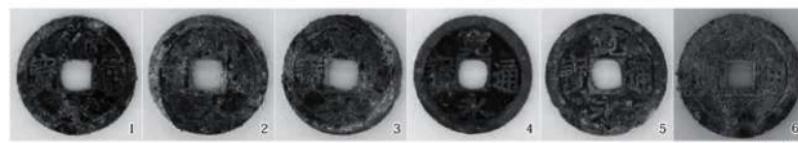
【重複】なし

【規模・形状】平面形が長軸172cm、短軸132cmの隅丸方形で、断面形は深さ73cmの逆台形を呈する。底面は平坦である。

【堆積土】4層に細分される。1層は微量の炭化物・白色粘土ブロックを含む黒褐色シルト、2層は均質な暗褐色シルト、3層は白色粘土ブロックを少量含む暗褐色シルト、4層は白色粘土ブロックを多量に含むにぶい黄褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。3-4層は埋葬時の埋土、1-2層は埋葬時の埋土起源の崩落土の可能性が考えられる。



第48図 S1西区 SK37近世墓の位置

 $S = 1/1$

No.	遺物名	層位	種類	材質	特徴			法量 (mm × g)	現存	曾有
					径	厚	重			
1	SK37	堆積土 2 層	銅錢（寛永通寶）	銅	段文「寛永通寶」古賣小錢	24.5	1.2	完形	212a	
2	SK37	堆積土 2 層	銅錢（寛永通寶）	銅	段文「寛永通寶」古賣小錢	24.8	1.3	3.3	完形	212b
3	SK37	堆積土 2 層	銅錢（寛永通寶）	銅	段文「寛永通寶」古賣小錢	24.7	1.3	3.0	完形	212c
4	SK37	堆積土 2 層	銅錢（寛永通寶）	銅	段文「寛永通寶」古賣小錢	24.4	1.1	2.5	完形	212d
5	SK37	堆積土 2 層	銅錢（寛永通寶）	銅	段文「寛永通寶」古賣小錢	25.1	1.1	2.2	完形	212e
6	SK37	堆積土 2 層	銅錢（寛永通寶）	銅	段文「寛永通寶」古賣小錢	25.6	1.5	2.4	完形	212f

第49図 SK37 近世墓出土遺物

〔遺物〕堆積土 2 層から銅錢（寛永通寶 6 点、第 49 図

図 1-6）、煙管（吸口？）が出土した。

(2) N6 西区

【SK427 近世墓】(第 52・53 図、写真図版 1)

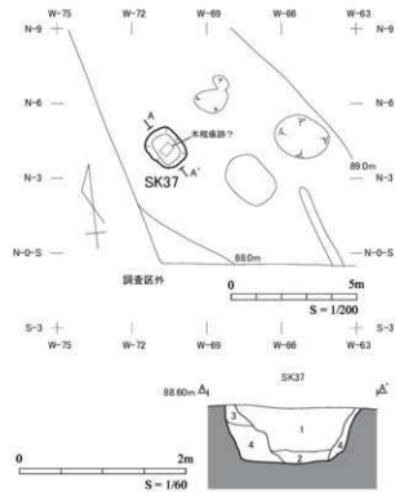
〔位置〕N6 西区／平坦面

〔重複〕なし

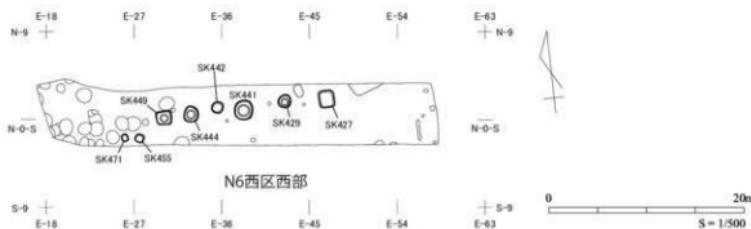
〔規模・形状〕平面形が長軸 170cm、短軸 150cm の隅丸方形で、断面形は深さ 80cm の箱形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕6 層に細分される。1・2 層は黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む黒褐色シルト、3 層は多量の黄褐色ローム粒と少量の黄褐色ロームブロックを含む黒褐色粘土シルト、4 層は黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む黒褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。1-3 層と 4-6 層の間には不整合を生じていることから、4-6 層は埋葬時の埋土、1-3 層は埋葬時の埋土起源の崩落土と考えられる。

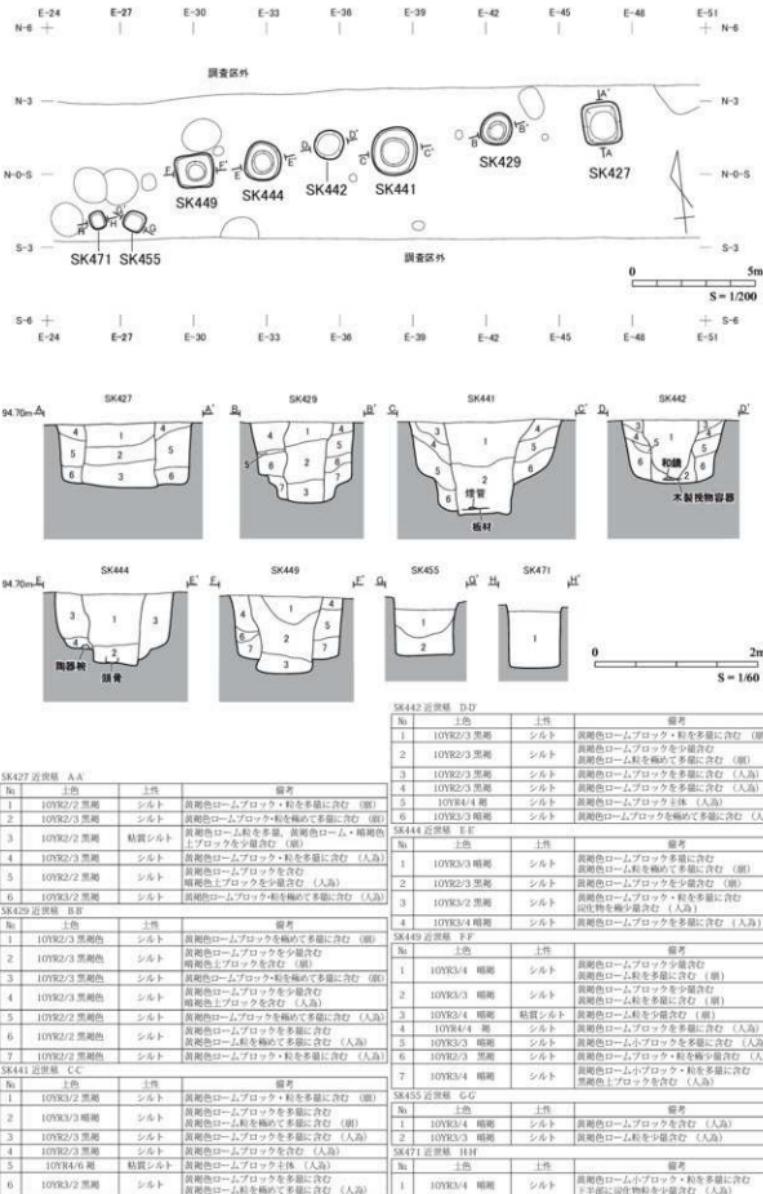
〔遺物〕堆積土から銅錢（寛永通寶 6 点、第 53 図 1-6）、ガラス製数珠玉（130 点、第 53 図 9）、塗膜片（赤漆、第 53 図 10・11）、骨片（歯 9 点など、第 53 図 12）、種子（米 22 点など、第 53 図 8）、不明鉄製品（管状、第 53 図 7）が出土した。このほか、堆積土から鉄釘



第50図 S1 西区 SK37 近世墓の位置



第51図 N6 西区近世墓群の位置



第52図 N6西区近世墓群

(角釘 6点)、不明鉄製品(板状)、木片、礫片、陶器・土師器・ロクロ土師器・須恵器の小破片が出土した。

【SK429 近世墓】(第52・53図、写真図版1)

〔位置〕N6西区／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸130cm、短軸120cmの略円形で、断面形は深さ101cmの逆凸字形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕7層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。1-3層と4-7層の間には不整合を生じていることから、4-7層は埋葬時の埋土、1-3層は埋葬時の埋土起源の崩落土と考えられる。

〔遺物〕堆積土から銅銭(寛永通寶6点、第53図13)のほか、骨片(歯4点)、鉄釘(1点)、土師器・ロクロ土師器・須恵器の小破片が出土した。

【SK441 近世墓】(第52・54図、写真図版1)

〔位置〕N6西区／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸210cm、短軸180cmの略円形で、断面形は深さ115cmの漏斗形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕6層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色シルト・褐色粘質シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。1-2層と3-6層の間には不整合を生じており、3-6層は埋葬時の埋土、1-2層は埋葬時の埋土起源の崩落土と考えられる。

〔遺物〕底面付近の堆積土2層から木製板材が出土し、板材の直上から煙管(雁首・吸口、第54図3-5)、銅銭(寛永通寶6点、第54図1)が、堆積土2層底面から煙管(雁首、第54図2)が出土した。また、堆積土から鉄釘(角釘1点)、磁器輪花皿・土師器の小破片が出土した。

【SK442 近世墓】(第52・54・55図、写真図版2)

〔位置〕N6西区／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸120cm、短軸110cmの略円形で、断面形は深さ73cmの逆台形を呈する。底面はやや皿状に窪んでいる。

〔堆積土〕6層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色・褐色・暗褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。1-2層と3-6層の間には不整合を生じており、3-6層は埋葬時の埋土、1-2層は埋葬時の埋土起源の崩落土と考えられる。

〔遺物〕底面付近の堆積土から木製挽物容器(鏡箱・漆塗?)、木片、青銅製鏡(蓬萊鏡)、第55図2)、

55図1)、煙管(雁首、第54図8)、堆積土から煙管(吸口、第54図9)、銅銭(寛永通寶6点、第54図6・7)、骨片(歯3点、第54図10)が出土した。青銅製和鏡は木製挽物容器の中に鏡面を下にして出土した。また、堆積土から土師器・須恵器・織文土器の小破片が出土した。

【SK444 近世墓】(第52・56図、写真図版1)

〔位置〕N6西区／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸160cm、短軸140cmの略円形で、断面形は深さ88cmの漏斗形を呈する。底面は平坦でやや東に傾斜する。

〔堆積土〕4層に細分される。黄褐色ロームブロックを含む黒褐色・暗褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。1-2層と3-4層の間には不整合を生じていることから、3-4層は埋葬時の埋土、1-2層は埋葬時の埋土起源の崩落土と考えられる。

〔遺物〕底面直上から陶器碗(第56図1)が逆位で出土した。また、堆積土から鉄釘(角釘1点)、骨片、土師器・ロクロ土師器・須恵器・弥生土器の小破片が出土した。

【SK449 近世墓】(第52・56図、写真図版2)

〔位置〕N6西区／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸150cm、短軸130cmの隅丸方形で、断面形は深さ97cmの逆凸字形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕7層に細分される。黄褐色ロームブロックを含む褐色・暗褐色シルト・暗褐色粘質シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。1-3層と4-7層の間には不整合を生じていることから、4-7層は埋葬時の埋土、1-3層は埋葬時の埋土起源の崩落土と考えられる。

〔遺物〕底面から煙管(雁首・吸口、第56図8・9)、骨片(歯、第56図10)が出土した。このほか、堆積土から染付磁器碗、炭化木片、布片、土師器・ロクロ土師器・弥生土器の小破片が出土した。

【SK455 近世墓】(第52・56図、写真図版2)

〔位置〕N6西区／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が一辺80cmの隅丸正方形で、断面形は深さ73cmの箱形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕2層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む暗褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。



S 5/1

No.	遺物名	部位	種類	材質	特徵			法量 (mm × g)	現存	登錄
					径	厚	重			
1	SK427	堆積上	銅錢 (寶永通寶)	銅	銘文「寶永通寶」古寶永錢	23.5	1.2	2.7	完形	201
2	SK427	堆積上	銅錢 (寶永通寶)	銅	銘文「寶永通寶」古寶永錢	24.2	1.3	3.5	完形	222a
3	SK427	堆積上	銅錢 (寶永通寶)	銅	銘文「寶永通寶」古寶永錢	23.8	1.0	2.8	完形	222b
4	SK427	堆積上	銅錢 (寶永通寶)	銅	銘文「寶永通寶」古寶永錢	24.9	1.1	3.2	完形	222c
5	SK427	堆積上	銅錢 (寶永通寶)	銅	銘文「寶永通寶」新寶永錢 (文銘)	23.0	1.0	2.5	完形	222d
6	SK427	堆積上	銅錢 (寶永通寶)	銅	銘文「寶永通寶」祥文 (文銘) 新寶永錢 (文銘)	25.6	1.4	4.2	完形	222e
No.	遺物名	部位	種類	材質	特徵			現存	登錄	
					径	厚	重			
7	SK427	堆積上	管狀器皿	鐵	2点				一部	224
8	SK427	堆積上	樹脂繩子	樹脂化	23点 (範幅: 22.5mm) 不規則形繩子 (1点) 直:範幅 3.8-6.5mm、不規則形繩子 3.8mm 總重量: 0.2g				一部欠解	223
9	SK427	堆積上	數珠玉	硝石	130点 (乳白色 - 透明: 121点, 白色: 9点) 直: 3.5-5.0mm 孔径: 1.1-1.6mm 厚: 2.3-4.6mm 重: ≤ 0.2g 總重量: 1.1fg				完形	202
10	SK427	堆積上	鐵廢片	鐵					一部	203
11	SK427	堆積上	鐵廢片	鐵					一部	229
12	SK427	堆積上	鐵廢片	鐵	9点				一部	204-205



13

S 5/1

No.	遺物名	部位	種類	材質	特徵			法量 (mm × g)	現存	登錄
					徑	厚	重			
13	SK429	堆積上	銅錢 (寶永通寶)	銅	6枚錯合 (最上面: 銘文「寶永通寶」新寶永錢 徑: 23.8mm)			(9.5) (17.8) (錯合)	218	

第 53 図 SK427・SK429 近世墓出土遺物

〔遺物〕堆積土から銅鏡（實永通寶1点、第56図13）、鉄銭（3点、第56図12）、裡賈（吸口・雁首、第56図14・15）が出土した。このほか、堆積土から釘（角釘37点）が出土した。

〔SK471 近世墓〕（第52・56図、写真図版2）

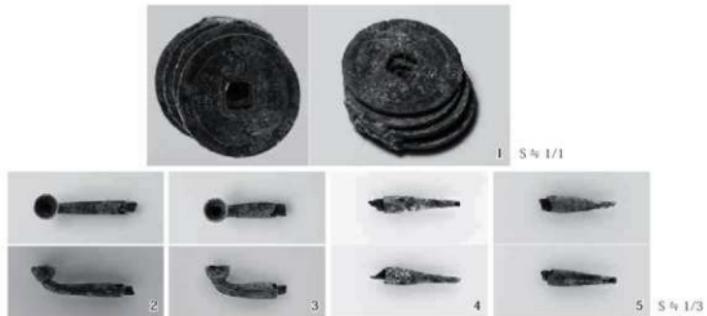
〔位置〕N6 西区／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸70cm、短軸60cmの角丸方形で、断面形は深さ82cmの箱形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕多量の黄褐色ロームブロック・粒と、炭化物粒を含む暗褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔遺物〕堆積土から鉄銭（1点、第56図11）、釘（角釘19点）、土師器・須恵器の小破片が出土した。



No.	遺物名	層位	種類	材質	特徴			法量 (mm・g)			現存	登録
					径	厚	量	(7.5)	(17.0)	(耕前)		
1	SK441	堆積土上層 木製板材直上	銅鏡（實永通寶）	銅	6枚薄荷 肩上面：跋文「實永通寶」 斎寶系鏡 径：25.3mm 厚：1.4mm						215	
2	SK441	堆積土上層 木製板材直上	裡賈（雁首）	銅	雁首一部欠損。竹製襯子一部現存						一部欠損	216
3	SK441	堆積土上層 木製板材直上	裡賈（雁首）	銅	雁首一部欠損。竹製襯子一部現存						一部欠損	217a
4	SK441	堆積土上層 木製板材直上	裡賈（吸口）	銅	吸口一部欠損。竹製襯子一部現存						一部欠損	217b
5	SK441	堆積土上層 木製板材直上	裡賈（吸口）	銅	吸口一部欠損。竹製襯子一部現存						一部欠損	217c

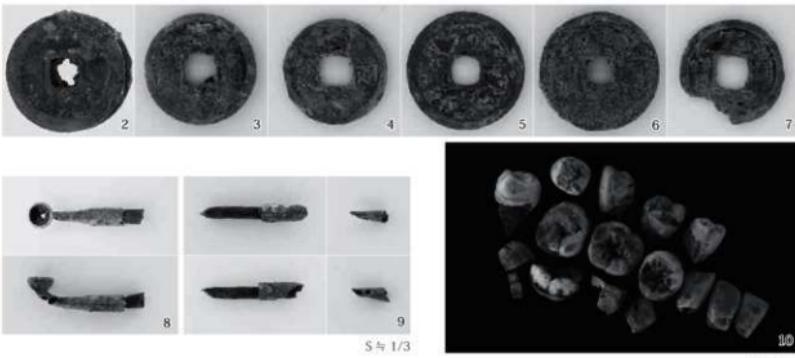
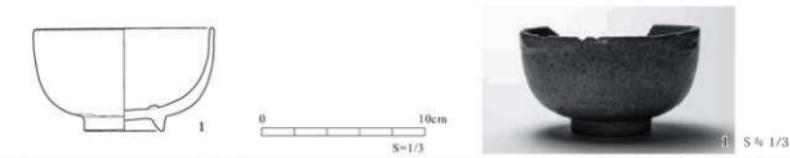


No.	遺物名	層位	種類	材質	特徴			法量 (mm・g)			現存	登録
					径	厚	量	(2.8)	(4.4)	(耕前)		
6	SK442	堆積土 里賈（吸口通寶）	銅鏡	銅	2枚薄荷 肩上面：跋文「吸口通寶」 斎寶系鏡 径：23.7mm 厚：1.1mm						221a	
7	SK442	堆積土 里賈（吸口通寶）	銅鏡	銅	4枚薄荷 肩上面：跋文「吸口通寶」 斎寶系鏡 径：21.5mm 厚：0.9mm						221b	
No.	遺物名	層位	種類	材質	特徴			法量 (mm・g)			現存	登録
					径	厚	量	(4.8)	(8.2)	(耕前)		
8	SK442	丸面	裡賈（雁首）	銅	雁首完形。竹製襯子一部現存。布付有						219	
9	SK442	堆積土	裡賈（吸口）	銅	吸口一部欠損。竹製襯子一部現存。布付有						一部欠損	220
No. 1	遺物名	層位	種類	材質	特徴			法量 (mm・g)			現存	登録
10	SK442	堆積土	鈎形	銅							一部	208

第54図 SK441・SK442近世墓出土遺物



第55圖 SK442 近世墓出土遺物



No.	遺物名	展位	種類	材質	特徴	法量 (mm・g)			現存	登録
No.	遺物名	展位	種類	材質	特徴	長	幅	高	現存	登録
8	SK449	底面	銅質（羅目）	銅	羅目一部欠損、竹製繩子一部現存	(5.8)	(2.0)	1.0	一部欠損	213a
9	SK449	堆積土	銅質（羅目）	銅	明1-一部現存、竹製繩子一部現存	(2.82)	(2.34)	1.0	一部	213b
No.	遺物名	展位	種類	材質	特徴	法量 (mm・g)			現存	登録
10	SK449	堆積土	銅片	銅	15点				一部	206



No.	遺物名	展位	種類	材質	特徴	法量 (mm・g)			現存	登録
						長	幅	高		
14	SK455	底面	銅質（羅目）	銅	羅目一部欠損、竹製繩子一部現存	(5.10)	(2.95)	1.0	一部欠損	227a
15	SK455	堆積土	銅質（羅目）	銅	明1-一部欠損、竹製繩子一部現存	(4.50)	(3.45)	1.0	一部	227b

第56図 SK444・SK449・SK455・SK471 近世墓出土遺物

第7表 遺構觀察表

<六角遺跡>

近世墓

区	遺跡名	位置	形状			周囲(cm)			出土遺物	遺物関係	時期	回
			平面	横断面	底面	長	寛	深				
S1西	SK837	西斜面	圓丸方形	逆円形	平田	172	132	73	銅鏡(真木通鏡)、珠寶、鉢片、蝶子、鉄釘、不明鉄製品、木片、織片、骨片、陶器、土陶器、ロクロ上陶器、葉巻頭	なし	近世	50
	SK427	平坦面	圓丸方形	船形	平田	170	150	80	銅鏡(真木通鏡)、珠寶、鉢片、蝶子、鉄釘、不明鉄製品、木片、織片、骨片、陶器、土陶器、ロクロ上陶器、葉巻頭	なし	近世	52
	SK429	平坦面	船門形	逆凸字形	平田	130	120	101	銅鏡(真木通鏡)、鉄釘、骨片、土陶器、ロクロ上陶器、葉巻頭	なし	近世	52
	SK441	平坦面	船門形	船斗形	平田	210	180	115	銅鏡(真木通鏡)、珠寶、鉢片、木製軸材、鐵筋輪花器、土陶器	なし	近世	52
	SK442	平坦面	船門形	逆斗形	船狀	120	110	73	和紙(蓬萊綿)、木製喪物袋、銅鏡(真木通鏡)、珠寶、木片、骨片、土陶器、葉巻頭、織文上羽	なし	近世	52
	SK444	平坦面	船門形	闊斗形	平田 (妻山船跡)	160	140	88	鉄釘、骨片、陶器、土陶器、ロクロ上陶器、葉巻頭、告牛上鷹	なし	近世	52
	SK449	平坦面	圓丸方形	逆凸字形	平田	150	130	97	銅鏡(真木通鏡)、珠寶、高麗木片、布片、骨片、染付磁頭柄、土陶器、ロクロ上陶器、告牛上鷹	なし	近世	52
N6西	SK455	平坦面	圓丸正方形	船形	平田	80	80	73	銅鏡(真木通鏡)、鉄釘、骨片、鉄釘	なし	近世	52
	SK471	平坦面	圓丸方形	船形	平田	70	60	82	鉄釘、鉄釘、土陶器、葉巻頭	なし	近世	52

3. 考察

(1) 六角遺跡の近世墓

① 遺物と遺構の年代

遺構と遺物の確認状況 近世墓は遺跡南部の丘陵尾根筋で1基、遺跡北部の丘陵平坦面で8基の計9基を確認した。遺物は銅鏡（寛永通寶）、鉄鏡、青銅製和鏡（蓬萊鏡）、煙管、不明鉄製品、ガラス製数珠玉、磁器輪花皿、染付磁器碗、陶器碗、木製挽物容器、塗腹片、鉄釘、種子、木片、布片、骨片などが出土した。

遺物の特徴と年代 各近世墓の出土遺物の組成は次のとおりである（数字は点数）。

SK37	銅鏡6（古寛永6）、煙管1
SK427	銅鏡6（古寛永4+文鏡1+新寛永1）、数珠玉130、資訊鉄製品、板状鉄製品、便携片、種子23（木22）、陶器片、鉄釘、礫片、木片、骨片
SK429	銅鏡6（新寛永1）、鉄釘、骨片
SK441	銅鏡6（新寛永1）、煙管2、磁器輪花皿、鉄釘
SK442	銅鏡6（新寛永2）、青銅鏡と鏡1（蓬萊鏡）、木製挽物容器1（繩引）、煙管1、木片、骨片
SK444	陶器碗、鉄釘、骨片
SK449	銅鏡7（古寛永1+新寛永30）、煙管1、染付磁器碗、灰化木片、布片、骨片
SK455	銅鏡4（古寛永1）、鉄鏡3、煙管1、鉄釘
SK471	鉄鏡1、鉄釘

銅鏡のうち文鏡が判読できるものはすべて寛永通寶で、鑄造年が1636-1659年とされる古寛永鏡12点、1668年とされる文鏡1点、1668年以降とされる新寛永鏡8点がある。鉄鏡は3点あり文鏡が判別できないが、形状から仙臺通寶と考えられる。仙臺通寶の鑄造年は1784-89年とされている。

煙管はいずれも竹製の羅宇の両端に金属製の雁首・吸口を装着する羅宇煙管で、雁首の火皿と首部の接合部分に補強帯を持ち、火皿下部の脂返しは下方へ滴曲しない形態のものが4点見られる。こうした形態は古泉弘氏による煙管の編年（古泉2001）では第Ⅲ段階に該当し、18世紀前半のものとされている。また、同様の形態で雁首の火皿と首部の接合部分に補強帯を持たないものが1点見られ、18世紀後半のものとされている第Ⅳ段階に該当する。古泉編年は第Ⅰ段階を除いてほぼ全國的に同一の年代の変化を辿ることが追認されており、仙台市沼向遺跡（仙台市教育委員会2010）でも、第Ⅲ・Ⅳ段階の煙管と18世紀の陶磁器の共伴が確認されている。

青銅製和鏡は平面形が正円形の円形鏡で直径10.2cm、重量100.0gである。鏡面は平坦だが周縁部で僅かに反りを持ち、鏡縁は僅かに内傾する直角式高縁である。鏡背は周縁に二重圓線を巡らせ、中心にやや高肉の亀形鏡を持つ。紋様は上部に松樹文、左下に双鶴文、下部に洲浜文を配する蓬萊図（洲浜松樹双鶴

文）で、鏡の上部に家紋（菊花紋？）を加えている。紋様がやや不鮮明なことから、踏返鏡と考えられる。

蓬萊図の鏡は国内では14世紀（室町期）に流行した擬漢式鏡の一種で、これを踏襲した和鏡が17世紀前半（江戸時代初期）にも多く製作された。本例について見ると、直角式高縁や二重圓線、パターン化が進んだ紋様の構成と配置から17世紀代に製作されたものと考えられ、栗原市下藤沢II遺跡2号墓（漸峰町教育委員会1988）、多賀城市大日北遺跡第1次36号墓（多賀城市教育委員会1998）など17世紀中葉から18世紀の近世墓副葬品に類例が見られる。

陶磁器類は、陶器碗1点、染付磁器碗・磁器輪花皿の小破片各1点がある。陶器碗は小野相馬産で18世紀中葉～後葉と考えられる。

遺構の年代 遺構の年代を検討するにあたり、各近世墓の遺物の組み合わせと年代を確認する。六道鏡の構成は①17世紀中葉：古寛永通寶のみ（SK37）、②17世紀後葉：古寛永+新寛永文鏡+新寛永通寶（SK427）、③17世紀後葉-18世紀：新寛永通寶を含む（SK429・SK441・SK442・SK449）、④18世紀末：鉄鏡を含む（SK455・SK471）と分類できる。煙管は古泉編年を参照すると①18世紀前半：第Ⅲ段階（SK441・SK442・SK455）、②18世紀後半：第Ⅳ段階（SK449）と分類できる。このほかに年代の推定できた遺物には、17世紀：青銅製和鏡（SK442）、18世紀中葉～後葉：小野相馬産の陶器碗（SK444）がある。

以上の年代などから、SK37近世墓は17世紀中葉頃、SK427近世墓は17世紀後葉頃、SK429・SK441・SK442近世墓は18世紀前半、SK444・SK449近世墓は18世紀中頃～後半、SK455・SK471近世墓は18世紀末頃の年代が考えられ、江戸時代前期中葉～中期末に位置づけられる。

② 遺構の性格

近世墓の年代は17世紀中葉-18世紀末頃の各時期と推定された。年代ごとの分布状況を見ると、遺跡南部の丘陵尾根筋に17世紀中葉の1基が単独で分布し、遺跡北部の丘陵平坦面に17世紀後葉-18世紀末頃の8基がまとめて分布する。

遺跡北部の8基は線状に並んで設けられており、東側から17世紀後葉頃の1基（SK427）、18世紀前半頃の3基（SK429・SK441・SK442）、18世紀後半頃の2基（SK444・SK449）、18世紀末頃の2基（SK455・SK471）が順に設けられたと考えられる。

遺構の配置と時期変遷から、遺跡北部の近世墓群は屋敷単位で設けられた一族の墓域と考えられる。

(2) 円田盆地の近世墓について

県営は場整備事業に伴う近年の調査により、円田盆地北部では本遺跡のほか、磯ヶ坂遺跡（本章第1節）、前戸内遺跡（戸町教育委員会2013）で近世墓群が確認されている（第57・58図）。ここでは、これらの近世墓群の内容を通じし、円田盆地における近世村落墓制について若干の検討を試みる。

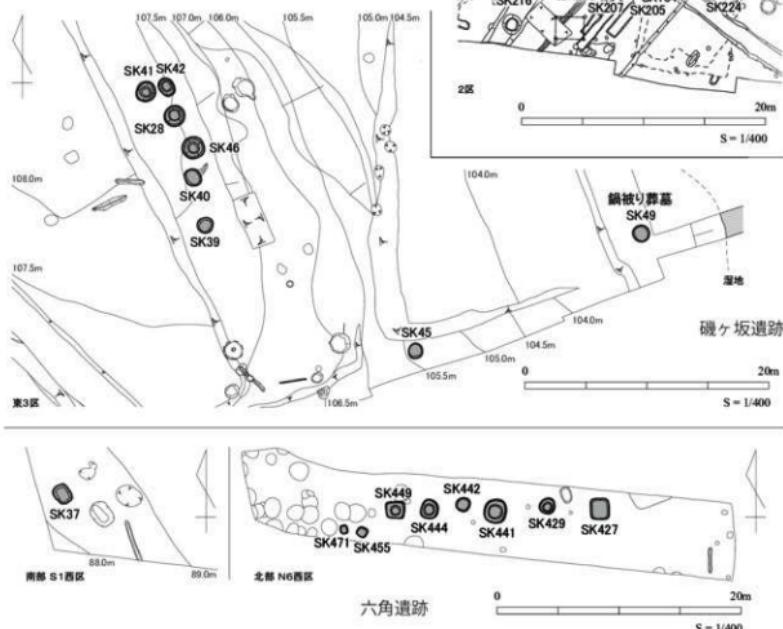
①立地と分布状況

磯ヶ坂遺跡 周囲の水田との比高差5mほどの小高い舌状の小丘陵上に立地する。近世墓は8基が確認され、このうち6基が丘陵尾根筋上に長さ15mほどの線状に並び、やや離れた東斜面に1基、東斜面下部の湿地際に1基が設けられている。周囲に墓以外の近世遺構は確認されていない。

前戸内遺跡 周囲の水田との比高差1.5mほどの微高地状を呈する舌状丘陵裾部に立地する。近世墓10基、土坑4基が確認され、東西20mほどの範囲にまとまって設けられている。土坑4基も位置関係から近世墓の可能性が考えられている。周囲にはこれ以外に目立った近世遺構は確認されていない。



第57図 近世墓群の位置

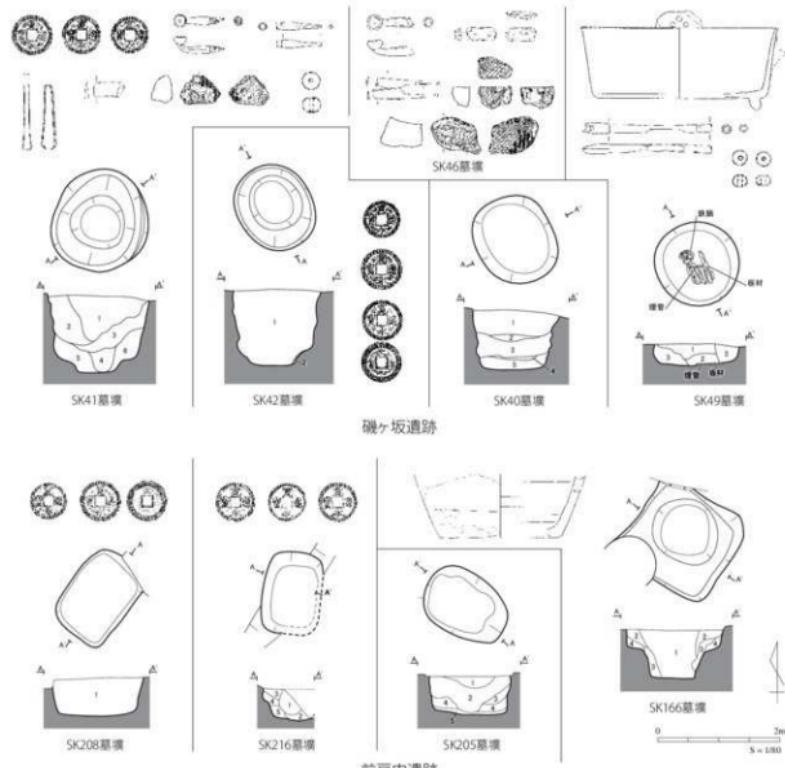


第58図 各遺跡の近世墓群

六角遺跡 周囲の水田との比高差2~2.5mほどの舌状丘陵上に立地する。近世墓は9基が確認され、このうち8基が遺跡北部の丘陵平坦面に長さ20mほどの線状に並び、1基は遺跡南部の丘陵尾根筋上に設けられている。周囲に墓以外の近世遺構は確認されていない。
まとめ 低地に面した丘陵上に設けられるものが主体的である。いずれも周囲に屋敷などの存在を窺わせる遺構ではなく、畠あるいは山林などの一角に設けられた墓域と考えられる。調査区の制約もあるため各墓群の全体の様相は必ずしも明らかでないが、概ね10基前後のまとまりで構成されるようである。

②墓壙の形態と埋葬様式

磯ヶ坂遺跡 墓壙の平面形は8基とも円形基準である。このうち中央部が円形に一段低く掘り窪められて断面逆凸字形となるものが4基(SK28・SK41・SK42・SK46)あり、丘陵尾根筋に線状配置された墓群の北部にまとまっている。湿地際に設けられたSK49墓壙では鉄製吊鍋が逆位で出土し、鍋被り葬墓と考えられる。また、SK49墓壙は周縁部と中央部の埋土が明瞭な不整合の関係があり、底面に木棺底板と考えられる板材が遺存していた。これ以外に木棺の遺存する墓壙はなく、墓壙内の埋土は水平に堆積しているもの(SK40・SK45)、中央部の埋土が擂鉢状に堆積しているもの(SK28・SK41・SK46)、ほぼ単層のもの(SK39・SK42)が見られる。



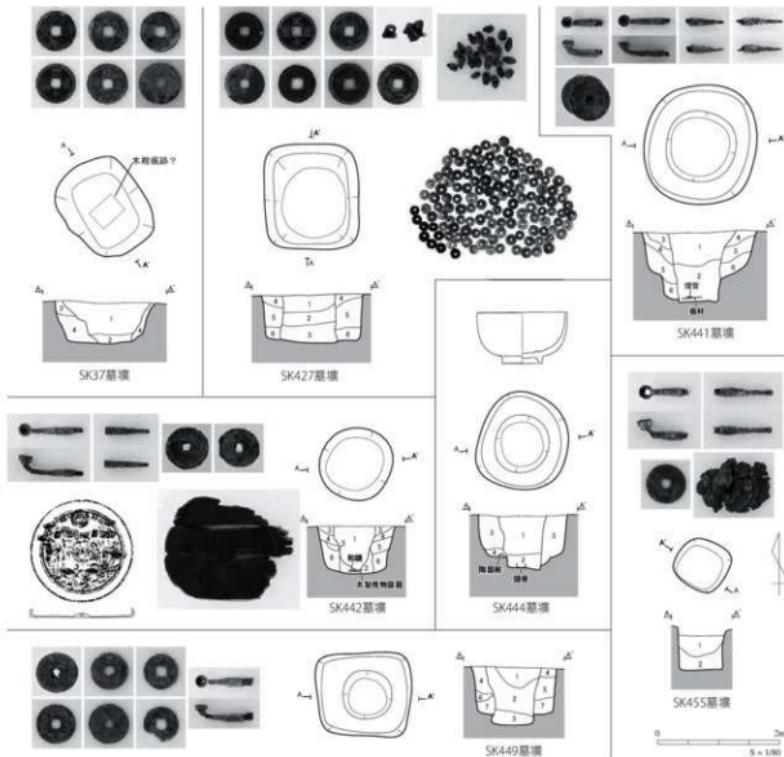
第59図 近世墓と出土遺物（1）

前戸内遺跡 墓壙の平面形は方形基調1基（SK166）、長方形基調9基である。SK166墓壙は断面逆凸字形を呈し、これ以外は断面箱形ないしは逆台形を呈する。木棺の遺存する墓壙はないが、SK166墓壙は周縁部と中央部の埋土が明瞭な不整合の関係にある。これ以外の墓壙の埋土は水平堆積（SK162・SK207）、擂鉢状堆積（SK205・SK216）、中央部の埋土が山形に堆積しているもの（SK163）、単層（SK206・SK208・SK217・SK224）が見られる。

六角遺跡 墓壙の平面形は長方形基調1基（SK37・SK427）、方形基調3基（SK449・SK455・SK471）、円形基調4基（SK429・SK441・SK442・SK444）である。円形基調のうち3基（SK429・SK441・SK444）と方形基調の1基（SK449）は断面逆凸字形を呈し、こ

れ以外は断面箱形ないしは逆台形を呈する。小型のSK455・SK471墓壙を除く7基は周縁部と中央部の埋土が不明瞭な不整合の関係にあり、SK441墓壙では底面付近に木棺底板と考えられる板材が遺存していた。これ以外に木棺の遺存する墓壙ではなく、SK455墓壙は擂鉢状堆積、SK471墓壙は単層である。

まとめ 上部に盛土を伴って確認されたものではなく、墓壙の平面形で見ると礎ヶ坂遺跡では円形、前戸内遺跡では方形・長方形主体であり、六角遺跡では混在している。墓壙の埋土は①周縁部と中央部が明瞭な不整合の関係を示すもの、②中央部が擂鉢状に堆積するもの、③中央部が山形に堆積するもの、④水平に堆積しているもの、⑤ほぼ単層のものが見られる。木棺が遺存する墓壙はないが、埋土①のうち2基の底面付近



第60図 近世墓と出土遺物（2）

で木棺底板と考えられる板材の一部を確認している。埋土①の状態は、低湿地で木棺が良好に遺存した多賀城市大日北遺跡（多賀城市教育委員会 1998）、仙台市洞ノ口遺跡（仙台市教育委員会 2005）の調査例から木棺墓の堆積状況と判断され、墓壙の形状から六角遺跡 SK37 墓壙は方形木棺墓、これ以外は円形木棺墓であったと考えられる。また、埋土②～⑤の状態は、大日北遺跡、洞ノ口遺跡、栗原市下藤沢Ⅱ遺跡で確認された木棺を伴わない墓壙の堆積状況と類似し、直葬墓であったと考えられる。

以上のことから、磯ヶ坂遺跡では円形墓壙+直葬墓 7 基、円形墓壙+円形木棺墓 1 基、前戸内遺跡では長方形墓壙+直葬墓 9 基、方形墓壙+円形木棺墓 1 基、六角遺跡では長方形墓壙+方形木棺墓 1 基、長方形墓壙+円形木棺墓 1 基、円形墓壙+円形木棺墓 4 基、方形墓壙+円形木棺墓 1 基、方形墓壙+直葬墓 2 基と考えられ、磯ヶ坂遺跡・前戸内遺跡では直葬墓、六角遺跡では木棺墓が卓越する傾向が見られる。

④出土遺物と墓の年代

磯ヶ坂遺跡 銅銭（寛永通寶）、煙管、和鍊、毛抜き、吊耳鉄鍋、火打金、火打石、ガラス製数珠玉などが出土地でいる。六道銭は 3 基（SK41・SK42・SK43）で伴う。鏡着により一部しか判別できないが、古寛永銭・新寛永文銭・新寛永銭があり、3 基とも新寛永銭を含むことから概ね 18 世紀代の様相と考えられる。煙管は 3 基（SK41・SK46・SK49）で副葬され、古泉弘氏（2001）による煙管の編年では第Ⅲ段階（18 世紀前半）に該当する。以上のことから、磯ヶ坂遺跡の墓群は概ね 18 世紀代の年代が考えられる。

前戸内遺跡 銅銭（寛永通寶）、煙管、陶器碗・甕などが出土している。六道銭は 4 基（SK163・SK166・SK208・SK216）で伴い、羽扇の付着するものがある。鏡着により一部しか判別できないが、古寛永銭・新寛永文銭・新寛永銭があり、單一種で占められるものはない。このほかに年代の推定できるものとしては大堀相馬産の陶器碗（18-19 世紀）、村田塙内産の陶器甕

（19 世紀）がある。以上のことから、前戸内遺跡の墓群は概ね 19 世紀代の年代が考えられる。

六角遺跡 銅銭（寛永通寶）、鐵錢、煙管、青銅製和鍊（蓬萊鏡）、木製挽物容器、ガラス製数珠玉、陶器碗、炭化米などが出土している。六道銭は 8 基で伴い、銅銭は古寛永銭・新寛永文銭・新寛永銭があり、鐵錢は仙臺通寶とみられる。六道銭の構成は①古寛永通寶のみ（17 世紀中葉：SK37）、②古寛永+新寛永文銭+新寛永通寶（17 世紀後葉：SK427）、③新寛永通寶を含む（17 世紀後葉-18 世紀：SK429・SK441・SK442・SK449）、④鐵錢を含む（18 世紀末：SK455・SK471）と分類できる。煙管は古泉編年第Ⅲ段階（18 世紀前半：SK441・SK442・SK455）、第Ⅳ段階（18 世紀後半：SK449）と分類できる。このほかに年代の推定できるものとしては、青銅製和鍊（17 世紀：SK442）、小野相馬産の陶器碗（18 世紀中葉-後葉：SK444）がある。以上のことから、六角遺跡の墓群は 17 世紀中葉頃（SK37）、17 世紀後葉頃（SK427）、18 世紀前半（SK429・SK441・SK442）、18 世紀中葉-後半（SK444・SK449）、18 世紀末頃（SK455・SK471）の年代が考えられる（第 61 図）。

まとめ 六角遺跡の墓群では、六道銭と煙管、陶器の年代などから 17 世紀中葉-18 世紀末頃にかけての 5 時期に細分できた。また、一部年代の不明確なものも含まれるが、概ね磯ヶ坂遺跡の墓群は 18 世紀代、前戸内遺跡の墓群は 19 世紀代と考えられる。

④被葬者の階層

磯ヶ坂遺跡・前戸内遺跡・六角遺跡で確認されている各墓群における墓壙の形態と埋葬様式、出土遺物から被葬者の階層について検討する。

墓壙の形態と埋葬様式について見ると、確認されたものはすべて土葬墓であり、円形木棺墓、方形木棺墓、直葬墓で構成されている。埋葬時の地表面の状況は不明であるが、比較的近接した墓壙の配置状況から、大規模な塚を伴うものではなかったと推測される。

出土遺物には銭貨、煙管、和鍊、和鍊、毛抜き、鉄



第 61 図 近世墓の年代（六角遺跡）

鏡、陶器、数珠玉、火打石、火打金、炭化米などがある。これらの遺物は被葬者の生前の生活や、埋葬に関わった人々の地域的な風習を反映していると考えられる。

県内における近世墓群の主な調査事例としては、仙台市新妻家墓地（仙台市教育委員会 1986）、多賀城市大日北遺跡（多賀城市教育委員会 1998）、栗原市下藤沢Ⅱ遺跡（瀬峰町教育委員会 1988）などがある。新妻家墓地では 17 世紀後半～19 世紀の墓壙 25 基が確認されている。埋葬様式は甕棺墓、円形木棺墓、直葬墓があり、出土遺物には銭貨、刀、鎌、煙管、銅鑼、陶器、漆器、櫛、土人形などがある。当該墓地は伊達家の臣下であった新妻家、千葉家の墓域であることから、被葬者の階層は武士階級とされている。大日北遺跡では、17 世紀中頃～18 世紀後半以降の墓壙 70 基が確認されている。埋葬様式は円形木棺墓、方形木棺墓、直葬墓があり、出土遺物には銭貨、煙管、和鏡、剃刀、陶磁器、漆器、櫛、数珠、提灯などがある。埋葬様式や出土遺物から被葬者の階層は庶民階層の中でも豪農クラスと推定され、「江戸時代農村型」とする出土人骨の人類学的な調査結果とも整合している。下藤沢Ⅱ遺跡では 17 世紀前葉～19 世紀後葉の墓壙 28 基が確認されている。埋葬様式は方形木棺墓、直葬墓が確認され、墓壙のみのものと塚を伴うものがある。出土遺物には銭貨、煙管、和鏡、陶磁器などがある。当該墓地は下藤沢地区の旧家である門脇家の墓域で、その総本家は「上の庄屋」と称されている。

これらの調査事例と磯ヶ坂遺跡・前戸内遺跡・六角遺跡の各墓群を比較すると、大日北遺跡の状況と類似しており、下藤沢Ⅱ遺跡とは塚の有無で違いがあるが出土遺物の内容には共通性がある。一方、新妻家墓地では甕棺が用いられていることや刀が出土しているなど、出土遺物の内容に大きな違いが見られる。大日北遺跡・下藤沢Ⅱ遺跡の被葬者は庄屋・豪農クラスの庶民階層、新妻家墓地は武士階級と推定されている。

以上のことから、磯ヶ坂遺跡・前戸内遺跡・六角遺跡の墓群では甕棺が用いられず、武士階級を想定させる出土遺物が見られないことから、被葬者は庶民階層と考えられる。また、磯ヶ坂遺跡・六角遺跡の墓群については、出土遺物の種類や量の豊富さから大日北遺跡と同様に庶民階層の中でも豪農クラスであった可能性が考えられる。

⑤円田盆地における近世村落墓制（予察）

円田盆地で確認されている近世墓には 17 世紀中葉から 19 世紀代にかけてのものがある。このうち 17 世紀中葉のものは 1 例しか見られないが、単独で設

けられたと考えられる。これに対して、17 世紀後葉以降のものは丘陵部に 10 基前後の集中からなる墓壙群を形成していることが明らかになった。

東京都南多摩地域の江戸周辺村落の発掘事例では、17 世紀前葉までの墓壙は単独ないし数基が散在して確認されることが多く、密集して墓地を形成する事例は少ないのでに対して、17 世紀中葉（多くは 17 世紀後葉）～18 世紀前葉以降の事例では、屋敷地ないしは近傍に一族累代の墓所を設けたイエバカ（ヤシキバカ）と考えられる墓壙集中が多く確認されている。このような一族墓（イエバカ）の形成は、近世の幕藩体制における農民支配や農村における「イエ」意識の浸透過程を示すとされている（長佐古 2001）。

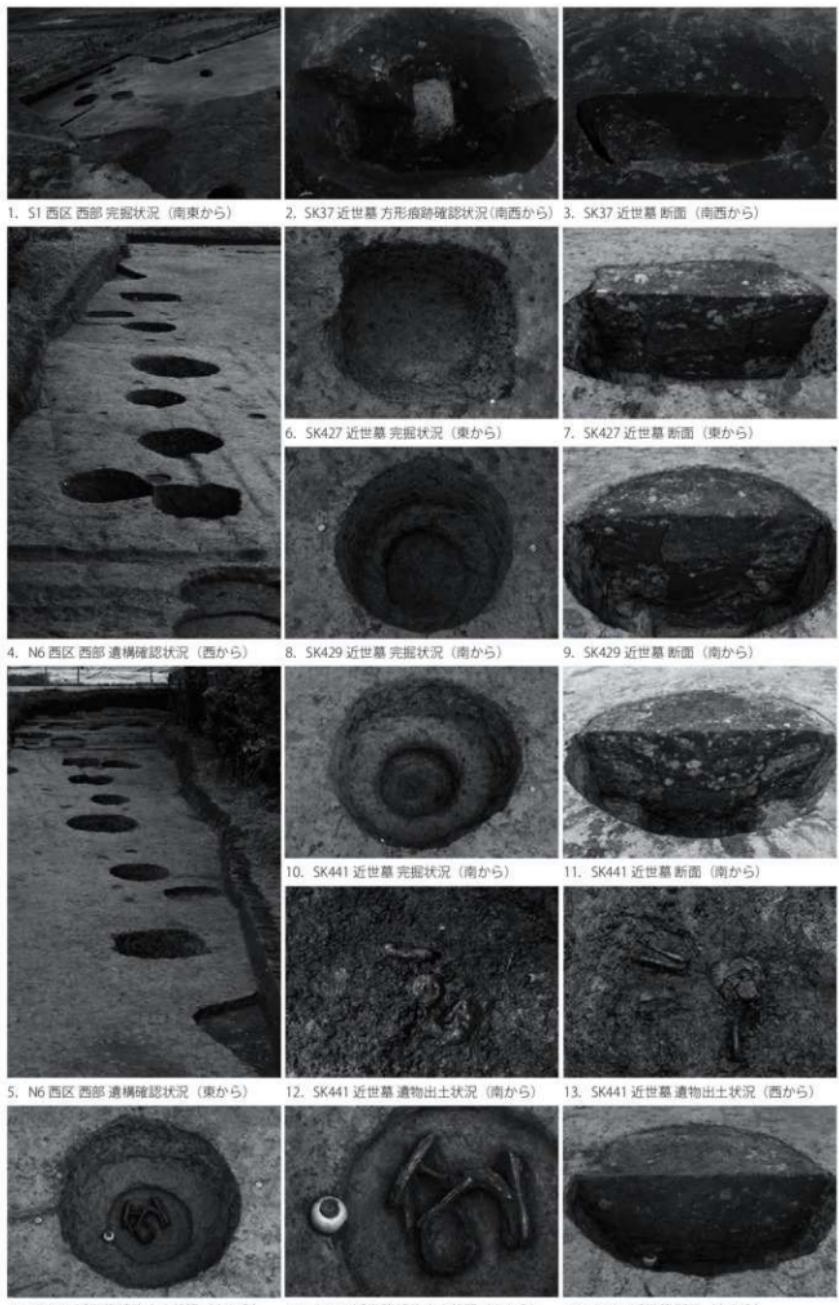
六角遺跡では 17 世紀後葉から 18 世紀末にかけて 8 基の墓壙が設けられ、線状に並ぶ墓群を形成していた。墓群を形成した期間や墓壙の配置から、これらは一族墓と考えられる。また、磯ヶ坂遺跡では概ね 18 世紀代と考えられる墓壙 6 基が線状に並んでおり、これらも墓壙の配置から六角遺跡と同様に一族墓の可能性が考えられる。前戸内遺跡では、観ね 19 世紀代と考えられる墓壙 10 基が一部重複しながら不規則な集中域を形成しており、一族墓と考えられる磯ヶ坂遺跡・六角遺跡とは様相が異なっている。また、埋葬様式では長方形墓壙+直葬墓が卓越し、比較的短期間に墓群が形成されたことが窺われることから、これらは集落単位の集団墓の可能性が考えられる。

被葬者の階層についてはいずれも庶民階層と考えられるが、一族墓を形成した六角遺跡・磯ヶ坂遺跡では出土遺物の種類や量の豊富さから豪農クラスの可能性が考えられる。一方、集落単位の集団墓と考えられる前戸内遺跡では出土遺物の種類や量が少なく、一般庶民の墓と考えられる。

以上のことから、円田盆地の近世村落においては、17 世紀後葉頃に豪農クラスの庶民階層の一族墓が形成されていることが判明した。このことは、村落における墓制の変化が江戸周辺と大差ない時期に起こったことを示しており、当時の幕藩体制における農民支配や葬送儀礼の実態を知る上で重要なと考えられる。

また、磯ヶ坂遺跡では丘陵尾根筋上の墓群から離れた湿地際に単独で設けられた鍋被り葬墓を確認している。鍋被り葬は中世末から近世の東北・関東・信州地域で特異な葬制として散見されるもので、特殊な病気や事件・事故による異常な死を迎えた者に対する葬送儀礼と考えられ（関根 2003）、当地域における近世の葬送儀礼を考える上で興味深い事例である。

写真図版 1





1. SK442 近世墓 完掘状況（南から）



2. SK442 近世墓 断面（南から）



3. SK442 近世墓 遺物出土状況（南から）



4. SK442 近世墓 遺物出土状況（北から）



5. SK449 近世墓 完掘状況（南から）



6. SK449 近世墓 断面（南から）



7. SK455 近世墓 完掘状況（北東から）



8. SK455 近世墓 断面（北東から）



9. SK471 近世墓 完掘状況（北から）



10. SK471 近世墓 断面（北から）



11. S1 西区 作業風景（南東から）



12. S1 西区 作業風景（南東から）

第5章 総括

1. 磯ヶ坂遺跡

- (1) 磯ヶ坂遺跡は、宮城県南部の刈田郡蔵王町大字小村崎字磯ヶ坂・狐塚・向原・門下・青木屋敷地内に所在する。遺跡は蔵王町東部の円田盆地北端部に形成された標高 105~120m の舌状丘陵上に立地する。
- (2) 今回の発掘調査は県営ほ場整備事業を原因とする事前調査として実施した。調査区は作業道・水路および切土による田面の予定範囲であり、発掘調査面積は 8,075m²である。
- (3) 確認した遺構は、竪穴住居跡 1 軒、貯蔵穴 6 基、落とし穴 6 基、近世墓 8 基、土坑 20 基、溝跡 10 条、柱穴 40 か所である。
- (4) 出土した遺物は、縄文土器（縄文時代早期後葉前半・茅山下層式並行期）、弥生土器（弥生時代後期後半・踏瀬大山 - 十王台式期）、ロクロ土師器（平安時代前葉後半・表杉ノ入式）、須恵器、近世・近代陶磁器、石器、火打石、ガラス小玉、金属製品（煙管・鉄鍋）、銅錢（寛永通寶）である。
- (5) 発掘調査成果を検討した結果、下記のことが明らかとなった。
 - ・縄文時代の落とし穴群、縄文 - 弥生時代の貯蔵穴群が確認され、縄文 - 弥生時代のある時期にそれぞれ狩猟場や食料貯蔵域として機能したことが判明した。
 - ・平安時代前葉後半の竪穴住居跡 1 軒が確認された。
 - ・江戸時代中期の近世墓 8 基が確認され、丘陵上に墓域を形成していたことが判明した。湿地際の単独墓からは鉄鍋が出土し、鍋被り葬が行なわれていたことが判明した。
- (6) 縄文 - 弥生時代の貯蔵穴群が確認されたことから、付近に集落跡が展開している可能性がある。
- (7) 縄文時代早期後葉前半の土坑から関東地方の茅山下層式に並行すると考えられる条痕文土器が出土し、県内初出の資料とみられる。当該土器群の分布を考える上で重要である。
- (8) 江戸時代中期の近世墓群は円田盆地における近世村落の営みを知る上で重要である。鍋被り葬墓は町内初出の事例であり、当時の葬送儀礼を考える上で興味深い事例である。

2. 六角遺跡・原遺跡

- (1) 六角遺跡・原遺跡は、宮城県南部の刈田郡蔵王町大字小村崎字上野・上野前・戸ノ内ほか地内に所在する。遺跡は蔵王町東部の円田盆地北部に形成された標高 90~99m の舌状丘陵上に立地する。
- (2) 今回の発掘調査は県営ほ場整備事業を原因とする事前調査として実施した。調査区は集落道工事の予定範囲であり、発掘調査面積は 3,114m²（六角遺跡 1,628m²、原遺跡 1,486m²）である。
- (3) 確認した遺構は、六角遺跡で竪穴住居跡 2 軒、柱列跡 2 条、井戸跡 1 基、土坑 1 基、柱穴 23 か所、原遺跡で竪穴住居跡 1 軒、柱穴跡 3 か所である。
- (4) 出土した遺物は、六角遺跡で縄文土器、土師器（古墳時代前期・塙釜式）、須恵器、ロクロ土師器（平安時代前葉後半・表杉ノ入式）、中世陶器（13~14 世紀）、石器、礫石器、石製品（砥石）、原遺跡で土師器（古墳時代前期・塙釜式）、焼成粘土塊である。
- (5) 発掘調査成果を検討した結果、下記のことが明らかとなった。
 - ・古墳時代前期の竪穴住居跡 2 軒が確認され、当該期の集落跡が存在することが判明した。
 - ・平安時代前葉後半の竪穴住居跡 1 軒が確認された。
 - ・鎌倉 - 南北朝時代の井戸跡 1 基が確認され、方形縦板組による井戸側の構造の一部が判明した。

- (6) 古墳時代前期の集落跡が確認され、六角遺跡の平成18年度調査で確認されていた当該期の集落跡が今回調査地点周辺まで広がっていることが判明した。
- (7) 鎌倉～南北朝時代の井戸跡が確認され、周辺に屋敷跡などが展開している可能性が考えられる。当該期の屋敷跡は周辺の十郎田遺跡、西屋敷遺跡でも確認されており、円田盆地北部における中世前半の村落景観を考える上で重要と考えられる。

3. 六角遺跡（近世墓）

- (1) 六角遺跡は、宮城県南部の刈田郡蔵王町大字小村崎字六角・六角地蔵・高野・上の前・雁柄橋・戸ノ内ほか地内に所在する。遺跡は蔵王町東部の円田盆地北部に形成された標高90~95mの舌状丘陵上に立地する。
- (2) 県営ほ場整備事業に伴い平成18・19年度に実施した発掘調査成果のうち、近世墓9基について追加報告した。
- (3) 出土遺物は銅銭（寛永通寶）、鉄銭（仙臺通寶？）、青銅製和鏡（蓬萊鏡）、煙管、不明鉄製品、ガラス製数珠玉、磁器輪花皿、染付磁器碗、陶器碗、木製挽物容器などである。
- (4) 発掘調査成果を検討した結果、下記のことが明らかとなった。
- ・出土遺物の特徴から、近世墓の年代は17世紀中葉～18世紀末頃の各時期と推定された。
 - ・近世墓はいずれも丘陵上に分布するが、17世紀中葉の1基が単独で分布し、17世紀後葉以降の8基はまとめて分布し墓域を形成していたことが判明した。
 - ・17世紀後葉以降の墓域では墓壙8基が線状に並び、東側から順に設けられたことが判明した。
- (5) 円田盆地の近世墓について検討した結果、下記のことが明らかとなった。
- ・六角遺跡・磯ヶ坂遺跡・前戸内遺跡で近世墓が確認され、年代は17世紀中葉～18世紀末頃（六角遺跡）、18世紀代（磯ヶ坂遺跡）、19世紀代（前戸内遺跡）と考えられる。
 - ・多くは低地に面した丘陵上に立地し、概ね10基前後のまとまりを形成するものも見られる。
 - ・上部に盛土を伴って確認されたものではなく、墓壙の平面形は長方形、方形、円形で、埋土の状況から埋葬様式には直葬墓、円形木棺墓、方形木棺墓があったと見られる。また、磯ヶ坂遺跡では鍋被り葬墓が確認されている。
 - ・喪棺の使用や武士階級を想定させる出土遺物が見られないことから、被葬者はいずれも庶民階層と考えられる。このうち、六角遺跡・磯ヶ坂遺跡の墓域は出土遺物の種類や量の豊富さから豪農クラスであった可能性が考えられる。
 - ・墓壙の配置や変遷から、六角遺跡・磯ヶ坂遺跡の墓域は一族墓、前戸内遺跡の墓域は集落単位の集団墓の可能性が考えられる。
- (6) 円田盆地の近世村落においては、17世紀後葉頃に豪農クラスの庶民階層が一族墓を形成していることが判明した。このことは、村落における墓制の変化が江戸周辺と大差ない時期に起こったことを示しており、当時の幕藩体制における農民支配や葬送儀礼の実態を知る上で重要と考えられる。

4. 今回報告した発掘調査成果は、円田盆地周辺に居住した当時の人々の具体的な暮らしぶりを知る上で貴重な手がかりとなるものである。

引用・参考文献（編著者名五十音順）

- 相原淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年 - 仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に -」『考古學雑誌』76-1 日本考古學會
- 赤星直忠・岡本勇 1957 「茅山貝塚」横須賀市博物館研究報告（人文科学）1
- 石川日出志 1990 「天王山式土器編年研究の問題点」北越考古学 3 北越考古学研究会
- いわき市教育委員会 1981 「朝日長者遺跡・夕日長者遺跡 - 古代集落跡の調査 -」『いわき市埋蔵文化財調査報告』6 岩越二郎・藤田定市・目黒吉明 1964 「踏瀬大山遺跡」『福島県史 第6卷 資料編I 考古資料』福島県
- 岩手県埋蔵文化財センター 1986 「閔沢口遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 95
- 氏家典典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」歴史 14 東北大史学会
- 岡本勇 1961 「三浦市鶴ヶ島台遺跡」横須賀市博物館研究報告（人文科学）5
- 加藤稔 1969 「縄文時代」『山形県史 資料編II 考古資料』山形県
- 加藤稔 1982 「縄文時代 早期」『村山市史 別巻1 原始・古代編』村山市
- 古泉弘 2001 「喫煙 2 煙管」「2 喫茶・飲酒・喫煙」「VI 江戸の生活文化」『図説 江戸考古学研究事典』 江戸遺跡 研究会編 柏書房
- 藏王町史編纂委員会 1987 「藏王町史 資料編I」
- 藏王町史編纂委員会 1989 「藏王町史 資料編II」
- 藏王町史編纂委員会 1993 「藏王町史 民俗生活編」
- 藏王町史編纂委員会 1994 「藏王町史 通史編」
- 関根達人 1999 「東北地方における近世食膳具の構成 - 近世墓の副葬品の検討から -」東北文化研究室紀要 40 東北大文学部東北文化研究室
- 関根達人 2000 「江戸時代の喫煙に関する考古学的検討 - 近世墓出土の煙管の分析を中心とした」文化 64-1・2 東北大学文学会
- 関根達人 2002 「死者を映した鏡 - 副葬品に基づく近世鏡の研究 -」弘前大学人文学部人文社会論叢 人文科学篇 7
- 関根達人 2003 「銅被り葬考 - その系譜と葬法上の意味合い -」弘前大学人文学部人文社会論叢 人文科学篇 9
- 瀬峰町教育委員会 1988 「下藤沢II遺跡 - 宮城県北部における奈良時代の住居跡・江戸時代の墓壙と墓標の調査 -」瀬峰町文化財調査報告書 6
- 仙台市教育委員会 1986 「新妻家墓地改葬調査報告」『年報7』 仙台市文化財調査報告書 94
- 仙台市教育委員会 2005 「洞ノ口遺跡 - 第1次・2次・4次・5次・7次・10次発掘調査報告書 -」仙台市文化財調査報告書 281
- 仙台市教育委員会 2010 「沼向遺跡第4～34次調査 - 宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書III -」仙台市文化財調査報告書 360
- 多賀城市教育委員会 1998 「大日北遺跡 - 近世墓の調査報告書 -」多賀城市文化財調査報告書 49
- 辻秀人 1994 「東北南部における古墳出現期の土器編年 - その1 会津盆地 -」東北学院大学論集 歴史学・地理学・史料学創立30周年記念 - 26
- 辻秀人 1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年 - その2 -」東北学院大学論集 歴史学・地理学 27
- 坪井清足 1953 「福島県天王山遺跡の弥生式土器 - 東日本弥生文化の性格 -」
- 中村五郎 1976 「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』 東北考古学会 東出版寧楽社
- 長佐古真也 2001a 「村落城墓地」「5墓地」「Ⅶ各地の遺跡」「図説 江戸考古学研究事典」 江戸遺跡研究会編 柏書房
- 長佐古真也 2001b 「多摩の農村墓地」「5墓地」「Ⅶ各地の遺跡」「図説 江戸考古学研究事典」 江戸遺跡研究会編 柏書房
- 成瀬晃司 2001 「陶磁器」「10 江戸から東京へ」「VI 江戸の生活文化」『図説 江戸考古学研究事典』 江戸遺跡研究会編 柏書房
- 福島県立博物館 1993 「企画展 東北からの弥生文化」
- 藤沢敦 2000 「阿武隈川下流域の前方後円墳（その1）」宮城考古学 2 宮城県考古学会
- 藤田定市 1950 「天王山遺跡の調査報告」
- 藤田定市 1951 「天王山遺跡の出土品について」
- 古田和誠 2011 「総括」『銀音堂山遺跡』宮城県文化財調査報告書 227 宮城県教育委員会
- 宮城県教育委員会 1980a 「東北自動車道遺跡調査報告書II（赤鬼上遺跡）」宮城県文化財調査報告書 63
- 宮城県教育委員会 1980b 「東北自動車道遺跡調査報告書IV（青木遺跡・伊原沢下遺跡・持長地遺跡）」

- 宮城県文化財調査報告書 80
 宮城県教育委員会 1981『東北自動車道遺跡調査報告書V（東山遺跡）』宮城県文化財調査報告書 81
 宮城県教育委員会 1984『東北自動車道遺跡調査報告書IX（二屋敷遺跡）』宮城県文化財調査報告書 99
 宮城県教育委員会 1989『亘理町三十三間堂遺跡ほか（戸ノ内脇遺跡・台遺跡）』宮城県文化財調査報告書 131
 宮城県教育委員会 1990『寂光寺跡ほか（白山遺跡ほか）』宮城県文化財調査報告書 135
 宮城県教育委員会 1991『合駁原遺跡ほか（中組遺跡ほか）』宮城県文化財調査報告書 140
 宮城県教育委員会 1996『一本杉窓跡群』宮城県文化財調査報告書 172
 宮城県教育委員会 2002『名生館遺跡ほか（崖田遺跡・都遺跡・新城館跡）』宮城県文化財調査報告書 188
 宮城県教育委員会 2003『壇の越遺跡ほか（壇の越遺跡・十郎田遺跡ほか）』宮城県文化財調査報告書 195
 宮城県教育委員会 2010『鍛冶沢遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 222
 宮城県教育委員会 2011『觀音堂山遺跡』宮城県文化財調査報告書 227
 宮城県多賀城跡調査研究所 1992『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』
 村田晃一 1994「土器からみた官衙の終末－東北地方の場合－」『第3回東日本埋蔵文化財研究会 古代官衙の終末をめぐる諸問題 第1分冊問題提起・各地方の概要』東日本埋蔵文化財研究会
 村田晃一 1995「宮城郡における10世紀前後の土器」福島考古 36 福島県考古学会
 柳澤和明 1994「東北の施釉陶器－陸奥を中心に－」『古代の土器研究・律令の土器様式の西・東 3 施釉陶器』『古代の土器研究会 第3回シンポジウム』古代の土器研究会
 山内清男 1939『十王台式』『日本先史土器図譜』I 先史考古学会

蔵王町文化財調査報告書

- 蔵王町教育委員会 1990『堀ノ内遺跡』蔵王町文化財調査報告書
 蔵王町教育委員会 1997『堀の内遺跡』蔵王町文化財調査報告書 1
 蔵王町教育委員会 2002『漁訪館前遺跡』蔵王町文化財調査報告書 2
 蔵王町教育委員会 2005『都遺跡ほか（都遺跡・崖田遺跡・新城館跡）』蔵王町文化財調査報告書 3
 蔵王町教育委員会 2006『車地遺跡・鍛冶屋敷遺跡ほか』蔵王町文化財調査報告書 4
 蔵王町教育委員会 2007『中沢A遺跡』蔵王町文化財調査報告書 5
 蔵王町教育委員会 2008『六角遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』蔵王町文化財調査報告書 6
 蔵王町教育委員会 2009a『戸ノ内遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』蔵王町文化財調査報告書 8
 蔵王町教育委員会 2009b『青竹遺跡』蔵王町文化財調査報告書 9
 蔵王町教育委員会 2011a『西浦B遺跡－商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査－』蔵王町文化財調査報告書 10
 蔵王町教育委員会 2011b『崖田遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』蔵王町文化財調査報告書 11
 蔵王町教育委員会 2011c『小原遺跡－特別養護老人ホーム増床事業に伴う緊急発掘調査－』蔵王町文化財調査報告書 12
 蔵王町教育委員会 2011d『十郎田遺跡1－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』蔵王町文化財調査報告書 13
 蔵王町教育委員会 2011e『十郎田遺跡2－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』SE66 戸跡出土木製遺物編 附 十郎田遺跡出土木製遺物に関する自然科学的分析』蔵王町文化財調査報告書 14
 蔵王町教育委員会 2012『西屋敷遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』蔵王町文化財調査報告書 15
 蔵王町教育委員会 2013『前戸内遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』蔵王町文化財調査報告書 16

【解説】

かけがえのない遺跡を未来へ

私たちの足もとには、昔の人びとが暮らした家の跡や、そこで使われた土器や石器などの道具が埋もれている場所があります。このように、昔の人びとの生活の跡が残されている場所を、「遺跡」と呼んでいます。遺跡は、長い歴史の中で大地に刻み込まれた私たち人間の生活の記憶なのです。

蔵王山麓の豊かな自然環境に恵まれた蔵王町には、私たちの祖先が残した多くの遺跡があります。人びとがいつ、どのようにして郷土蔵王に住み着いたのか。彼らは日々の生活をどのように送り、何歳まで生きたのか。土器づくりは誰の仕事だったのかー。興味の尽きないテーマです。

遺跡を調べることで昔の人びとの知恵に学び、私たちの歴史や文化をよく知ることは、私たち自身の生活を見直したり、将来を考えるためにとても大切な役割を果たしています。そのためには、長い歴史を経て今日に伝えられている大切な遺跡を、私たち国民共有の財産として、未来の子どもたちの世代へ守り伝えていかなくてはなりません。

遺跡を記録に残すための発掘調査

磯ヶ坂遺跡、六角遺跡、原遺跡は、小村崎地区のなだらかな丘の上に埋もれている昔の人びとの生活の跡です。小村崎・平沢地区の円田盆地では、水田や畑を使いやくすく作り変えるは場整備工事が計画されました。できるだけ遺跡を壊さないで工事を行なうために、地元地権者の皆さんでつくる蔵王町土地改良区や工事を行なう宮城県大河原地方振興事務所ではたくさんの工夫をしました。それでも、どうしても遺跡が壊れてしまう部分では、工事の前にどのような遺跡が残されているかを詳しく調べ、その様子を写真や図面に記録するために、蔵王町教育委員会が発掘調査を行なうことになりました。発掘調査では、たくさんの方々が汗を流しました。このように、たくさんの人びとの努力によって、磯ヶ坂遺跡などの記録を残すことができたのです。

発掘調査から見えてきた郷土の歴史

ここに刊行した「磯ヶ坂遺跡ほか発掘調査報告書」をひも解くと、雄大な蔵王山麓に抱かれた円田盆地に暮らした人びとの歴史であり、磯ヶ坂遺跡、六角遺跡、原遺跡のどれもが過去の人びとの暮らしを伝える重要な遺跡だったことが分かります。

磯ヶ坂遺跡では、縄文時代の人びとが狩りに用いた落とし穴や、縄文～弥生時代の人びとが食料を蓄えた貯蔵穴、今から1,100年ほど前の平安時代の住居跡、200～300年ほど前の江戸時代の庶民の墓地が発見されました。

縄文時代の落とし穴は、細長く深い溝のような形で、シカなどの動物が一度落ちたら抜け出せないようになっています。たくさんの落とし穴が列をなして掘られることも多いので、狩人たちが集団で獲物を追い込み、穴に落として捕らえたと考える考古学者もいます。磯ヶ坂の丘でも、縄文時代の狩人たちがこの「追い込み獣」を繰り広げたのでしょうか。また、貯蔵穴は丸く深い穴で、穴の上方が狭く、底の方が広い「三角フラスコ」のような形をしています。地面の下は温度や湿度の変化が少ないので、食料の貯蔵に適していました。このような「貯蔵の場」が作られたということは、近くに人びとが家をつくって暮らすムラができたことを示しています。冷蔵庫もない時代の、ムラの人びとの生活の知恵がここにありました。



磯ヶ坂遺跡の発掘調査 地面の土を意識深く削っていくと、昔の人々の生活の跡が見つかりました。

六角遺跡と原遺跡では、今から1,700年ほど前の古墳時代の住居跡が1軒ずつ見つかりました。住居跡は、地面を四角く掘り産めた上に柱を立て、地面近くまで屋根を葺き下ろした造りです。六角遺跡では以前の調査でも古墳時代の住居跡がまとまって見つかっているので、当時の集落がなだらかな丘の広い範囲に及んでいたことが分かりました。

また、六角遺跡では今から1,100年ほど前の平安時代の住居跡、700年ほど前の鎌倉～南北朝時代の井戸跡、200～370年ほど前の江戸時代の墓地が発見されました。

磯ヶ坂遺跡と六角遺跡で1軒ずつ見つかった平安時代の住居跡は、一見すると古墳時代の住居跡と同じような造りですが、屋内に煮炊きをするカマドが設けられていました。家の暮らしも、時代とともにさまざまな工夫が凝らされ、便利になったのです。

江戸時代の墓地と「イエ」

磯ヶ坂遺跡と六角遺跡で発見された江戸時代の墓地は、どちらも見晴らしの良い丘の上につくられています。人骨は一部しか残っていませんでしたが、お金やキセル、鏡、数珠、ハサミ、毛抜き、火打石、鉄鍋、茶碗など、埋葬された人の生前の生活を示す遺物が出土しました。お金は、三途の川の渡し銭、または極楽へ行くまでの旅費として家族が死者に持たせたものです。鏡は、江戸時代には女性の墓に多く副葬されました。出土した遺物の種類や量が豊富なので、庶民の中でも比較的裕福な豪農の一族の墓だったようです。

現在では、亡くなった人を火葬にして遺骨を先祖代々の墓に納めるのが普通ですが、当時の庶民の間では土葬が主流でした。一人亡くなるごとに墓穴を掘り、生前の愛用品などとともに遺体を土中に埋葬したのです。はじめはその時々で埋葬する場所が異なっていたようですが、次第に同じ家の一族が一定の場所にまとまって墓地を設けるようになりました。六角遺跡や磯ヶ坂遺跡などの調査から、円田盆地周辺の人びとがこのような一族の墓を設けるようになったのは、江戸時代前期の終わり頃（今から380年ほど前）であることが分かってきました。考古学者の中には、当時の農村に一族の墓が設けられるようになったのは、庶民が「佐藤家」や「我家」といった「イエ」のつながりをはっきりと意識するようになったからだと考える人もいます。私たちの「イエ」のルーツも、ひょっとしたらこのあたりにあるのかもしれません。

おわりに

このように、磯ヶ坂遺跡や六角遺跡、原遺跡のある丘には、縄文時代から現代にいたるまで、幾重にもわたって人びとの生活の痕跡が残されていることが分かりました。それぞれの遺跡で見つかる生活の跡はおぼろげで、決して目覚ましいものばかりではありませんが、それらをつなぎ合わせたり、見比べたりすることによって少しずつ、しかし着実に、日本の歴史が解明されていくのです。ここに記録された磯ヶ坂遺跡、六角遺跡、原遺跡の考古学的成果は、地域の歴史を解き明かす鍵として大変貴重なものです。



磯ヶ坂遺跡の貯蔵穴 三角フラスコのような形をした大きな穴です。どんな食料を貯蔵したのでしょうか。

報告書抄録

ふりがな	いそがきかいせきほか							
書名	磯ヶ坂遺跡ほか							
副書名	経営体育成基盤整備事業（県営は場整備事業）に伴う緊急発掘調査 <磯ヶ坂遺跡・六角遺跡・原遺跡>							
巻・次								
シリーズ名	藏王町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第17集							
編著者名	鈴木 雅							
編集機関	藏王町教育委員会							
所在地	〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北 10 Tel.0224-33-3008 Fax0224-33-3831							
発行年月日	西暦2014年(平成26年)3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	※※※	※※※	※※※	※※※	
いそがきかいせき 磯ヶ坂遺跡	宮城県刈田郡 蔵王町大字小 村崎字磯ヶ 坂・孤塚・向 原・門下・青 木屋敷地内	43010	05189	38°7'59"	140°41'35"	2009.4.2 2009.5.30 2009.10.1 2009.11.30	8,075m ²	経営体育成基盤 整備事業（県営 は場整備事業・ 円田2期地区）
らっかくいせき 六角遺跡	宮城県刈田郡 蔵王町大字小 村崎字六角・ 六角地蔵・上 野・上野前・ 龍東脇・雁柄 橋ほか地内	43010	05112	38°7'38"	140°41'34"	2006.05.15 2006.11.24	25,800m ²	経営体育成基盤 整備事業（県営 は場整備事業・ 円田2期地区）
はらいせき 原遺跡	宮城県刈田郡 蔵王町大字小 村崎字戸ノ 内・原東ほか 地内	43010	05112	38°7'39"	140°41'35"	2011.10.1 2011.11.25	1,628m ²	経営体育成基盤 整備事業（県営 は場整備事業・ 円田2期地区集 落道1号工事）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
磯ヶ坂遺跡	狩獵場跡	縄文	落とし穴 6 基	縄文土器	
	集落跡	縄文 - 弥生	貯蔵穴 6 基 土坑 6 基	縄文土器 弥生土器 石器（石核・剥片・砂片） 礫石器（石皿）	・茅山下層式並行期に位置づけられる条痕土器 ・踏瀬大山 - 十王台式並行期に位置づけられる複合口縁壺
	集落跡	平安	竪穴住居跡 1 軒	ロクロ土師器	・表杉ノ入式土師器
	墓地	近世	近世墓 8 基 土坑 1 基	銅鏡（寛永通寶） 銅製品（煙管、毛抜き） 鉄製品（和鉢、鉄鍋、 鉄釘、不明品） 金属製品（袋物留め金具） 石製品（火打石） ガラス製品（小玉） 木製板材、木片、骨片	・銀被り葬墓 1 基を含む
	不明	近代	溝跡 1 条	陶器猪口・小皿・搖跡 磁器碗・皿 瓦質土器火鉢	
		土坑 13 基 溝跡 9 条 柱穴 40 か所	縄文土器 弥生土器 陶器罐鉢		
六角遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居跡 1 軒	土師器	・塩釜式土師器
	集落跡	平安	竪穴住居跡 1 軒	ロクロ土師器	・表杉ノ入式土師器
	墓地	近世	近世墓 9 基	銅鏡（寛永通寶） 銅鏡（仙臺通寶？） 銅製品（煙管、和鏡） 鉄製品（鉄釘、不明品） ガラス製品（数珠玉） 陶器碗 磁器輪花皿、染付磁器碗 木製挽物容器 壁腹片、種子、木片、布片、骨片	・2006 年調査追加報告分
	不明	中世	井戸跡 1 基	中世陶器壺・片口鉢 礫石器（磨石・石皿） 縄文土器 土師器 ロクロ土師器 須恵器	
		柱跡 2 条 土坑 1 基 柱穴 23 か所	縄文土器 土師器		
	原遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居跡 1 軒	・塩釜式土師器
		不明	柱穴 3 か所	土師器	
要約	<磯ヶ坂遺跡> 縄文時代の落とし穴群。縄文 - 弥生時代の貯蔵穴群が確認され、縄文 - 弥生時代のある時期にそれぞれ狩獵場や食料貯蔵域として機能したことが判明した。土坑出土土器は縄文時代早期後葉前半・茅山下層式並行期の条痕土器、弥生時代後期後半・踏瀬大山 - 十王台式並行期の複合口縁壺などを含む。このほか、平安時代前葉後半の竪穴住居跡 1 軒、江戸時代中期の近世墓 8 基が確認された。近世墓は丘陵上に墓域を形成しており、当時の近世村落の営みを知る上で重要である。				
	<六角遺跡> 古墳時代前期の竪穴住居跡 1 軒、平安時代前葉後半の竪穴住居跡 1 軒、中世前半の井戸跡 1 基を確認した。古墳時代前期の集落跡は 2006 年の調査でも確認しており、集落の範囲が今回調査地点周辺まで広がっていたことが判明した。				
	2006 年の調査で確認した近世墓 9 基について今回追加報告した。墓の年代は 17 世紀中葉 - 18 世紀末頃の各時期と推定される。17 世紀中葉の 1 基は単独で分布し、17 世紀後葉以降の 8 基はまとまって分布し墓域を形成していた。墓壇の配置や変遷から墓域は一族墓と考えられ、出土遺物の種類や量の豊富さから被葬者は豪農クラスの庶民階層と考えられる。円田盆地の近世村落における墓制の変化が井戸周辺と大差ない時期に起こったことを示しており、当時の墓薄体制における農民支配の実態を知る上で重要と考えられる。				
<原遺跡>	古墳時代前期の竪穴住居跡 1 軒を確認した。南側に隣接する六角遺跡で確認した当該期の集落跡が、今回調査地点周辺まで広がっていることが判明した。				

蔵王町文化財調査報告書 第17集

磯ヶ坂遺跡ほか

—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—

2014年（平成26年）3月25日 印刷・発行

発行 蔵王町教育委員会

〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町円田字西浦北10

TEL 0224-33-3008 FAX 0224-33-3831

印刷 株式会社 津田印刷

〒989-1236 宮城県柴田郡大河原町字東原町13-5

TEL 0224-52-5550 FAX 0224-52-3097
